

ものである。□公——これは、彼我の見を離れたる公平無私の意。□王——これは、蘇子由が「無所不レ公、則天下將レ往而歸レ之矣。」と云つて居る通り、自から天下を統御するの意ではなく、天下の人人が、その人に歸順するの意に解するか、又は僧德清が「此眞常大道、人若得レ之於内、則爲レ聖、施之於外、則爲レ王。」と云つて居る通り、王者の資格を有するに至るの意に解すべきである。□王乃天——この天は、儒教で云ふ天ではなく、天地萬物の總和たる絶對を指したもので、「王たれば、もはや絶對そのものである。」と云ふのが、この言葉の含蓄である。□没身不殆——道に即せる者の永久不變性に就て云つたもので、「よし肉體を失つても、その人格たる道體は、何物の害をも受けな^い。」の意。

新釋 道の本體たる冲虚の窮極に達し、また、その屬性たる静寂の窮極に達すれば、この萬物の生滅起伏、變化轉變の絶間なき世の中に居ても、その活動しつつある萬物が、何れも虚無の大道にその根蒂を結びつけて居ることが悟れる。即ち、萬物は芸芸として活動して居ても、それを還元すれば何れも虚無、静寂の大道に歸著するのである。この大道に歸著して、はじめて静寂そのものが生じ、静寂そのものが生じて、はじめて個性の發生原に復歸することが出来、個性の發生原に復歸して、はじめて不生不滅の眞理が悟られるのであるが、この不生不滅の眞理の體驗を、絶對智と名

ける。若し、この不生不滅の眞理を悟らないならば、その人の言行は、すべて無明、妄想の發動であつて、そんな人のすることに、^{ろくな}事はない。何時^{いつ}何をしても、常に凶に限つて居る。この不生不滅の眞理を悟得すれば、その人の胸量は、天地の大と同じく、如何なるものでも包容することが出来る。この無限大の包容力があつて、始めて眞に公平無私たることが出来、眞に公平無私たる時に、はじめて天地萬物がその人に心服し、歸順するのである。その様になれば、その人は、もはや一箇の人間ではなく、實に天地萬物を包容せる絶對者であるが、道とは、要するにその様な絶對者に外ならない。道は永久不變であるから、その道に即^{すぐ}せる絶對者の道的人格は、何時までたつても、よし肉體を失つても、危害を受ける様な心配は毛頭ないのである。

考證

□「致虚極守静篤萬物並作吾以觀其復」と云ふ文句を、レックは、(L) “The (state of) vacancy

should be brought to the utmost degree, and that of stillness guarded with unwearrying vigour.

All things alike go through their processes of activity, and (then) we see them return (to their original state).” (空虚の状態を最高度に將來し、静寂の状態を倦まざる元氣を以て守護すべし。萬物は等しくその活動の過程を経、而して吾人はその元始の状態に復するを見る。)と英譯して居るが、私の見解から云へば、これは誤譯である。元來、この文句は、謂ゆる動中の静觀に就て云つたもので、

「致^レ虚^レ極、守^レ静^レ篤」の三言二句は、「萬物並作、吾以觀^レ其復^レ」に對する條件であるから、私はこの文句は、〔I〕“Having made ourselves devoid of every things and holding to the perfect stillness, we can see then all things, while in activity, are returning (to Tao).” じじも譯かへくぢはあるぢいかと思ふ。□「夫物芸^レ芸各歸^レ其根」以下の文句を、〔L〕“When things (in the vegetable world) have displayed their luxuriant growth, we see each of them return to its root. This returning to their root is what we call the state of stillness; and that stillness may be called a reporting that they have fulfilled their appointed end. The report of that fulfillment is the regular, unchanging rule. To know that unchanging rule is to be intelligent; not to know it leads to wild movements and evil issues. The knowledge of that unchanging rule produces a (grand) capacity and forbearance, and that capacity and forbearance lead to a community (of feeling with all things). From this community of feeling comes a kingliness of character; and he who is king-like goes on to be heaven-like. In that likeness to heaven he possesses the Tao. Possessed of the Tao, he endures long; and to the end of his bodily life, is exempt from any danger of decay.” (植物界のものが、蓊鬱たる生長を遂げた時、吾人はその各各のものが、その根に歸るを見る。この根に歸る

ことを、吾人は靜寂状態名のとく。而して、その靜寂は、それらのものが各自の任務を遂行せしことを報告するものと稱せらる。その遂行の報告は、正しき變らざる規則なり。その變らざる規則を知るは明智にして、それを知らざる時は、粗暴なる行動をなし、悪しき結果を生ずるに至る。その變らざる規則を知れば、偉大なる受容力と寛恕心とを生じ、その受容力と寛恕心とは、萬物と同心なる社會を生ずるに至る。この社會より王らしき人格を生じ、王らしきものは天らしきに至る。その天らしきことによつて、彼は道を有す。道を有することによつて、彼は久しく持續し、身を終るまで衰頹の危険を免がる。)と英譯して居るが、「物[○]芸[○]芸」の物を〔L〕“Things (in the vegetable world)” (植物界のもの)と見做し、これを狹義に解するのは原意を失つて居る。これは宜しく萬物の意に解して〔I〕“All things”と譯すべきである。「是[○]謂[○]復[○]命、復[○]命[○]曰[○]常」を「これを命を復すと謂ふ。命を復するを常と曰ふ。」の意に解し、これを〔L〕“That stillness may be called a reporting that they have fulfilled their appointed end. The report of that fulfillment is the regular unchanging rule.” (その靜寂は、それらのものが各自の任務を遂行せしことを報告するものと稱せらる。)その遂行の報告は、正しき變らざる規則なり。)と譯して居るのは、私の見解から云へば、確に誤譯である。彼はこの復[○]命を、上官と下官との間に行はれる受[○]命に對する復[○]命 (命令事項に就ての報告)

の意に解したものであるが、復命は、必ずしも命令されたことを完全に遂行した時のみに行はれるものではないから、茲にある復命は、「命令事項に就ての報告」の意に解すべきではなく、宜しく「天命（道的元始體）に復歸するの意に解すべきである。即ち、この場合の復の字は、『莊子』（繕性篇）に「繕性於俗學、以求復其初。」とある復、また李翺の『復性書』に於ける復と同意義の復であり、また常は、第一章にある常道・常名の常で、永久恒存の意であるから、「是謂復命、復命曰常、知常曰明、不知常、妄作凶、知常容」は、宜しく〔I〕“This state is called the reversion to destiny. This reversion is called the state of eternity. He who apprehends the state of eternity is called enlightened. He who does not apprehend the state of eternity will move blindly, and this will result in evil issues. He who apprehends the state of eternity will have the capacity to embrace all things.”とでも譯すべきではあるまいか。また「没身不殆」を、レツグが〔II〕“To the end of his bodily life, is exempt from any danger of decay.”（身を終るまで衰頹の危険を免がる。）と譯して居るのも誤譯である。この四言二句は、道に即して居る者の人格の永存に就て云つたもので、人間としての身體を失ひ、死に至つても、その人格は道と共に永存するの意であるから、これは宜しく〔I〕“Even after his death his eternal life is free from any danger.”又は〔II〕“Although his body

perish no danger can affect his eternity.”とでも譯すべきであらう。○「吾以觀其復」が「吾以觀レ復」となり、「各歸其根」が「各復歸其根」となり、「歸根曰靜」が「歸根曰靖」となり、「是謂レ復命」が、「靜曰レ復命」となつて居る異本もある。

【譯論】この第十六章の前半は、個性を冲虚の極、靜寂の極に即せしめて、宇宙人生に於けるあらゆる事象を凝視すれば、常に動き、常に流れ、常に生滅起伏せるものも、實は巨大なる道の本體なる不生不變の虚無に抱擁されて居ることに悟達し得ることを叙したものであり、その後半は、その悟達の現實生活上に於ける効果に就て云つたものであるが、結句の「没身不殆」は、道に即せる人格者の道的生命は、大道と共に永久不變であることを道破した言葉に外ならない。

第十七章 (太上章第十七)

本・文 太上、下不知有之。其次、親之譽之。其次、畏之。其次、侮之。故、信不足焉、有不信。猶兮其貴言。功成事遂、百姓皆謂我自然。

新讀方 太上には、下これあることを知らず。その次には、これに親しみこれを譽む。その次には、これを畏れ、その次には、これを侮る。故に、信足らざれば、信ぜざることあるなり。猶兮として、それを貴びたり。功成り事遂けて、百姓皆我が自然なりと謂ふ。

新字解 太上——これは太古時代の意であるが、支那の歴史に當てて云へば、三皇(天皇氏・地皇氏・人皇氏)の時代を指したものと見るべきである。□下不知有之——下は下民の意。之は統治者の意で、これは萬民が君主の存在を知らないことを云つたものである。□其次——第一の其次は、五帝時代(少昊金天氏・顓頊高陽氏・帝嚳高辛氏・帝堯陶唐氏・帝舜有虞氏)の時代を指し、第二の其次は、湯武(殷湯王・周武王)の時代を指し、第三の其次は、老子自身の時代、即ち春秋戰國時代を指したものと見ても差支ない。□故信不足焉有不信——これは、蘇子由が「吾誠自信、則以道御天下、足矣。唯不自信、而加之以仁義、而重之以刑政、而民始不信。」と云つて居る通り、「天下の人々が、爲政者を信

用せず、却て侮るに至るのは、爲政者たるものが自信なく、且つ天下の人人を信用しないからのことである。』の意で、第一の「其次」から、「侮之」までの言葉に對する結句である。故は、「要するに」の意。□猶兮其貴言——この猶兮は、第十五章にある豫兮、猶兮と同義であるが、茲では「用意周到にして」とか、「慎しみ深くして」とかの意に解すべきである。其貴言は、文字上から云へば、言責を尊重するの意であるから、無暗に朝令暮改の法律なんかを發布しないことを云つたものと解し得られないこともないが、前後の文勢から考察すれば、「猶兮其貴言」の一句は、「百姓皆曰我自然」に係る言葉で、百姓が不知有之る無爲の現實生活を送り、功成り事遂けても、別にそれが君主の仁徳によるものだとか、政府當局者の産業保護の賜物だとか云ふ無駄な無意義な阿諛は云はぬことを云つたものと解すべきである。要するに、貴言は「無駄口をたたかぬ」の意。□百姓皆謂我自然——これは、謂ゆる「日出而作、日入而息。鑿井而飲。耕田而食。帝力何有於我哉」と同意義の言葉で、天下の百姓が、無爲の治下に於て、君主の存在も認めず、またその威徳も認めずして、自分等の享有せる平和、幸福なる現實生活を、自然のことと信じきつて居ることを云つたもので、暗に「太上、下不知有之」に照應して居る。

新譯 太古の時代に於ては、何事も無爲に即して居たから、上にある者も無爲であり、下にある

者も無爲であつて、何等なんらの拘束も制裁もなかつた。故に、天下の人人は、自分達の上に君主があると云ふ様なことは少しも知らなかつたのである。その次の時代になると、天下の人人は、謂ゆる君主の仁政に浴し、その君主に對して親愛の情を懐いだき、その仁徳を稱譽する様になつた。その次の時代になると、君主の權威は、ますます帝國的、專制的になつて、天下の人人は、君主を畏怖する様になつた。その次の時代になると、君主があまり威張りすぎて、天下の人々を芻狗扱にする様になつたものだから、天下の人人は、却て君主を輕侮する様になつた。この様な結果になると云ふのも、實は、君主自身に誠信の念が缺け、天下の人人を信用しなかつたからのこと。天下の人人を信用しないものだから、仁政を布いたり、刑法を設けたり、護衛を嚴にしたり、その他色々無爲の道に反せる施設をしたりし、遂に天下の民衆に信を失ひ、却て輕侮されると云ふ羽目はめになつてしまつたのである。今の世の中は、上も下も、お世辭と阿諛おまつかとを美辭麗句でこねあけて、それを交換することが禮儀と心得て居る様であるが、太古の時代には、そんなことはなかつたものだ。太古の人は、そんな腹にもないことは、口に云はなかつた。彼等が自己の口外する言葉を尊重して、少しも無駄口を云はなかつたその謹慎深きことは、實に猶分たるもの。如何なる功績が完成せられ、如何なる事業が遂行せられても、彼等は、それが君主の恩徳によるものだとか、國務大臣の施政の宜

しきを得た結果であるとかそんなことは一切云はず、自分達の自然のことだと云つて居た。眞に要領を得たものではないか。

【考證】 □「太上下不知有之」と云ふ一句を、オールドは、〔O〕“In the first age of mankind the people recognised their superiors.”（人類の最初の時代には、人民は彼等の長者を認めたり。）と英譯して居る。これは、この句が「太上、下知有之」となつて居る刊本に従つたものと思はれるが、この句は「太上、下不知有之」となつて居るのが正しい。（『老子要註』参照）この句を、レッグは、〔H〕“In the highest antiquity, (the people) did not know that there were (their rulers).”（極めて古代には、人民は彼等の君主のありしことを知らざりしなり。）と英譯し、チャイルスは、〔G〕“In the highest antiquity, the people did not know that they had rulers.”（極めて古代には、人民は彼等が君主を有せしことを知らざりしなり。）と英譯して居るが、これは何れも正しき譯である。□「其次親之譽之其次畏之」と云ふ文句を、レッグは、〔L〕“In the next age they loved them and praised them. In the next they feared them; in the next they despised them.”（その次の時代には、彼等はいこれ（君主）に親しみ、これを譽めたり。その次の時代には、彼等はいこれを畏れ、その次の時代には、彼等はいこれを侮りたり。）と英譯して居るが、これは原文に一致せる適譯で

ある。□「故信不足焉有不信」と云ふ文句を、レツグは、[L]“Thus it was that when faith (in the Tao) was deficient (in the rulers) a want of faith in them ensued (in the people).” (故に、道に對する信が、君主に不充分なる時に、自然の結果として、君主に對する信の缺乏が、人民に生じて来る。)と英譯して居るが、「故信不足焉」の信は、これを[L]“Faith in the Tao” (道に對する信)と譯するよりも、[I]“Faith in the people.” (人民に對する信)と譯する方が、原意に近くなると思ふ。この文句を、オールドが、[O]“Where faith is lacking it does not inspire confidence.” (信の缺如せる所に於て、信は信頼を感得せしめず。)と英譯して居るのは、少しく意譯に失して居る様ではあるが、原意は擒へて居る様に思はれる。□「猶兮其貴言功成事遂百姓皆謂我自然」と云ふ文句に對するレツグの英譯を見るに、彼は「猶兮其貴言」の貴(動詞)の主格を“Those earliest rulers” (それらの太古の君主)となし、「功成事遂」の功・事も、その太古の君主に係るものと見て居る。またチャイルスの英譯では、貴(動詞)の主格が“The sage” (聖人)となり、功・事はその聖人に係けてあるが、私の見解から云へば、これは何れも誤譯である。なるほど「新字解」に記しておいた通り、「猶兮其貴言」の貴(動詞)を太古の君主に係けて見得られないこともないが、靜に前後の文章を精讀して見ると、この五言一句(猶兮其貴言)は、確に「百姓皆謂我自然」に係つ

て居ることが知れるから、この貴・功・事は、何れも不_レ知_レ有_レ之る太上の民に係けて見るのが正しいのである。今この見解によつて、この全文を英譯するならば、[I]“How cautious the people (in the highest antiquity) were in utterance! When they had completed their meritorious work, and performed their duties, they would say ‘We are all as natural as Nature is.’”とでもなすべきではあるまいか。○「太上下不_レ知_レ有_レ之」が「太上下知_レ有_レ之」となり、「其次親_レ之譽_レ之」が「其次親而譽_レ之」となり、「故信不_レ足焉有_レ不_レ信」が「故信不_レ足焉有_レ不_レ信焉」となり、「猶兮其貴言」が「猶兮其貴言哉」となり「百姓皆謂我自然」が「百姓皆曰我自然」となつて居る異本もある。

評論 この第十七章は、僧徳清が「此言上古無_レ知無_レ識、故不_レ言而信。其次有_レ知有_レ識、故欺僞日生。老子因見_三世道日衰_二、想復_三太古之治_二也。」と云つて居る通り、老子が、繁文より繁文に、縹禮より縹禮に、虚僞より虚僞に、頽廢より頽廢に推移變化せる世相を凝視し、そのさもしき様_ニに面をそむけて、太古無爲の治世を回想した言葉である。世に謂ゆる人文の進化、文明の進歩、制度の改善なるものが、人類の眞に衷心より要求し、熱望しつつある平和、幸福を生成せず、寸時の間斷もなく日夜増長しつつある虚僞と虚榮と、偽善と罪惡と、貪欲と利己主義との鐵面皮の上に行はれつつある美しき塗布作業にすぎざること、如實に體驗しつつある私共は、この古き老子の言葉の

第十七章

中に、新らしき意義を發見し得るではあるまいか。

第十八章 (大道廢章第十八)

本文 大道廢、有仁義。智慧出、有大僞。六親不和、有孝慈。國家昏亂、有忠臣。

新讀方 大道廢れて、仁義あり。智慧出で、大僞あり。六親和せずして、孝慈あり。國家昏亂して、忠臣あるなり。

新字解 □大道廢有仁義——これは、蘇子由が「大道之隆也、仁義行其中、而民不知。大道廢而後仁義見矣。」と云ひ、林希逸が「大道行則仁義在其中。仁義之名立、道漸漓矣。」と云つて居る通り、「世の中の人、仁だとか義だとか、仁義道德をやかましく云ふのは、大道の廢れてしまつて居る證據であつて、實はお目出たいことではない。」の意。この仁義は、智慧・孝慈・忠信をも包括して居る言葉である。□智慧出有大僞——冒頭の「大道廢」は、この句にも係り、この句は「大道廢、則智慧出、而有二大僞」の意。□六親不和有孝慈——冒頭の「大道廢」は、この句にも係り、この句は「大道廢、則六親不和、而有二孝慈」の意。六親と云ふ語に就ては、一三の異説があるが、茲では王弼の註

第十八章

の通り、父・子・兄・弟・夫・婦の意に解しておいて差支ない。□「國家昏亂有忠臣——冒頭の「大道廢」はこの句にも係り、この句は「大道廢、則國家昏亂、而有忠臣」の意。

新譯 世の中の人人は、仁義の宣傳だとか、禮儀の奨励だとか、社會道德の普及だとか云つて大騒ぎをなし、その大騒ぎが、お目出たい國家奉公だとか、表彰すべき社會奉仕だとか云つて居るが、實はそんなことをやる必要のあるのは、そもそも既に無爲の大道の廢れてしまつて居る證據ではないか。大道が廢れると、仁義の大騒ぎがはじまるばかりではなく、智慧の競争がはじまり、官立大學で大詐僞師の資格あるものを養成する様になる。そればかりではない。大道の廢れた結果、六親の自然愛は破壊され、父子、兄弟、夫婦が、色々な理由を楯にして、暗がりの恥を明るみにさらけ出す様になり、幾萬人の人から一人か二人の孝子、慈父が認められる様になる。大道の廢れた結果は、そればかりではなく、國家は昏亂するに至る。國家が昏亂するのは、國民の大半が、不忠不義のものになつたからのことである。何千年の間に、何億萬人の中から、一人や二人の忠臣、義士を見出して、それを崇拜して居る。これが果して、永遠より永遠に、平和、幸福を庶幾して居る國家のため、慶賀すべきことであらうか。

考證

□「大道廢有仁義」より、「國家昏亂有忠臣」までの全章を、レグは、〔I〕“When the

Great Tao (way or method) ceased to be observed, benevolence and righteousness came into vogue. (Then) appeared wisdom and shrewdness, and there ensued great hypocrisy. When harmony no longer prevailed throughout the six kinships, filial sons found their manifestation; when the states and clans fell into disorder, loyal ministers appeared.” (大道が守られざるに至りし時に、仁恵と正義とが流行するに至れり。而して、智慧と狡猾とか現はれたる時に、その自然の結果として、偉大なる偽善が生じたり。六親の間に、もはや調和の行はれざるに至りし時に、孝子は現出し、國家昏亂するに至りし時に、忠臣は現出したり。)と英譯して居る。この譯は、大體に於て原意を傳へて居るが、「有孝慈」を〔I〕“Filial sons found their manifestation” (孝子は現出せり。)と譯して居る所を見れば、レグは孝慈が孝子となつて居る刊本に従つたものと思はれるが、これは、孝慈の方が正しいから、この語は、チャイルスの譯の通り、〔G〕“Filial piety and paternal affection be- gin.” (孝行と父愛とが起る。)とするか、又は〔I〕“What are called filial piety and fatherly love come into vogue.”とでもすべきであらう。○「大道廢、有仁義」が「大道廢焉、有仁義」となり「智慧出、有大偽」が「智慧出焉、有大偽」となり、「六親不和、有孝慈」が「六親不和、有孝子」となり、「國家昏亂、有忠臣」が「國家昏亂、有貞臣」、又は「國家昏亂、有忠信」となつ

て居る異本もある。

評論 この第十八章は、孔子を中心とせる儒教の教理を揶揄し、且つそれを冷笑したものである。この章の思想表現の形式を考察して見ると、

—智慧出有大偽(個人的類廢)—

大道廢有仁義(根本的類廢) —六親不和有孝慈(家庭的類廢) —(儒教の活動舞臺)

—國家昏亂有忠臣(國家的類廢)—

と云ふ風になつて居るが、この章に於て、老子の力説せんとして居る所は、儒教は大道に即せざるもの、即ち既に頽廢してしまつて、大道の成分たる價值を失つて居る襤褸布を綴り合せて、美服を仕立てあけんとして居る様な教理である。そんなもので、どうして人心が誠實になり、家庭が圓滿になり、國家が平和になるものかと云ふ主張である。惟ふに、老子の晩年には、孔子の傳道も弘く行はれ、孔子の宣傳する所の儒教の教理は、頻頻と老子の耳に達して居たものに相違ない。而して、この『老子』『道德經』の中には、老子自身の反儒教的色彩が、隨處に散見するが、この第十八章の如きは、その濃厚なる一片である。

第十九章 (絶聖棄智章第十九)

本 絶_レ聖棄_レ智、民利百倍。絶_レ仁棄_レ義、民復_ニ孝慈。絶_レ巧棄_レ利、盜賊無_レ有。此三者、以爲文而未_レ足也。故令_レ有_レ所屬。見_レ素抱_レ樸、少_レ私寡_レ欲。

新讀 聖を絶ち智を棄つれば、民の利は百倍せん。仁を絶ち義を棄つれば、民は孝慈に復せん。巧を絶ち利を棄つれば、盜賊はあることなからん。この三者は以爲に文のみにして未だ足らざるなり。故に屬する所あらしめよ。素を見はし樸を抱き、私を少なくし欲を寡なからしめよ。

新解 絶聖棄智民利百倍——これは、『莊子』(胠篋篇)に「世俗之所謂至知者、有_レ不下爲_ニ大盜_一積_レ者乎。所謂至聖者、有_レ不下爲_ニ大盜_一守_レ者」_甲とあり、また同篇に「聖人生而大盜起。拑_ニ擊_レ聖人_一、縱_ニ舍盜賊_一、而天下始治矣。」とある思想と同じ思想に屬するもので、全く反儒教の言葉である。この利は、物質的利益の意ではなく、幸福とか平安とかの意である。 絶仁棄義民復孝慈——これは、蘇子由が「未_レ有_ニ仁_一而遺_ニ其親_一也。未_レ有_ニ義_一而後_ニ其君_一也。仁義所_ニ以爲_ニ孝慈_一矣。然及_ニ其衰_一也、竊_ニ仁義之名_一、以要_ニ利于世_一。于是、子有_ニ違父_一、而父有_ニ虐子_一。此則仁義之迹爲_レ之也。故絶_レ仁棄_レ義、民復_ニ孝慈_一。」と云つて居る通り、これも似而非仁者、似而非義人に對する老子の當擦である。 絶巧

糞利盜賊無有——これは、第三章に「不_レ貴_ニ難_レ得_レ之_レ貨、使_レ民不_レ爲_レ盜。」とあるのと同思想に屬する言葉で、これも時代の世相に對する老子の當擦である。巧は技術上の巧であり、利は實業上の利であつて、この利は「民利百倍」の場合の利とは、意義を異にして居る。□此三者——聖智・仁義・巧利の三を指したものの。□以爲——これは「惟ふに」の意で、「老子自身の所見では」の意。□文而未足也——これは、呂吉甫が「文而非_レ質。不_レ足而非_レ全。故絶而棄_レ之。」と云つて居る通り、「天下に流行して居る聖智・仁義・巧利なるものは、何れも形式上の名稱（文）にすぎないものであり、實質の缺如せる不完全なものである。」の意。この文は「論語」（雍也第六）に「質勝_レ文則野。文勝_レ質則史。文質彬彬、然後君子。」とある文と同義で、文飾のこと。□令有所屬——これは、僧德清が「令_ニ世人心志、有_レ所_レ係_ニ屬_レ於_レ樸素之道。」と云つて居る通り、「根蒂のなき、浮薄なる文（形式）を棄てて、實質なる道に即せしめよ。」の意。□見素抱樸——これは、呂吉甫が「見_レ素、則知_ニ其無_レ所_レ雜、而非_レ文。抱_レ樸、則知_ニ其不_レ散而非_レ不足。素而不_レ雜、樸而不_レ散、則復_ニ乎性初、而外物不_レ能_レ惑、而少私寡欲矣。」と云つて居る通り、文章の上から云へば、外に對しては、純一無雜なる實質的言行をなし、内にあつては、寂然不動の質朴なる道的個性を抱持することを云つたものであるが、實は「見_レ素抱_レ樸」は、「見_ニ素樸、抱_ニ素樸」とすべきを簡古にしたものであるから、社會的に活動する

にも、素樸を離れず、個人的に靜態にあるにも素樸を離れず、常に道と一如たるべきことを云つたものと解すべきであらう。素は、加工せざる純白の絹糸のこと、樸は、山林から伐り出したばかりの木材で、この素樸の二字は、自然に即せる道の表示語である。

新譯 世の中が末になれば、世の中は妙なことになる。イエス・キリストを擔ぎ廻る聖人業者、釋迦牟尼佛を擔ぎ廻る聖人業者、阿彌陀佛を餌にして金錢を釣りあげようとする聖人業者、觀音様、弘法大師、金毘羅様はおろか、狐の稻荷までも、金錢搾取の吸出し膏藥に使用して居る聖人業者、淺薄極まる智識を種に思想善導を狂叫して居る聖人業者、あらゆる聖人業者が、次から次と輩出して居る。それに又、何何博士とか、何何議員とか云ふ聖人、智者までも加はつて、世の中を搔き亂して居るものだから、一般民衆の迷惑は此上ない。世の中を平和、幸福にしようとするなら、まづそんな偽聖、偽智の徒を退治してかからなければならぬ。そんなものを退治してしまへば、民衆の平和、幸福は、百倍も増進するに相違ない。今の世の中に流行して居る仁義なるものも、また質物。そんな質物が流行して居るために、親を親とも思はぬ子供が天下に満ち、自分の子供を撲り殺す様な親が現はれるのである。民衆を眞の孝慈に導かんとするなら、質物仁義と絶縁するに限る。技術上の技巧、實業上の營利の觀念が發達したために、泥棒のやり方も随つて進歩し、石川五右衛

門そツちのけの泥棒が天下に満ちて居る。泥棒をなくしようとするなら、まづ巧利に對する欲望を棄てるに限る。元來、世の中の人人の珍重がつて居る聖智、仁義、巧利と云ふものが、何れも一種の色ペンキで、美しいのは表面だけ、一皮むけば、中には何も美しいものはない。あるのは醜惡至極の痕跡だけだ。こんな色ペンキを塗りつけて置いて、それが文明だとか文化だとか云つて居るから、實にたまらない。苟も、民衆を眞の平和、幸福にしようと思ふなら、彼等の現實生活を實質的根蒂に結びつけなければならぬ。その實質的根蒂に結びつけるとは、何のことか。それは個性の内外を素樸にし、私欲の念をなくすることを以て處世の常規とすることである。

考證

□「絶聖棄智民利百倍絶仁棄義民復孝慈絶巧棄利盜賊無有」の四言六句を、レックが、〔I〕“If

we could renounce our sageness and discard our wisdom, it would be better for the people a hundredfold. If we could renounce our benevolence and discard our righteousness, the people would again become filial and kindly. If we could renounce our artful contrivances and discard out (scheming for) gain, there would be no thieves nor robbers.” (若し吾人が、吾人の聖を絶ち、智を棄て能ふならば、それは民のために百倍も善きこととならん。若し吾人が、吾人の仁を絶ち、義を棄て能ふならば、民は再び孝順に且つ慈愛になるであらう。若し吾人が、吾人の巧妙なる考案を

絶ち、營利心を棄て能ふならば、世に盜賊はなきに至るであらう。)と英譯して居るのは、大體に於て、原文に忠實な譯であるが、「民復孝慈」は、〔I〕“The people would again become filial and kindly.” (民は再び孝順に且つ慈愛になるであらう。)と譯するよりも、寧ろ〔I〕“The people would return to filial piety and paternal love.”と譯した方が、原文に親しくなるではないかと思ふ。この四言一句を、オールドは、〔O〕“They might revert to their natural relations.” (彼等は彼等の自然の親族關係に復歸するであらう。)と英譯して居る。これは意譯に失しては居るが、却て老子の謂はんとして居る所に親しい様に思はれる。□「此三者以爲文而未足也故令有所屬見素抱樸少私寡欲」と云ふ文句に對する英譯は、レックのもチャイルスのもオールドのも、原文とは餘程離れて居る。惟ふにこれは、彼等が原文を私の讀方とは違つた風に讀んだからか、又は辭句の異つて居る刊本に從つたからかのことであらう。私の見解によつて、今この文句を英譯するならば、〔I〕“These three morals are genteel in appearance, but superficial lacking in substance. Therefore the people must be brought to Tao, so that they may be able, in their life, to show simplicity, embrace plainness, lessen selfishness and reduce worldly desires.”又は〔I〕“These three moral qualities are genteel in appearance, but lacking in substance. Therefore the people must be brought to Tao to enable

them to be simple, plain, unselfish and with a minimum of worldly desires.”とでもなすべきであらう。○「絶レ巧棄レ利盜賊無レ有」が「絶レ巧棄レ利盜跖無レ有」となり、「以爲文而未レ足也」が「以爲文不レ足」となり、「少レ私寡レ欲」が「少レ思寡レ欲」となつて居る異本もある。

評論 この第十九章は、第十八章に接続し、儒教の教理が、道に即して居らざるために、聖智、仁義、巧利なるものは、唯名稱のみであつて、何等の實質を有せず、その名稱の暗誦を強要するにすぎざる宣傳は、却て天下民衆の思想及び生活を攪亂し、社會的に多大なる罪惡を構成して居ることを指摘し、且つそれを痛罵し、最後に、道に即せる生活の様式を示したものである。『莊子』の中には、老子の思想を祖述して居る部分が頗る多いが、就中、その帙篋篇は、この第十九章の主張の最も大膽にして、且つ詳細なる論述であるから、この第十九章の理解を徹底せしむるために、その一篇を精讀すべきであらう。

第二十章 (絶學無憂章第二十)

絶レ學無レ憂。唯之與レ阿、相去幾何。善之與レ惡、相去何若。人之所レ畏、不可レ不レ畏、荒兮其未レ央哉。衆人熙熙、如ニ享ニ太牢、如レ登ニ春臺、我獨泊兮其未レ兆。如ニ嬰兒之未レ孩、乘乘兮若無レ所レ歸。衆人皆有レ餘、而我獨若レ遺、我愚人之心也哉。沌沌兮。俗人皆昭昭、我獨若レ昏。俗人皆察察、我獨悶悶。澹兮若海、矇兮若無レ所レ止。衆人皆有レ以、而我獨頑且鄙。我獨欲レ異ニ於人、而貴ニ食母。

新讀 學を絶たば憂なからん。唯と阿との、相去ることはいくばくぞ。善と惡と、相去ることはいかに。人の畏るる所は、畏れざるべからざるも、荒兮としてそれ未だ央らざるかな。衆人は熙熙として、太牢を享くるが如く、春臺に登るが如きも、我は獨り泊兮としてそれ未だ兆さず。嬰兒の未だ孩せざるが如く、乘乘兮として歸する所なきがごとし。衆人はみな餘ありて、しかも我は獨り遺れたるがごときも、我は愚人の心ならんや。沌沌兮たるのみ。俗人はみな昭昭たるも、我は獨り昏きがごとし。俗人はみな察察たるも、我は獨り悶悶たり。澹兮として海のごとく、矇兮として止

まる所なきがごとし。衆人はみな以することあるも、しかも我は獨り頑かつ鄙なり。我は人に異ならんことを欲して、而して食母を貴ぶなり。

【絶學無憂】かの永嘉玄覺の『證道歌』の冒頭にある「君不見、絶學無爲閑道人、不除妄想不求真」は、老子のこの言葉から換骨奪胎したものと思はれるが、要するに「絶學無憂」は、第三章にある「不尙賢、使民不爭」とか、第十八章にある「智慧而有三大偽」とかの思想に屬する言葉で、教育過重の弊害に就て云つたものである。【唯之與阿相去幾何】唯は、唯唯諾諾の唯で、敬意を含む應答の語、即ち「ハイ、かしこまりました。」の意。阿は、他に對して敬意を有せざる應答の語で、日本の女中や給仕や其他の人人の常にやつて居る通り、口からの應答でなく、口を閉ぢたまま鼻をして云はしめるウーでもなく、フウでもない音のする應答語のこと。相去幾何は、「前者(唯)は、阿を腹の中にかくしておいて、ある利己的目的のために、教育の効果を利用したる口さきでの唯であり、後者(阿)は、腹の中の阿を、無教育のためにそのまま正直に出した阿である。であるから、その實質を道的に批判すると、畢竟同一である。」の意。【善之與惡相去若】これも前句の構造と同じく、「世の中に於て、衆愚に善とせられて居るものと、惡とされて居るものとの間に、どれだけの差異があるか。甲の善とする所のものは、乙には惡であり、乙の善とする所のものは、甲には惡であつて、世上一般の善惡の差別は、各自の利己心からの判定であるから、善と謂ひ、惡と謂ふも、その實質は別に相異つたものではない。」の意。何若は、「これどうちや」の意であるが、幾何と同義と見て差支ない。【人之所畏不可不畏】これは、「世上一般の人人の畏敬すべきものは、老子自身も畏敬せざるを得ない。必ず畏敬する。」の意。【荒兮其未央哉】荒兮は、あるものもあるものとの間に存する距離の廣大なることを意味する語で、この一句は、世人の所畏と老子の所畏との間に、大差あることを云つたものであつて、通俗的に云へば、「同じ畏敬するのでも、畏敬の仕方に大差がある。」の意。【無無】これは嬉嬉と同義で、樂しみ嬉しがること。【太牢】この語の本來の意義は、祭祀の犠牲にする牛・羊・豕の三種の動物の總稱であるが、轉訛語としては山海の珍味を具備せる膳羞のこと。【登春臺】この語は、『老子覈詁』に叙述してある通り、古來、「春登臺」と主張する學者と、「登春臺」と主張する學者とあるが、私の見解によれば、「登春臺」の方が正しい。而して、春臺とは、男女交媾の寢臺のことであつて、登春臺は、その實行を意味するのである。(考證参照)【泊兮其未兆】泊兮は、港灣に歸泊せる船舶の如き靜謐なる様子を云つたもの。未兆は、未だ何れに向ふと云ふ動機のなきことで、無執意、無執著の意。【未孩】これは、未だ春情の發動せざること、性慾の念の毛頭もなきこと。【乘乘兮若無所歸】これは、沈

沈

一貫が「若^{ごとく}虚舟泛泛而東西、木葉飄飄而高下、不知^レ風之乘^レ我、我之乘^レ風、莫^レ知^レ所^レ往也。」と云つて居る通り、個性を全宇宙に即せしめて居て、道と共に進み、道と共に歩み、道と共に起臥して居るから、全宇宙の中で活動して居ても、後になつて別に何處に歸著すると云ふことのなきことを云つたものである。□衆人皆有餘而我獨若遺——これは、僧德清が「衆人智巧多方、貪^レ得無^レ厭。故曰^レ有^レ餘。我獨忘^レ形去^レ智。故曰^レ若^レ遺。遺猶^レ忘^レ失^レ也。」と云つて居る通り、衆人の有に走り、老子の無に即せることを云つたものである。□沌沌兮——これは、蘇子由が「若^{ごとく}愚而非^レ愚也。」と云つて居る通り、蘇軾の謂ゆる「大智若^{ごとく}愚」き有様を形式した言葉。□昭昭——これは、僧德清が「謂^レ智巧現^レ於外也。」と云つて居る通り、外見の利巧相に見えること。□若^{ごとく}昏——これは、第七章に「被^レ褐懷^レ玉」とある様子を云つたもので、外見の利巧相に見えざることを云つたもの。□察察——これは、第五十八章に「其政察察」とある察察と同じく、小賢くて、事物の處理にこそせし、くだくだしくすること。□悶悶——これも第五十八章に「其政悶悶」とある悶悶と同じく、察察の反對のことを意味する言葉で、老子の謂ゆる「君子盛徳、容貌若^レ愚。」の意を含める語。□澹兮——廣^{ひろびろ}廣として靜なる貌。□兮兮似無所止——これは、僧德清が「飄然無^レ著、若^{ごとく}長風之御^レ太虛。」と云つて居る通り、萬里の長風が、大空を吹き走り、停止する所なきことを以て、聖人の無礙の行動を表示した言葉である。□有^レ以——この以は、用又は自恃の意で、自己の能力を恃み、又は、何かに就て自信を以て居ること。□頑且鄙——頑は、環境の支配を受けざる不動の意。鄙は、文飾なき質素のこと。□貴^レ食母——この食母は、「老子元翼」に「食、音嗣。食母、乳母也。具^レ禮記内則篇」とある通り、「禮記」(内則第十二)に「大夫之子有^レ食母、士之妻自養^レ其子。」とある食母、即ち乳母のことであるが、貴^レ食母とは、「焦氏筆乘」に「以^レ衆皆逐^レ其子、我獨貴^レ其母、不^レ能^レ不^レ與^レ衆異^レ耳。故謂^レ之^レ食母。」とある通り、天地萬物化育の本源たる道を第一とすることを云つたものである。(考證)参照

動を表示した言葉である。□有^レ以——この以は、用又は自恃の意で、自己の能力を恃み、又は、何かに就て自信を以て居ること。□頑且鄙——頑は、環境の支配を受けざる不動の意。鄙は、文飾なき質素のこと。□貴^レ食母——この食母は、「老子元翼」に「食、音嗣。食母、乳母也。具^レ禮記内則篇」とある通り、「禮記」(内則第十二)に「大夫之子有^レ食母、士之妻自養^レ其子。」とある食母、即ち乳母のことであるが、貴^レ食母とは、「焦氏筆乘」に「以^レ衆皆逐^レ其子、我獨貴^レ其母、不^レ能^レ不^レ與^レ衆異^レ耳。故謂^レ之^レ食母。」とある通り、天地萬物化育の本源たる道を第一とすることを云つたものである。(考證)参照

新譯 教育の普及も萬更悪いことでもなからうが、今の様に學校經營が全く商業化して、利慾にぬけ目のない連中が、金持ちに投資させて學校を開設する様になつては、世の中も、もはや末である。教育振興のお蔭で、監獄の囚徒の智的素質は、大に向上して來たかも知れないか、その反對に警官や獄吏の智的素質は低下して來て居るではないか。これが國家の大なる憂でなくて何か。そんな立派な罪人を作る様な教育は、やめた方が、國家の大憂をなくし、社會の罪惡をなくすることになりはせぬか。教育のお蔭で、人人の言葉もよほど上品になつて來た様だが、その上品な言葉は、上品な腹の中から湧き出るのではなく、實は唇と舌との藝に外ならないではないか。唯と答へよう

が、阿と答へようが、腹の中に敬意が缺如して居るからには、何れも同じこと、その實質の上には少しも差異はない。今の世の中の善惡の標準は、まづ金錢だ。金錢があれば善人になれるが、金錢がなければ善人扱ひにして貰ふことは、まづ望みなしである。であるから、今の世の善は、必ずしも善ではなく、惡も必ずしも惡ではない。惡人が金錢の力を借つて、善人を監獄にやる例はいくらもある。かうなつては、現代式の善と惡とは、その間に實質上の差異はつけられないではないか。斯く云ふ老子だつて、世の人人の畏敬すべきものに對して畏敬はするが、形式と表面とのみに拘泥して居る世の人人と、實質を第一とする老子との間には、畏敬の表現の上に百萬里もの差異があるのであることを知つて貰ひたい。世の中の人人の生活状態を見ると、彼等は謂ゆる利那的享樂に耽溺することを能事とし、濼濼として太宰の饗應を享けたり、春臺の上で快感を續けたりする様なことをやつて居るが、この廣い世の中に、老子だけは、靜寂に包まれ、何物にも執著することなく、何物をも欲求することなく、未だ春情を解せざる小兒の如く、無邪氣な月日を送り、何處に落ちつくことと云ふことなく、虛無の大道をぶらついて居るのである。世の中の人人は、誰も彼も、常に何物かを求めんとして、日夜奔走して居るが、老子だけは、一切を忘失してしまつて居る。併し、これは老子の心が馬鹿者の心と同一であると云ふ譯ではなく、ただ沌沌兮として居るまでのことサ。世

の中の人人は、誰も彼も、如何にも利巧相な面をして居るが、老子だけは昏のごとしだ。世の中の人人は、誰も彼も、小賢い風をして居るが、老子だけは悶悶だ。が、老子の心は大海の如く廣廣として靜であつて、長風の天空を吹き廻つて居る如く、虛無の中を活動し、寸時もやまない。世の中の人人は、誰も彼も、吾等は何でも知つて居り、何でも出來ると云ふ様な風采をして居るが、老子だけは頑にして且つ鄙である。元來、老子は世の中の人人とは異つた人格の所有者である。世の中の人人は、誰も彼も、道の子孫とも稱すべき眼前の事物に拘泥して居るのであるが、老子はそれを化育して居る食母(道)が慕はしいのである。

【考證】 □「絶學無憂」と云ふ四言一句を、レツグが、〔L〕“When we renounce learning we have no troubles.” (吾人が學を絶つときに、吾人に憂あることなし。)と英譯して居るのは、原文に忠實な譯である。 □「唯之與阿相去幾何善之與惡相去何若」と云ふ文句を、チャイルスは、〔G〕“Between yes and yea, how small the difference! Between good and evil, how great the difference!” (唯と阿との間の差異は、如何に小なることよ。善と惡との間の差異は、如何に大なることよ。)と英譯して居るが、この譯文は、原意を失つて居る。この文句は、老子が時代の虛禮と偽善とに激昂して發した言葉で、世人の謂ゆる唯と阿とは、言葉の發音上に於てこそ相違あれ、その發言の動機に於て

は、畢竟同一。また世人の謂ゆる善と惡とも、名稱上の相違のみで、實質上に於ては、相違の存せざることを喝破した言葉であるから、これは〔I〕“Is there any difference between the yes denoting willingness and that denoting unwillingness? Is there any difference between things considered to be good and those considered to be bad? 又は〔II〕“Is there any difference between the yes that denotes willingness and the yes that denotes unwillingness? Is there any difference between the yes between things considered good and things considered bad?”とでも譯すべきではあるまいか。□「人之所以畏不可不畏荒兮其未央哉」と云ふ文句に對する英譯は、レツグのもオールドのもヂャイルスのも、全く原意に觸れて居ない。私の見解によつて、これを英譯するならば、これは〔I〕“I respect all that ought to be respected in the world, but there is a great difference between my way of respecting and the way of others.”とでもなすべきであらう。□「衆人熙熙如享太牢如登春臺」といふ文句を、ヂャイルスは〔G〕“All men are radiant with happiness, as if enjoying a great feast, as if mounted on a tower in spring.”(すべての人は、大なる饗宴を享樂せる如く、春季に樓臺に登りしが如く、幸福に光り輝けり。)と英譯し、レツグも、これと同意義に英譯して居る。これは、「如レ登春臺」が「如レ春登春臺」となつて居る刊本に従つたものと思はれるが、これは、河上公本にある如く、「如レ登春臺」とあるのが正しい。「登春臺」は、「男女交媾のお床入り」のことであるが、惟ふに「老子」が後世に至り、儒教の學者に愛讀される様になつてから、儒教思想によつて「如レ登春臺」が「如レ春登春臺」と改訂されたものであらう。この文句を、オールドは、〔O〕“They are filled with ambition, as the stallion ox is filled with lust” (彼等は種牛が姪慾に満たされ居る如く、野心に満たされ居るなり。)と英譯して居るのは、全く誤譯であるが、彼が茲に、“Lust” (姪慾)と云ふ文字を使用して居る所を見れば、彼は春臺の含蓄せる意義を擒へて居るものの様に思はれる。不圖すると、オールドは、この文句を「如レ太牢登春臺」の意にとり、太牢を種牛(去勢せざる牡牛)、春臺を色情の意に解したのもかも知れないが、私の見解によつて、この文句を英譯するならば、〔I〕“All men look happy and joyous as if they have had a great feast, as if they are enjoying sexual affection.”と露骨に譯するか、又は〔II〕“All men look happy and joyous as if they have had a great feast, or are intoxicated with love.”とでもなすべきであらう。□「我獨泊兮其未央兮願之未孩乘乘兮若無所歸」と云ふ文句を、レツグは、〔I〕“I alone seem listless and still, my desires having as yet given no indication of their appearance. I am like an infant which has not yet smiled. I look dejected and forlorn, as if I had no home to go to.” (我が欲望は未だ兆さず。我ひとり茫然とし

第二十章

て静なり。我は未だ微笑せざる小兒の如し。我には歸るべき家屋なきが如く、沮喪して孤獨なり。と英譯して居るが、原意には多少觸れて居るにしても、適譯とは稱し難い。私の見解では、この文句は、〔I〕“I am alone still and quiet, showing as yet no sign of activity. I am like a child who has not yet matured. I am always wandering about, as if I had no home to return to.”とでも譯すべきであらう。□「衆人皆有餘而我獨若遺我愚人之心也哉沌沌兮」と云ふ文句を、レツグは、〔I〕“The multitude of men all have enough and to spare, I alone seem to have lost everything. My mind is that of a stupid man; I am in a state of chaos.”(群衆は、すべて多くを有し、尙ほ餘りあり。我は獨りすべてを失ひたるが如し。我の心は愚人の心なり。我は渾沌たる状態にあり。)と英譯して居る。「衆人皆有餘而我獨若遺」に對する譯文は、原意を傳へて居るが、「我愚人之心也哉、沌沌兮」に對する譯文は、私の見解とは相違して居る。惟ふにレツグは、他の多くの學者と同じく、この文句を「我の心は愚人の心なるかな。沌沌兮たり。」の意に解したものと思はれるが、この文句は僧德清が「衆人智巧多方、貪得無厭。故曰有餘。我獨忘形去智。故曰若遺。遺、猶忘失也。然我無知無我、豈眞愚人之心也哉。但只渾渾沌沌、不與物辨、如レ此而已。」と云つて居る通り、老子自身の若レ遺の状態は、世の愚人の愚にして若レ遺とは、大に相違して居ることを云つたもので

あるから、私は、この全文を〔I〕“All men have plenty but want more, while I alone seem to have lost all that I had. My poverty in intelligence is not the same as that of a fool, but I am in state of obscurity.”とでも譯すべきではないかと思ふ。□「俗人皆昭昭我獨若昏俗人皆察察我獨悶」と云ふ文句を、レツグは、〔I〕“Ordinary men look bright and intelligent, while I alone seem to be benighted. They look full of discrimination, while I alone am dull and confused.”(常人は恰憫なるが如く、智慧あるが如くに見ゆるも、我は獨り無智なるが如く見ゆ。彼等は等差の見解に満たされて居るも、我は獨り鈍くして亂れ居れり。)と英譯して居るが、察察を〔I〕“Full of discrimination” (等差の見解に満たされ)、悶悶を〔I〕“Dull and confused” (鈍くして亂れ)と譯して居るのは、誤譯ではないかと思はれる。私の見解によれば、この全文は〔I〕“The common people look bright and intelligent, while I alone seem to be in darkness. The common people look alert and smart, while I alone am listless.”とでも譯すべきであらう。□「濔兮若海濔兮若無所止」と云ふ文句を、チャイルスは、〔G〕“I am unsettled as the ocean, drifting as though I had no stopping-place.”(我は止まる所なきが如く漂流し、大海の如く不安定なり。)と英譯して居るが、多分これは、この文句が「忽兮若海、漂兮若無所止」とある刊本に従つたものと思はれる。私の見解に

よつて、これを英譯するならば、(I) "I am vast and calm as the ocean. I have no place to stop, like the high wind blowing through the sky." ともなすべからう。□「衆人皆有以而我獨頑且鄙」と云ふ文句が、チャイルスが、(G) "All men have their usefulness; I alone am stupid and clownish." (すべての人は、各自有用性を有するも、我は獨り遲鈍にして粗野なり。)と英譯して居るのは、誤譯とは云へないが、頑且鄙は、(H) "Obstinate and rustic" と譯した方が、原意に親しい様に思はれる。□「我獨欲異於人而貴食母」と云ふ文句を、チャイルスは、(G) "Lonely though I am and unlike other men, yet revere the foster-mother, Tao." (我は孤獨にして他の人人に異なるも、食母たる道を貴ぶ。)と英譯して居る。惟ふに、これは「我獨欲異於人」が「我獨異於人」ことなつて居る刊本に従ひ、それを「我は孤獨にして、人に異なる。」の意に解しての譯と思はれるが、この場合の獨を孤獨(形容詞)の意にとるのは誤解である。私の見解によれば、この文句は、(I) "Desiring to be different from all others, I glory in Tao, the nursing mother." とも譯すべきではあるまいか。○「善之與惡相去」が「美之與惡相去」となり、「荒兮其未央哉」が「荒兮其未央」となり、「如登春臺」が「如春登臺」となり、「我獨泊兮其未央」が「我獨魄兮其未央」となり、「若嬰兒之未孩」が「若嬰兒未孩」となり、「乘乘兮若無所歸」が「儻儻兮其不

レ足以無所歸」となり、「我愚人之心也哉」が「我愚人之心」となり、「我獨若昏」が「我獨昏昏」となり、「澹兮若海」が「淡兮其若海」又は「忽兮若海」となり、「飄兮若無所止」が「飄兮似無所止」、又は「漂兮若無所止」となり、「我獨欲異於人」が「我獨異於人」となり、「貴食母」が「貴求食於母」となつて居る異本もある。

この第二十章は、第十八章及び第十九章に接續し、「學而時習之不亦説乎」(論語)學而

第一)から出發して居る儒教に對する反逆の叫びを以てはじまり、老子の環境に群れる民衆の生活状態と、老子自身の生活状態とを對比して、暗に民衆の衒氣、虛榮、淺薄、我慾を嗤笑したものである。

第二十一章 (孔德之容章第二十一)

【本】又 孔德之容、惟道是從。道之爲物、惟恍惟惚。惚兮恍兮、其中有象。恍兮惚兮、其中有物。窈兮冥兮、其中有精。其精甚眞、其中有信。自古及今、其名不_レ去。以閱_二衆甫_一。吾何以知_二衆甫之然_一哉。以_レ此。

【新讀方】孔徳の容は、ただ道にこれ従ふなり。道の物たる、これ恍たりこれ惚たり。惚兮たり恍兮たるも、その中に象あり。恍兮たり惚兮たるも、その中に物あり。窈兮たり冥兮たるも、その中に精あり。その精たるや甚だ眞にして、その中に信あり。古より今に及びて、その名は去らず。以て衆甫を閱ぶ。吾なにを以て衆甫の然ることを知れるや。これを以てなり。

【新字解】孔徳——この語を、大徳、盛徳の意に解して居る學者もあるが、これは儒教的見解であつて、老子の思想から離れて居る。茲に孔徳とは、王弼が「孔、空也。惟以_レ空爲_レ徳。然後乃能動作從_レ道。」と云ひ、「老子元翼」に「孔、谷也。大也。孔之徳、大虚也。唯道從_レ虚。虚不_二自虚_一。」と云つて居る通り、「冲虚の徳」、「道の徳」、即ち、老子の理想たる虚無に即せる徳の意である。【容——

これは第十五章に「故強爲_二之容_一」とある容と同じく、形容とか、表現とか、具體化とかの意。

【惟道是從——これは、人間が現實生活の上に、道に従つて、道と一如になつて行住坐臥する所に、孔徳の具體化の行はれることを云つたものである。【道之爲物——これは「道の實體は如何なるものであるかと云ふに」の意。【惟恍惟惚——この恍・惚は、第十四章に「是謂_二惚恍_一」とある恍惚と同じく、ある様に見えてなく、なき様に見えてあること。古訓には「それかあらぬか」とある。【有象——これは、日月、星辰の如きものの存在することを云つたもの。【有物——これは草木禽獸の如きものの存在することを云つたもの。【窈兮冥兮——窈・冥は、王弼が「深遠之嘆。深遠不可_二得而見_一。」と云つて居る通り、深遠、幽昏なること。【有精——これは、宇宙間の事物の、それぞれ各自の特性を固有して居ること。【有信——これは、有_レ精に虚偽のなきこと。【自古及今其名不去——これは、蘇子由が「古今雖_レ異、而道則不_レ去。故以_レ不_レ去名_レ之。」と云つて居る通り、道の一名なる冲虚の名は、永久に不滅であるの意。【閱衆甫——閱は、統轄すること。衆甫は、「萬物の元始」の意に解しても、又は、甫の字には、美の義があるから、第一章にある「衆妙」の意に解しても差支ない。即ち、閱_二衆甫_一は、萬物之母の意に解するか、又は、衆妙之門の意に解すべきである。【衆甫之然——これは、衆甫を閱ぶる事實を指したもの。【以此——この此は、恍兮、惚兮、窈兮、冥兮を

指したもので、以レ此（これを以てなり）は、「この恍惚兮たり、窈冥兮たる現象の中に於てなり。」の意。

新譯

冲虚の道の徳を具體化せんには、如何になすべきであるかと云ふに、それは、私共お互がこの現實の生活上に於て、道に一如せる言行をなすことより外に方法はないのである。元來、この道と云ふものは、恍惚たるもので、あるのかと思へばなく、ないのかと思へばあると云ふ實に把捉し難いものである。併し、そのないのかと思へばある、あるのかと思へばないと云ふ中にも、日月星辰、雷光石火の如きものが存在し、そのあるのかと思へばない、ないのかと思へばある中にも、草木禽獸は發育し、窈兮たり冥兮たる中にも、道の純粹性は保持され、鶴の脚は長く、鴨の脚は短い。その純粹性は極めて眞實で、道の中には常に信實が存在し、去年の鶴の脚も長く、今年も同様長し。古代より現代に至るまで、冲虚なる無の名は、不滅であるが、この無が天地萬物の衆甫、衆妙を統轄して居るのである。如何にして老子は無が衆甫を統轄して居ることを知るかと思ふに、それは、その冲虚なる道が、恍惚として、惚兮として、窈兮として、冥兮として、この現象界に活動して居る所を凝視して居れば知れるのである。

考證

□「孔徳之容惟道是從」と云ふ文句をチャイルスは、〔G〕“The mightiest manifestations of

active force flow solely from Tao.”（活動の最も偉大なる顯現は、ただ道より流れ出づ。）と英譯しオールドは、〔O〕“The greatest virtue is in simply following Tao, the intangible, inscrutable.”（偉大なる徳は、ただ觸知すべからざる、且つ測度すべからざる道に従ふにあり。）と英譯して居る。後者は「道之爲物、惟恍惟惚」の四言二句を「惟道是從」の句につけ、これを道の形容句として、“the intangible, the inscrutable”（觸知すべからざる、且つ測度すべからざる）と譯したものと思はれるが、前者よりも原意によく觸れて居る様に思はれる。私は、この文句を〔I〕“The virtue of Tao manifests itself where Tao is followed.”と譯してはどうかと思ふ。□「道之爲物惟恍惟惚」から「其中有信」までの文句を、チャイルスは、〔G〕“Tao in itself is vague, impalpable, how impalpable, how vague! Yet within it there is form. How vague, how impalpable! Yet within it there is substance. How profound, how obscure! yet within it there is a vital principle. This principle is the punitessence of reality, and out of it comes truth.”（道の物たる模糊たり、朦朧たり。朦朧たり模糊たるも、その中に象あり。模糊たり朦朧たるも、その中に物あり。深奥たり、陰暗たるも、その中に生氣あり。この生氣は實在の神髓にして、それより眞理は出で來るなり。）と英譯して居るが、如何に譯しても、原文の意を的確に傳へることは、至難であるから、まづこの様に譯するより外、詮方あるまい。□「自古及今其名不去」の四言二句を、チ

ヤイルスは、〔G〕“From of old until now, its name has never passed away.”（古より今に至るまで、その名は去らず。）と英譯し、オールドは、〔O〕“From eternity until now its nature has remained unchanged.”（永遠より今に至るまで、その天性は不變のまま存せり。）と英譯して居るが、これは、何れも原意を傳へて居る。□以閱衆甫吾何以知衆甫之然哉以此」と云ふ文句を、ヂヤイルスは〔G〕“It watches over the beginning of all things. How do I know this about the beginning of all things? Through Tao.”（それは萬物の始を護る。我は如何にして、この萬物の始を護ることを知るや。道によつてなり。）と英譯し、オールドは、〔O〕“It inheres in all things from their beginning. How do I know of the origin of things? I know by Tao.”（それは萬物の始より、本來萬物に存在するなり。如何にして我は事物の元始を知るか。我は道によつて知るなり。）と英譯して居るが、私の見解から云へば、これは、何れも原意に遠ざかつて居る。私は、これを〔D〕“It(Tao) embraces all the beauty and mystery of things. How do I know that all the beauty and mystery of things are embraced by Tao? Through the phenomena of Tao.”とでも譯したなら、多少原意に親しくなるではないかと思ふ。○「惟恍惟惚」が「惟芒惟苒」となり、「惚兮恍兮」が「苒兮苒兮」となり、「恍兮惚兮」が「芒兮苒兮」となり、「苒兮苒兮」が「惚兮恍兮」となり、「自レ古及レ今」が「自レ今及レ古」となり、「吾何以」が「吾奚以」となつて居る異本もある。

【譯論】 この第二十一等の冒頭にある「孔。德。之。容。惟。道。是。從。」と云ふ四言二句は、道と徳との不可離的關係にあることを道破した言葉、即ち、道と徳との、異名同體であることを云つたものであり、「道之爲レ物」より、「其中有レ信」までは、その道の現象化に就て云つたものであり、「自レ古及レ今、其名不レ去」の四言二句は、第六章にある「谷神不レ死」と同一思想に屬する言葉で、道の永存性に就て云つたものである。而して、「以閱衆甫。吾何以知衆甫之然哉。以此。」と云ふ言葉は、第十章に「致レ虚極、守レ靜篤、萬物並作、吾以觀レ復」とある思想と同じく、現象界の事象を靜觀することによつて、あらゆる事象が、冲虚なる道に抱擁されて居ることを悟り得ることを云つたものである。

第二十二章 (曲則全章第二十二)

本・文 曲則全、枉則直、窪則盈、敝則新、少則得、多則惑。是以、聖人抱一、爲天下式。不自見、故明。不自是、故彰。不自伐、故有功。不自矜、故長。夫惟不爭。故天下莫能與之爭。古之所謂、曲則全者、豈虛言哉。誠全而歸之。

新讀方 曲なれば則ち全く、枉なれば則ち直く、窪なれば則ち盈ち、敝ければ則ち新しく、少ければ則ち得、多ければ則ち惑はん。是を以て、聖人は一を抱きて、天下の式となる。自ら見さず、故に明かなり。自らはとせず、故に彰る。自ら伐らず、故に功あり。自ら矜らず、故に長し。それただ争はず。故に天下能くこれと争ふことなし。古の謂はゆる、曲なれば則ち全しとは、豈虚言ならんや。誠に全くして而してこれに歸するなり。

新字解 **曲則全** 曲は、剛に對しては柔を守り、強に對しては弱を守るが如きことを云つたもので、この三言一句は、完全の解決に達するには、委曲の方法を執るべきことを意味する言葉である。 **枉則直** これは、吳澄が「尺蠖之屈而枉、所以能伸而直。」と云つて居る通り、自己の正直を明白にせんためには、一時の屈辱は忍ぶべきであるの意。枉は、自己を枉げて屈辱に服するこ

と。 **窪則盈** これは、第九章に「持而盈之、不如其已」とある言葉に含まれて居る意義と、殆ど同意義の言葉であつて、何事に就ても、十分を求めざることが、安全の道であることを云つたものである。窪は、缺の意。 **敝則新** これは、蘇子由が「昭昭察察、非道也。悶悶、若將弊矣。而日新之所自出也。」と云つて居る通り、自己の才徳を他に誇示する様のことなきを敝と云ひ、その敝を持續することが、その才徳の何時までも新であり、且つ増進する所以であることを云つたものである。 **少則得多則惑** これは、沈一貫が「道不欲多。多則離。離則擾。擾則憂。憂則不可救。路多岐則亡羊。學多方則喪道。多指亂視、多言亂聽。」と云つて居る通り、何事に就ても、多大を求めざることが、心の平和を獲る道であることを云つたものである。 **抱一爲天下式** 抱一は、見素、抱樸、少私、寡欲、致虚、守静、歸根、復命などの諸徳の本源體なる冲虚の道に即せることを云ひ、爲天下式は、その抱一によつて、天下人の則るべき模範を示して居ることを云つたものである。 **不自見** これは、自己の才能、學徳を他に誇示しないこと。 **不自是** これは、自己の識見などに對して、自己肯定をしないこと。 **不自伐** これは、自己のなした功績に對して、自負心を懷かざること。 **不自矜** これは、自己の才能、徳性に對して、自惚心を懷かざること。 **古之所謂曲則全者** これは、「古之所謂、曲則全、枉則直、窪則盈、敝則

新、少則得、多則惑者」とすべきを、短縮した言葉であつて、最初の一句を擧げて、他の五句をそれに含ませたものである、**誠全而歸之**——これも、「誠全、誠直、誠盈、誠新、誠得、而歸之。」とすべきを、短縮した言葉で、之は、抱^レ一^〇の^〇を指したものである。歸は、復歸の意で、即して居ること。

新譯 古人の格言に「曲なれば則ち全く、枉なれば則ち直く、窪なれば則ち盈ち、敝ければ則ち新しく、少ければ則ち得、多ければ則ち惑はん。」と云ふのがあるが、これは實によく眞理を穿つた言葉である。兎角、世の中の人々は、物事を婉曲に解決することを知らないため、折角圓滿に解決の出来かかつて居ることを破壊してしまつたり、屈辱を忍ぶことを知らないものだから、却て自分の誠實正直を誤解されてしまつたり、盈つれば虧けると云ふことを知らないものだから、強慾を張つて、大損をしたり、徒に新を求めて敝に終つたり、損して得すると云ふことを知らないものだから、大きな山を張つて、破産の憂目に逢つたり、多きを望んだ結果、二兎を追うて一兎をも獲なかつた様な馬鹿を見たりして居る。であるから、聖人は、そんな多岐多様、強慾非道なことは一切しない。常に冲虚の大道に即して、天下人に對して、處世の要諦を提示して居るのであるが、常に一を抱いて居る聖人は、自己廣告をやらないから、却てその人格は、天下人に明かに認められて居り、自己の主義、主張を自分で買被つて、これを吹聴する様のことをしないから、却てその學徳は世に顯著

になつて居り、自己の功績に對して、自負心を有しないから、その功績は、何等の傷害を受けないで永存して居り、自己の學徳に自惚れて居ないから、その學徳は、永久に稱譽されて居るのである。要するに、聖人は一を抱くと同時に天地宇宙萬物を抱いて居て、非我に對して自我の主張をなさない。何等争ふべきものも、争ふべきことも、彼には一切ないのである。故に、彼に抱擁されて居る天地萬物は、彼と争ふ様のこととは出来ないのである。古人の格言に「曲則全、枉則直、窪則盈、敝則新、少則得、多則惑」と云ふのがあるが、この言葉が、どうして、内容空虚、無意義のものであらう。眞實そのものではないか。實際、人は、この曲・窪・敝・少から生れた全・直・新・得によつて、道と一如になり得るのである。

考證 □「曲則全枉則直窪則盈敝則新少則得多則惑」と云ふ三言六句を、チャイルスが、〔G〕“He that humbles himself shall be preserved entire. He that bends shall be made straight. He that is empty shall be filled. He that is worn out shall be renewed. He who has little shall succeed. He who has much shall go astray.”(自ら謙遜なるものは、全く保持せらるべし。曲るものは、直くせらるべし。空しきものは、満たさるべし。敝れたものは、新たにせらるべし。乏しきものは、成功すべし。多くを有するものは、道に迷ふべし。)と英譯して居るのは、必ずしも誤譯とは云へないが、私

は、これを、〔I〕“He who takes a round-about way in doing a thing will finally achieve its complete solution. He who bends himself will finally manifest his straightness. He who is satisfied with empty things will finally be filled. He who is satisfied with worn-out things will finally have new things. He who is satisfied with little will finally have much. He who has too many will finally be at a loss what to do with them.”と譯したならば、原文に忠實になるではないかと思ふ。□「是以聖人抱一爲天下式」と云ふ文句を、チャイルスは、〔G〕“Therefore the sage embraces unity, and is a model for all under heaven.”（故に、聖人は渾一を抱き、天下のすべての模範となる。）と英譯し、オーズは、〔O〕“Therefore doth the sage cling to simplicity, and is an example to all men.”（故に、聖人は質朴性に固執し、すべての人人の典型となる。）と英譯して居る。これは何れも原意に觸れては居るが、私は、これを〔I〕“Therefore the sage embraces the oneness, Tao, and, shows the world how to go on with it.”としたらばどうかと思ふ。□「不自見故明不自是故彰不自伐故有功不自矜故長」と云ふ文句を、レツグは〔I〕“He is free from self-display, and therefore he shines; from self-assertion, and therefore he is distinguished; from self-boasting, and therefore his merit is acknowledged; from self-complacency, and therefore he acquires superiority.”（彼は自己誇示を離る。故に自ら輝やく。自己肯定を離る。故に著明なり。自己誇稱を離る。故にその功績は認めらる。自己満足を離る。故に優越性を獲得す。）と英譯して居る。これは原文に忠實な譯ではあるが、彼が故長を“Therefore he acquires superiority.”（故に優越権を獲得す。）と譯して居る所を見れば、彼はこの長の字を首長の意に解したものだと思はれる。チャイルスの譯にも、この長の字が首長の意にとつてある。惟ふに、これは何れも、吳澄が「長、謂能之過人」と云つて居る解説に従つたものであらうが、若し私の見解の通り、この長の字を時間的意義を有するものと見るならば、この「故長」は〔I〕“Therefore he acquires eternity”とでも譯すべきであらう。□「夫惟不爭故天下莫能與之爭」と云ふ文句を、チャイルスは、〔G〕“Inasmuch as he does not strive, there is no one in the world who can strive with him.”（彼は争はざるを以て、彼と争ひ得るもの、天下になし。）と英譯し、オーズは、〔O〕“Because he does not compete with others, no man is his enemy.”（彼は他のものと競争せざるが故に、彼には一人の敵もなし。）と英譯して居るが、何れも原意を傳へて居る。□「古之所謂曲則全者豈虛言哉」と云ふ文句に對する英譯は、レツグのも、オーズのも、譯者が「曲則全者」の中には、「枉則直、窪則盈、敝則新、少則得、多則惑」の三言五句が含まれて居ることを認めて居ないために、その意義が、私の見解とは相違して居る。私の見解によつて、これを譯するならば、〔I〕

“How can we consider such ancient maxims ‘He who takes a round-about way in doing a thing, will finally achieve its complete solution’ and the others mentioned above, as idle sayings? と云ふべきではあるまいか。□「誠全而歸之」と云ふ五言一句を、オールドが〔O〕“Without doubt he shall go back to his home in peace.”（疑ひなく、彼は平和にして家庭に歸る。）と英譯して居るのは、原文の意義を離れ、レッグの譯も、原意を傳へて居ない。私の見解によれば、これは、〔I〕“By the practice and realization of the principles of these maxims we can say that we are back to ‘Tao.’”とでも譯すべきではあるまいか。○「枉則直」が「枉則正」となり、「敝則新」が「弊則新」となり、「是以聖人」が「聖人」となり、「不自伐、故有レ功」が「不自伐、故功」となり、「夫惟不レ争」が「夫惟不レ矜」となつて居る異本もある。

評論 この第二十二章は、老子の理想の中心たる道の徳の現實生涯に於ける適用法に就て云つたもので、冒頭の三言六句に於ては、世人の無視して顧みざる處世法によることが、世人の渴望してやまざるも、尙ほ獲得し能はざる所のものを獲得するの道であることを道破したる古諺を叙述し、「是以」より、「故天下莫能與レ之争」までは、その道に即せる聖人の處世法と、その効果とを叙し、「古之所レ謂」以下は、上叙せる古諺の眞實性を力説し、その故諺に含まれ居る教訓の實踐射行

が、やがて道に即せる生活そのものであることを提唱したものである。

第二十三章 (希言自然章第二十三)

希言自然。故、飄風不終朝。驟雨不終日。孰爲此者。天地。天地尚不能久。而況於人乎。故、從事於道者、道者同於道、德者同於德、失者同於失。同於道者、道亦樂得之、同於德者、德亦樂得之、同於失者、失亦樂得之。信不足、有不信焉。

新讀 希言は自然なり。故に、飄風は朝を終へず。驟雨は日を終へず。孰かこれをなすものぞ。

天地なり。天地すら尙ほ久しきこと能はず。而るを況や人に於てをや。故に、道に従事する者は、道者とは道に同じうし、徳者とは徳に同じうし、失者とは失に同じうす。道に同じうする者は、道もまたこれを得ることを樂み、徳に同じうする者は、徳もまたこれを得ることを樂み、失に同じうする者は、失もまたこれを得ることを樂むなり。信足ざれば、信ぜざることあり。

新字解 希言自然——これは、蘇子由が「言出于自然、則簡而中。非其自然、而強言之、則煩而難信矣。」と云つて居る通り、「言葉数の多いのは人爲であつて、自然を離れて居る。言葉数の少ないのが自然に即して居るのである。」の意で、第十七章に「猶令其貴言」とあるのと殆ど同義であ

る。飄風不終朝驟雨不終日——この五言二句は、天地間に行はれる不自然の例を挙げたもので、飄風は、暴風、又は疾風のこと。不終朝は、午前中吹き通しにしては居ないこと。驟雨は、夕立雨のこと。不終日は、終日降り通しにしては居ないこと。孰爲此者——これは、「その不自然な飄風や驟雨は誰の所爲であるか。」の意。不能久——これは、「その様な不自然な所爲は、いつまでも持續して居ることは出来ない。」の意。從事於道者——これは、自然の道に即したる生活をなして居るものことで、聖人を指したものである。道者同於道——これは、僧徳清が「在於有道者、則同於道。」と云つて居る通り、道に即した生活をして居る者と接しては、その道の上に於て、彼と融和することとを云つたものである。徳者同於徳——これは、僧徳清が「在於有徳者、則同於徳。」と云つて居る通り、道の實現たる徳に即した生活をして居る者と接しては、その徳の上に於て、彼と融和することとを云つたものである。失者同於失——これは、僧徳清が「失者、指世俗無道徳者。謂下至於世俗庸人、亦同於俗。即所謂、呼我以牛、以牛應之。呼我以馬、以馬應之。」と云つて居る通り、道も徳も失つて居る者に接しても、それと同化することを云つたものである。同於道者道亦樂得之——これは「同於道、則道者亦樂得之」の意で、「こちらから道者と同化すれば、先方の道者もこちらと同化することを樂む様になる。」の意。之の字は、「從事於道者」を指したものであ

る。□同於徳者徳亦樂得之——これは「同於徳、則徳者亦樂得之」の意で、「こちらから徳者と同化すれば、先方の徳者も、こちらと同化することを樂む様になる。」の意。之の字は、「從事於道者」を指したものである。□同於失者失亦樂得之——これは「同於失、則失者亦樂得之」の意で、「こちらから世俗の人人と同化せんとすれば、先方の世俗の人人も、こちらと同化することを樂む様になる。」の意。之の字は「從事於道者」を指したものである。□信不足有不信焉——これは、第十七章にある「信不足焉、有不信。」と同意義。

新譯 世の中の人間の言葉数の多いのには、實にあきれる。彼等は、言葉数を多くすれば、心の醜惡が隠せると思つて居るのかも知れないが、そんなことをすればするほど、心の中の醜惡は露出して、だんだん自然の道から遠ざかつて行き、結局は身心を疲勞させてしまふまでのことである。希言は自然の道にかなつて居るから、何時までも身心の疲勞を生じない。いくら飄風が勢よく吹いた所で、午前中吹き通しにしては居らず、いくら驟雨がひどく降つた所で、朝から晩まで降り通しにして居るものではない。元來この飄風とか驟雨とか云ふものは、至つて不自然なものであるが、誰が一體この様なものを生成するのであるかと云ふに、それは天地である。天地でさへ不自然なことは、長く持續することは出来ない。まして、お互人間が、不自然なことをやり通さう

とした所で、どうしてそれが出来るものか。永久不變は、自然に即する事によつてのみ可能になる。故に、何事をなすにも、自然の道に即して居る聖人は、常に道に即せる者に接しては、その道の上に於て、彼と同化し、徳に即せる者に接しては、その徳の上に於て、彼と同化し、また、道もなく、徳もなき世俗の常人に接しては、その世俗と同化して、すべて自然のありのままに即して行動する。であるから、こちらが、先方の者と道の上に於て同化すれば、先方の道者も、こちらと相接し、相親しむことを樂みとする様になり、こちらが、先方の者と徳の上に於て同化すれば、先方の徳者も、こちらと相接し、相親しむことを樂みとする様になり、こちらが、先方の世俗と同化すれば、先方の世俗も、こちらと相接し、相親しむことを樂みとするのである。而して、この先方の者と同化すると云ふことに必須のことは、こちらが先づ、先方の者を信じてかかると云ふことである。若し、こちらから先方の者を信じてかからないと、先方がこちらを信じ、こちらと同化することを樂みとする様な結果は、到底生じないのである。

考證

□「希言自然」と云ふ四言一句を、オールドは、〔O〕“Moderate your speech, and preserve

yourself.”(汝の言語を制し、汝自身を保護せよ。)と英譯し、ヘツグは、〔L〕“Abstaining from speech marks him who is obeying the spontaneity of his nature.”(言語を節制することは、その人

が、彼の天性の自發性に從へることを表示するなり。)と英譯して居るが、前者は誤譯に近く、後者も適譯とは云ひ難い様に思はれる。私の見解によれば、これは〔I〕“To speak seldom is to follow Nature, Tao.”とでも譯すべきであらう。□「飄風不終朝驟雨不終日孰爲此者天地天地尚不能久而況於人乎」と云ふ文句を、オールドは〔O〕“A harricane will not outlast the morning, a heavy rain will not outlast the day. Who have the power to make these things but heaven and earth? And if heaven and earth cannot continue them long, how shall a man do so?”(烈風は一朝よりも長くは續かず、強雨は一日よりも長くは續かざるなり。天地にあらずして、誰かこれらのことをなすや。而して、若し天地すら、これらのことを長く持續せしめ得ざるならば、人、如何にしてこれをなし能はんや。)と英譯し、レッグも、チャイルスも、これと殆ど同意義に英譯して居るが、何れも原意を十分に傳へて居る。□「故從事於道者道者同於道德失者同於失」と云ふ文句を、オールドは〔O〕“If a man accords with Tao in all things, he is identified with Tao by that agreement. A virtuous man is identified with virtue, a vicious man is identified with vice.”(若し萬事に於て道と一致せる人は、その協調によつて、彼は道と同一になれるなり。徳ある者は徳と同一になれるなり。罪惡ある者は罪惡と同一になれるなり。)と英譯して居る。これは、「故從事於道者、同於道。徳者同於徳。失者同於失」となつて居る刊本に從つたものと思はれるが、それにしても、この英譯は全く原意を失つて居る。この文句を、レッグは〔L〕“Therefore when one is making the Tao his business, those who are also pursuing it, agree with him in it, and those who are making the manifestation of its course their object agree with him in that; while even those who are failing in both these things agree with him where they fail.”(故に、人、道を彼の業務となしつある時に、その道を追求しつある他の人人は、その道に於て彼と一致し、道の行程の表明を目的となしつある他の人人は、それに於て彼と一致し、また、その二つの事柄を缺きつある他の人人は、その缺ける所に於て彼と一致する。)と英譯して居る。これは原文に忠實な直譯ではあるが、私の見解とは多少相違して居るし、また譯文の意義も、明瞭でない様に思はれる。元來、この一節は、頗る難解の文章であつて、古來色々に解説されて居るし、また辭句の上にも差異のある異本も行はれて居る。『老子要註』にはこの一節が「故從事於道者、道者同於道。從事於得者、得者同於得。從事於失者、失者同於失。」と云ふ風になつて居るが、私の見解では、この文章は、「故、從事於道者、與道者同於道、與徳者同於徳、與失者同於失」の意に解すべきであるから、これを英譯するならば、〔I〕“Therefore he who follows Tao in everything enjoys associating with those

徳。失者同於失」となつて居る刊本に從つたものと思はれるが、それにしても、この英譯は全く原意を失つて居る。この文句を、レッグは〔L〕“Therefore when one is making the Tao his business, those who are also pursuing it, agree with him in it, and those who are making the manifestation of its course their object agree with him in that; while even those who are failing in both these things agree with him where they fail.”(故に、人、道を彼の業務となしつある時に、その道を追求しつある他の人人は、その道に於て彼と一致し、道の行程の表明を目的となしつある他の人人は、それに於て彼と一致し、また、その二つの事柄を缺きつある他の人人は、その缺ける所に於て彼と一致する。)と英譯して居る。これは原文に忠實な直譯ではあるが、私の見解とは多少相違して居るし、また譯文の意義も、明瞭でない様に思はれる。元來、この一節は、頗る難解の文章であつて、古來色々に解説されて居るし、また辭句の上にも差異のある異本も行はれて居る。『老子要註』にはこの一節が「故從事於道者、道者同於道。從事於得者、得者同於得。從事於失者、失者同於失。」と云ふ風になつて居るが、私の見解では、この文章は、「故、從事於道者、與道者同於道、與徳者同於徳、與失者同於失」の意に解すべきであるから、これを英譯するならば、〔I〕“Therefore he who follows Tao in everything enjoys associating with those

who follow it, with those who follow Virtue, the manifestation of Tao, and even with those who are secular, following neither Tao nor Virtue.”とでもなすべしであらう。□「同於道者道亦樂得之同於德者德亦樂得之同於失者失亦樂得之」と云ふ文句に對するレッグの英譯には、この三箇の之の字が、道“Tao”を指示する代名詞として取扱つてあるが、私の見解では、この三箇の之は、何れも「從事於道者」を指したものであるから、この文句は、[I] “As he enjoys associating with those who follow Tao, they also enjoy meeting him; as he enjoys associating with those who follow Virtue, they also enjoy meeting him; as he enjoys associating even with those who follow neither Tao nor Virtue, they also enjoy meeting him.”とでも譯すべきであらう。□「信不足有不信焉」と云ふ文句を、レッグは [I] (“But) when there is not faith sufficient (on his part), a want of faith (in him) ensues on the part of the others.”) (併し、彼に信仰の不充分なる時には、彼に對する信仰の缺乏は、自然に他の者に生ずるなり。)と英譯して居る。これは原意を傳へて居る譯ではあるが、何故に“But”(併し)と云ふ言葉を添へたのか、その理由が、私には不明である。私はこの文句を、[I] “He who has no confidence in others, can not gain the confidence of others.”と譯してはどうかと思ふ。○「希言自然」が「稀言自然」となり、「不レ終レ朝」が「不崇朝」となり、「不レ終レ日」が「不崇日」となり、「天地」が「天地也」となり、「同ニ於道ニ者、道亦樂レ得レ之、同ニ於德ニ者、德亦樂レ得レ之、同ニ於失ニ者、失亦樂レ得レ之」が「於レ道者、道亦得レ之、於レ得者、得亦得レ之、於レ失者、失亦得レ之」となり、「信不足、有レ不信焉」が「信不足焉、有レ不信焉」、又は「信不足、有レ不信」となつて居る異本もある。

評論

この第二十三章は、僧德清が「此章言聖人忘言體道、與時俱化也。」と云つて居る通り、その前半に於ては、自然界に於ける不自然なる現象の持續性に乏しきことを例舉し、その後半に於ては、道に即せる聖人の處世上に於ける和光同塵的社交を叙したものである。「故、從事於道者」以下の一段の文章が、色々異つた構造になつて居る異本があるが、この文章の構造を考察して見ると、

(與)ニ道者同ニ於道一 同ニ於道(者)、道(者)亦樂レ得レ之。 と云ふ風になつて居るから、「故、從事於道者」

(與)ニ德者同ニ於德一 同ニ於德(者)、德(者)亦樂レ得レ之。 事於道ニ者、道者

(與)ニ失者同ニ於失一 同ニ於失(者)、失(者)亦樂レ得レ之。 同ニ於道」とある

のを「故、從事於道者、同ニ於道」と改變して見る必要はないのである。三箇の之の字も、確に

第二十三章

「從事於道者」を指したものに相違ない。若し、この三箇の之の字を、レッグの様に道を指したものと見れば、解説の上に非常な無理をしなければならぬことが起つて来るのである。

第二十四章 (跛者不立章第二十四)

本・文 跛者不立。跨者不行。自見者不明。自是者不彰。自伐者无功。自矜者不長。其在道也、曰餘食贅行、物或惡之。故有道者不處也。

新讀方 跛つ者は立たず。跨がる者は行かず。自から見はす者は明かならず。自からはとす者は彰はれず。自から伐る者は功なし。自から矜る者は長からず。その道にありてや、餘食贅行と曰ひ、物或はこれを惡む。故に有道者は處ざるなり。

新字解 □跛者―他の人よりも身丈を高くせんとして、足指のさきでつまだつて居るもの。□不立―何時までも立つて居られないことで、不能立の意。□跨者―他の人よりも先行せんとして兩脚をひろげて、大股をあけて歩むこと。□不行―不能歩の意。□自見者―これは、第二章にある「不自見」の反對のことをする者の意で、自己の才能、技藝などを他に誇示、吹聴する者のこと。□自是者―これも第二章にある「不自是」の反對のことをする者の意。即ち、自分免許で満足して居る人のこと。□自伐者―これも第二章にある「不自伐」の反對のことをする者の意。□自矜者―これも第二章にある「不自矜」の反對のことをする者の意。□其

第二十四章

在道也——これは、「自見者、自是者、自伐者、自矜者などが、道の上に存するのは」の意に解しても、又は「それらのものを、道の上から觀察すれば」の意に解しても差支ない。□餘食贅行——餘食は、食べのこりの食物の意で、人の食慾を唆らず、人をして却て汚穢の念を生ぜしむる棄すべき物を表示した言葉であり、贅行は、贅形（瘤）のことで、これも無用の厄介ものを表示した言葉である。行と形とは、支那古文學に於ては、相通用してある。□物或要之——これは、「人皆これを惡む」の意で、物は、人を意味し、之は、直接には、餘食贅行を指し、間接には、自見者、自是者、自伐者、自矜者を指したものである。或の字は、あまり重く見ずに、ただ「多くの場合に於て」の意に解すべきである。□有道者——道に即して居る聖人の意。□不處也——これは「餘食贅形の如き人物の立脚して居る所には立脚しない。」の意に解しても、又は「餘食贅形の如き人物のする様のことではない。」の意に解しても差支ない。

新譯 生存競争は、世の常とは云ひながら、世の中の人人のやつて居ることを見れば、實にかしくなる。他の人人よりも身丈を高くせんとして、指さきでつまだつて居る様なことをして居るものがあるが、何時までもそんな状態を持續することは出来ない。また、他の人人よりも先に行かうとして、大股をはりあげて歩いて居るものがあるが、これも直にくたばつてしまふ。これと同じく

自己の美を他の人人に誇示しようとする者は、却てその美は、他の人人に認められず、自分免許の看板を擔ぎ歩いて居る者は、却てその看板は世人の注意をひかず、自から自己の功績を伐る者は、その功績は認めて貰へず、自から自己の才能に自惚れて居る者は、その才能に進歩がなく、他の人人の才能の方が、お先に御免を蒙つて進歩するから、自己の才能を才能として何時までも保持するとは出来ないのである。この様な人人を道の上から命名して見ようならば、まづ、餘食贅形であつて、宜しく廢棄すべきである。餘食や贅形を珍重する様な變り者は世の中にはあるまい。だれもかれも忌厭するにきまつて居る。であるから、有道者は、そんな餘食贅形の徒とは、立脚地を同じくして居ないのである。

考證 □「跛者不立跨者不行自見者不明自是者不彰自伐者無功自矜者不長」と云ふ文句を、レッグは、

[L] "He who stands on his tiptoes does not stand firm; he who stretches his legs does not walk easily. (So), he who displays himself does not shine; he who asserts his own views is not distinguished; he who vaunts himself does not find his merit acknowledged; he who is self-conceited has no superiority allowed to him." (爪立つ者は、確と立たず。兩脚を張りあける者は、容易に歩まず。自からを誇示する者は光らず。自からの見解を是認する者は、著明ならず。自からのことを

鼻にかける者は、その功績を認められず。自から自惚れる者は、如何なる優越性をも有することを許されず。と英譯して居る。これは原文に忠實な直譯である様に思はれるが、最初の四言二句（跛者不立、跨者不行）は、私の見解によれば、〔I〕“He who stands on tiptoe can not stand long; he who walks with long strides can make no progress.”とでも譯すべきであらう。尙また、「自矜者不長」と云ふ五言一句を、レツグが〔L〕“He who is self-conceited has no superiority allowed to him.”（自から自惚れる者は、如何なる優越性をも有することを許されず。）と譯して居る所を見れば、彼は、この長の字を長者（優秀なる者）の意に解して居る様であり、オールドが〔O〕“He who exalts himself does not stand high.”（自からを高むる者は、高く立たず。）と譯して居る所を見れば、彼は、この長の字を長短の長の意に解して居る様であるが、私の見解によれば、この長は、第九章に「揣而銳之、不可長保」とある長の字と同じく、時間的意義を有するものと解すべきである。とすれば、この五言一句は、〔I〕“He who is self-conceited about his own ability, can not preserve it long.”とでも譯すべきであらう。□「其在道也曰餘食贅行物或惡之故有道者不處也」と云ふ文句をレツグは、〔L〕“Such conditions, viewed from the standpoint of the Tao, are like remnants of food, or a tumour on the body, which all dislike. Hence those who pursue (the course) of the

Tao do not adopt and allow them.”（斯かる状態を道の立場より觀察すれば、食物の殘餘、身體の痛の如きものであつて、すべての人、これを忌厭す。故に道の行程を追求する者は、それを採らず、またそれを是認せず。）と英譯して居る。これは確に原意を傳へて居る正譯ではある。オールドが、これを〔O〕“Such things are to Tao what refuse and excreta are to the body, They are everywhere detested. Therefore the man of Tao will not abide with them.”（斯かるものの道に於けるは廢物と排泄物の身體に於けるが如し。それらのものは、如何なる處にても嫌惡せらる。故に道者は、それらのものと共に居らざるなり。）と英譯して居るのは、原文の意義に觸れては居るが、餘食贅行を“Refuse and excreta”（殘物と排泄物）と譯して居るのは、何かの誤解に基くものではあるまいか。餘食贅行は、「たべのこしの食物と瘤」のことであるから、餘食を“Refuse”（殘物）と譯するのは、まづそれでよいとしても、贅行を“Excreta”（排泄物）と譯するのは間違ひである。○「跛者」が「企者」となり、「自見者」が「自見」となり、「自是者」が「自是」となり、「自伐者」が「自伐」となり、「自矜者」が「自矜」となり、「其在道也」が「其於道也」となり、「物或惡之」が「物故惡之」となり、「有道者不處也」が「有道者不處」となつて居る異本がある。

評論 この第二十四章は、道に即せる者の立場から、現實の世相を見下し、その中であつて、生

存競争の活劇を演じてゐるものを「餘食、贅行」の徒と名づけて貶刺したものである。「跛者不立、跨者不行」は、僧德清が「蓋、跛者止知要強高出三人一頭、故舉踵而立、殊不知下舉踵、不能久立。跨者止知要強先出一步、故闊步而行、殊不知下跨步不能長行。以其皆非自然」と云つて居る通り、生存競争場裡に於て、位階の上に、富の上に、乃至、顯達の上に、他の者を超越せんとする行動を譬喩した言葉であるが、自見者、自是者、自伐者、自矜者、この四者は、その跛者と跨者とを實際的に分類したものであり、不明、不彰、無功、不長は、不立と不行とを更に説明したものと見るべきである。

第二十五章 (有物混成章第二十五)

本文 有物混成、先天地生。寂兮寥兮。獨立而不改、周行而不殆。可爲天
下母。吾不知其名、字之曰道、強爲之名曰大、大曰逝、逝曰遠、遠曰反。
故、道大、天大、地大、王亦大。域中有四大、而王居其一焉。人法地、地法天、
天法道、道法自然。

新讀方 物ありて混成し、天地に先だつて生ぜり。寂兮たり寥兮たり。獨立して改めず、周行して殆からず。以て天下の母たるべし。吾はその名を知らざるも、これを字して道と曰ひ、強ひてこれが名をなして大と曰ひ、大を逝と曰ひ、逝を遠と曰ひ、遠を反と曰ふ。故に、道は大、天も大、地も大、王も又大なり。域中に四大ありて、王はその一に居る。人は地に法とり、地は天に法とり、天は道に法とり、道は自然に法とるなり。

新字解 有物混成——これは、蘇子由が「夫道、非清、非濁、非高、非下、非去、非來、非善、非惡、混然而成體。」と云つて居る通り、老子の謂ゆる道の絶對相を表現した言葉である

が、「老子元翼」に載せてある羅什の註には「妙理常存、故曰有_レ物。萬道不_レ能_レ分、故曰混成_二」と解してある。□先天地生——これは、林希逸が「言_二天地自_レ是而出_一也。」と云つて居る通り、道が天地萬物の創生原であることを云つたもので、第一章に「無名_二天地之始_一。」とあるのと同じ思想に屬する言葉である。□寂兮寥兮——これは、僧德清が「無_レ聲不_レ可_レ聞、無_レ色不_レ可_レ見、故曰_二寂寥_一。」と云ひ、蘇子由が「寂兮無_レ聲、寥兮無_レ形。」と云つて居る通り、道の本體の音聲を絶し、形態を絶して居ることを云つたものである。□獨立而不改周行而不殆——これは、李息齋が「獨立不_レ改、不_レ見_二其變_一也。周行不_レ殆、不_レ見_二其終_一也。」と云ひ、林希逸が「獨立而不_レ改、常久而不_レ易也。周行而不_レ殆、行健而不_レ息也。」と云つて居る通り、道の絶對的獨立不變と絶對的徧在不滅とに就て云つたものである。□天下母——これは、第一章にある「萬物之母」第四章にある「萬物之宗」、第六章にある「天地根」と同義である。□大曰逝逝曰遠遠曰反——これは、呂吉甫が「道之爲_レ物、用_レ之彌_二滿六虛_一、舍_レ之莫_レ知_二其所_一。則大豈足_二以名_レ之哉。強爲_二之名_一而已。大則周行而無_レ不在。不_レ止_二於吾之一身而已。故大曰_レ逝。逝則遠而不_レ禦。故逝曰_レ遠。遠而不_レ禦、則吾求_二其際_一、而不_レ可_レ得。故復_二歸其根_一。而未_二始離_二乎吾身_一也。故遠曰_レ反。」と云ひ、蘇子由が「自_レ大而求_レ之、則逝而往矣。自_レ往而求_レ之、則遠不_レ及矣。雖_レ逝、雖_レ遠、然反而求_二之一心_一足矣。」と云つて居る通り、道を外延

的に追求すれば、何處まで追求して行つても際限はないが、その道は却て自己に存するのであることを云つたものと解し得られないこともないが、恐らく、これは老子の思想を離れて居る見解であらう。私は、僧德清が「老子謂、我說_二此大字_一、不_二是大小之大_一。乃是絶_二無邊表_一之大。往而窮_レ之無_レ有_二盡處_一。故云_レ大曰_レ逝。向_レ下又釋_二逝字_一。逝者、遠而無_レ所_二至極_一也。故云_レ逝曰_レ遠。遠則不_レ可_二聞見_一。無_レ聲無_レ色、非_二耳目之所_レ到。故云_レ遠曰_レ反。反、謂_二反_レ一絶_レ跡、道之極處_一。名亦不_レ立、此道之所_二以爲_レ大也。」と云つて居る見解が、老子の思想に親しいと信ずる。この見解によれば、この三言三句は、道を、文字上に於て、如何に擴大して表現しても、それを包括し得る文字はなく、遂には本源の冲虚（無）に復歸することを云つたもので、この三言三句は、大體に於て、第十四章に「繩繩兮不_レ可_レ名、復_二歸於無物_一。」とある思想と同一である。□王亦大——この王は、老子の嫌つて居る帝國主義の王者の意ではなく、太古に於ける無爲の治者たる王者を指したものであらう。□域中——「この宇宙間に」の意。□法——これは、そのものに隨順して、それによつて存在の安定を得ること。

新譯 宇宙人生の本源たる冲虚の道の存在することは事實ではあるが、その本源そのものの存在せる状態は、渾沌たるものであつて、名狀することは出来ない。が、兎に角、そのものの發生は、

天地開發に先だつたものである。寂兮として聲もなく、寥兮として形もないが、その存在は絶対的であつて、常住不變であり、その徧在も絶対的であつて、永久不滅である。宇宙人生は、要するに、その道の現象的開發に外ならない。老子は、そのものを何と名づけてよいのか知らないが、平常これを字して道と云ひ、その屬性を無理に形容して、大と云ひ、その大の延長を逝と云ひ、その逝の延長を遠と云つて居るのであるが、その屬性を、この様にだんだんと延長し、擴大すると、遂には元始の冲虚（無）に復歸してしまふのである。故に、大と云へば、道の大なることは勿論であるが、天も大、地も大、王もまた大であつて、その大の内容、質量には、相違はあるにしても、一般には、その各自の實質なり、内容なり、屬性なりが、何れも大と云ふ文字で表現されて居る。斯く、この宇宙間には、大の字を以て表現されて居るものが四つあつて、王者もその中に介在して居るのである。而して、この四大の存在は、何によつて、その存在の安定を保障されて居るのかと云ふに、王者をはじめ人類のすべては、地の理法に隨順することによつて、その存在は安定し、地は天の理法に隨順することによつて、その存在は安定し、天は道の理法に隨順することによつて、その存在は安定し、道は自然の理法に隨順することによつて、その存在は安定して居るのであるから、畢竟するに、宇宙人生、天地萬物の存在の安定は、根本的に云へば、道の動態なる自然に即する

ることによつて、可能になるのであると云ふべきであらう。

考證 □「有物混成先天地生」と云ふ四言二句を、レツグは、(I) “There was something undefined and complete, coming into existence before heaven and earth.” (内容の限定されず、しかも完全なるものあり。そは天地に先だつて生存するに至れり。)と英譯して居る。混成を “undefined and complete” (内容の制限されず、しかも完全なる)と譯して居る所を見れば、彼は混成を混と成との二箇の動詞と見て居る様であるが、私の見解によれば、この場合に於ける混は、成に對して副詞の作用をなして居るから、この四言二句は、(I) “There was something complete but chaotic in form, which was in existence before heaven and earth.”と譯してはどうかと思ふ。□、寂兮寥兮獨立而不改周行而不殆可以爲天下母」と云ふ文句を、チャイルスは (G) “Oh, how still it is, and formless, standing alone without changing, reaching everywhere without suffering harm! It must be regarded as the mother of the universe.” (ああ、如何にその寂兮たり寥兮たることよ。獨立して變化することなく、隨處に達して害を蒙れることなし。そは宇宙の母と見做さるべし。)と英譯して居るが、これは原文に一致せる適譯である。□「吾不知其名字之曰道強爲之名曰大」以下の文句を、チャイルスは、(G) Its name I know not. To designate it, I call it Tao. Endeavouring to describe it, I

call it great. Being great, it passes on; passing on, it becomes remote; having become remote, it returns. Therefore Tao is great; Heaven is great; Earth is great; and the Sovereign also is great. In the universe there are four powers, of which the Sovereign is one. Man takes its law from the earth; the earth takes its law from heaven, heaven takes its law from Tao; but the law of Tao is its spontaneity." (その名は我知らず。それを名づけて道と云ふ。強ひてそれを説明して大と云ふ。そは大にして逝き、逝きて遠くなり、遠くなりて反るなり。故に、道は大、天は大、地は大、而して王も亦大。宇宙に四箇の力ありて、王はその一なり。人はその法を地よりとり、地はその法を天よりとり、天はその法を道よりとる。併し、道の法はそれ自身の自然性なり。)と英譯して居る。これは大體に於て原意を傳へて居る様であるが、「強爲之名曰大、大曰逝、逝曰遠、遠曰反」と云ふ文句は、私の見解通りに譯するならば、(I) "If I have to give it another name, I will call it the Great, or the Far-reaching, or the Remote, and finally I will return to its namelessness." とでもなすべきであらう。○「獨立而不改」が「獨立不改」となり、「周行而不殆」が「周行不殆」となり、「強爲之名曰大」が「強名之曰大」となり、「王居其一焉」が「王處其一尊」となり、「人法地、地法天、天法道、道法自然」と云ふ句讀が「人法地地、法天天、法道道、法自然」(『老子翼』李約註參照)と云ふ句讀になり、「人法地」が「王法地」となつて居る異本もある。

評論 この第二十五章は、他の章に於けると同じく、冲虚なる道の實體なり實相なりは、到底、言句を以て表現し得らるるものにあらざること叙し、更に、宇宙人生、天地萬物は、すべてその冲虚なる道の自然性に則^つとるにあらざれば、その生存の安定を得ることは出来ないと云ふことを主張したものである。

第二十六章 (重爲輕根章第二十六)

本文 重爲輕根。靜爲躁君。是以、聖人終日行、而不離輜重。雖有榮觀、燕處超然。如何萬乘之主、而以身輕天下。輕則失臣、躁則失君。

新讀方 重は輕の根たり。靜は躁の君たり。是を以て、聖人は終日行けども、而も輜重を離れず。

榮觀ありと雖も、燕處して超然たり。如何ぞ萬乘の主にして、而も身を以て天下に軽くせるぞ。輕ければ則ち臣を失ひ、躁しければ則ち君を失はん。

新字解 重爲輕根靜爲躁君——これは、蘇子由が「凡物、輕不能載量。小不能鎮大。不行者使不行。不動者制不動。」と云つて居る通り、すべて他の者の上に立ち、それを制御せんとするものは、心を莊重、沈著なる状態に置き、行動を靜肅にしなければならぬことを云つたものである。根は基礎の意、君は支配者の意である。終日行而不離輜重——これは、李宏甫が「持輜重、則雖終日行、而不爲輕。何也、以重爲之根也。」と云つて居る通り、外見では輕に屬する如く見ゆる活動をして居ても、莊重、沈著の心を失はざることを、行軍中に總大將が、他の將卒に先だつて前進せず、常に輜重車の近くに居ることに喻へたものである。輜重は、兵糧、彈藥などを積載せる

輜重車のことである。雖有榮觀燕處超然——これは李宏甫が「常燕處、則雖榮觀而不爲躁。何也、以靜爲之君也。超然者、不滯於靜、不滯於動、故根君爲之體、而超然爲之用也。」と云ひ、僧德清が「縱使貴爲天子、富有四海之榮觀、但恬愴燕處、超然物慾之表。」と云つて居る通り、金殿、玉樓の中にあつても、その榮耀榮華に耽溺せず、常に靜居して世外に超然たることを云つたものである。榮觀は、物質慾に屬する奢侈、贅澤、歡樂の事物を總稱し、燕處は、宴坐と同じく、坐禪又は靜坐のこと。萬乘之主——これは戦争の時に兵車一萬輛を出し得る軍備のある國の天子の意で、一國の帝王を指したものである。以身輕天下——これは、蘇子由が「人主以身任天下、而輕其身、則不足任天下矣。」と云つて居る通り、一國の天子が世に處する上に於て、輕躁なる行動、浮薄なる生活をなすことで、輕は重なく、靜なきことを云つたものである。輕則失臣躁則失君——これは、蘇子由が「輕與躁、無施而可。然君輕、則臣知其不足賴。臣躁、則君知其志于利。」と云つて居る通り、上に立つて居る君主に、重と靜との態度のない時には、臣たる者は、その君主を信賴せずして去つてしまひ、また臣下の者に、重と靜との態度のない時には、君主はその臣下の者を信賴せずして捨ててしまふことを云つたものであつて、輕則失臣の主格は、君であり、躁則失君の主格は、臣であるが、茲には、その主格(君・臣)が略してある。

新譯 軽いものが、常に重いものによつて、その存在を支持されて居ることは、この自然界の事象を観察すれば、直に判ることであり、動いたり、躁いだりするものが、常に沈著、靜肅なるものに支配されて居ることも、この人生の現實相を凝視すれば、直に判ることである。この重と靜とは、冲虚なる道の屬性であつて、苟も道に従事して居る聖人は、常に重に即し、靜を守つて居るから、日常の行動の上に於ても、丁度、用意周到なる大將が自から先陣に立たず、常に輜重を離れない様に、道の輜重とも稱すべき重と靜とを離れないのである。また、その様な聖人は、如何なる榮觀の境遇に居ても、外界の物慾のために心を奪はれず、常に重と靜とに即して靜居し、世俗に超然として居るのである。が、今の世の中の帝王のやつて居る様は、あれはどうしたものか。苟も萬乘の主を標榜して居る帝王の身分でありながら、輕薄、躁擾の限りを盡して居るとは、一體それは何事か。君が輕躁であれば、賢い臣下は出て行つてしまひ、臣下が輕躁なあわてものであれば、賢い君は、早速そんな臣下を追ひ出してしまふ。故に、輕と躁とは、君たる者にも臣たる者にも大禁物である。

考證 □「重爲輕根靜爲躁君」と云ふ四言二句を、レツグは、〔L〕“Gravity is the root of lightness; stillness, the ruler of movement.”(莊重は輕浮の根にして、沈靜は運動の支配者なり。)と英譯して

居る。これは、原意を傳へて居る正譯ではあるが、これよりも、〔G〕“The heavy is the foundation of the light; repose is the ruler of unrest.”(重は輕の基礎にして、安靜は不休の支配者なり。)とあるチャイルスの譯の方が、原文に親しい様に思はれる。□「是以聖人終日行而不離輜重雖有榮觀燕處超然」と云ふ文句を、レツグは、〔L〕“Therefore a wise prince, marching the whole day, does not go far from his baggage waggons. Although he may have brilliant prospects to look at, he quietly remains(in his proper place), indifferent to them.”(故に賢明なる王子は終日行軍するも、彼の輜重車を離れず、見るべき燦爛たる展望を有すとも、自己の居るべき處に靜居して、それらのものには興味を有せず。)と英譯し、チャイルスは、〔G〕“The wise prince in his daily course never departs from gravity and repose. Though he possess a gorgeous palace, he will dwell therein with calm indifference.”(賢明なる王子は日日の行爲に於て莊重と安靜とを離れず。華麗なる宮殿を有すとも、平靜なる無心を以てそこに住す。)と英譯して居る。これは、何れも原意に觸れて居るが、レツグの譯は原文に忠實なる直譯であり、チャイルスの譯は全く意譯である。□「如何萬乘之主而以身輕天下輕則失臣躁則失君」と云ふ文句を、チャイルスは、〔G〕“How should the lord of a myriad chariots conduct himself with levity in the empire? Levity loses men's hearts: unrest loses

the throne.”(何ぞ萬乗の主にして、帝國に於て、輕浮なる行動をなすや。輕浮は人心を失ひ、不休は帝位を失ふ。)と英譯して居るが、これは「輕則失_レ臣、躁則失_レ君」の四言二句を「君輕ければ、則ち天下の人心を失ひ、君躁なれば、即ち自らの帝位を失ふ。」の意に解したものだと思はれる。この四言二句は、この様に解し得られないこともないから、この四言二句に對するチャイルスの譯は、必ずしも誤譯とは云はれない。レックは、[I] “How should the lord of a myriad chariots carry himself lightly before the kingdom? If he do act lightly, he has lost his root (of gravity); if he proceed to active movement, he will lose his throne.”(何ぞ萬乗の主にして、王國の前に於て、輕輕しく身を處するや。若し、彼が輕輕しく行動するならば、彼は莊重の根を失ひたるなり。若し、彼が活動せんとするならば、彼は自らの王位を失はん。)と英譯して居る。これは「輕則失_レ臣」が「輕則失_レ根」、又は「輕則失_レ本」となつて居る刊本に従つたものと思はれるが、それにしても「重爲_二輕根_一」を [I] “Gravity is the root of lightness.”(莊重は輕薄の根なり。)と譯しておきながら、「輕則失_レ根」(「輕則失_レ本」)の「失根」「失本」を、[I] “He has lost his root (of gravity).” (彼は莊重の根を失ひたるなり。)と譯して居るのは、一寸をかしく思はれる。臣の字を根、或は本の字にして、この四言一句を譯するならば [I] “If he moves lightly he will lose the gravity.

the root of lightness.”とでもなすべきであらうが、今私の見解によつて、この四言一句(輕則失_レ臣、躁則失_レ君)を英譯するならば [I] Levity (on the part of the lord) will lose his servants; unrest (on the part of the servants) will lose their lord.”とでもなすべきであらう。レックもチャイルスと同じく、二箇の失の字の主格を、萬乗之主と見て居る。○「靜爲_二躁君_一」が「靖爲_二躁君_一」となり、「聖人」が「君子」となり、「終日行而不_レ離_二輜重_一」が「終日行不_レ離_二其輜重_一」となり、「宴處超然」が「宴處超然」となり、「如何」が「如之何」、又は「奈何」となり、「輕則失_レ臣」が「輕則失_レ根」、又は「輕則失_レ本」となつて居る異本もある。

評論 この第二十六章は、河上公が「人君不_レ重則不_レ尊。治_レ身不_レ重則失_レ神。草木之華輕_レ故零落。根重。故長存。人君不_レ靜則失_レ威。治_レ身不_レ靜則身殆。」と云つて居る通り、君主をはじめ、すべて人の上に立つものは、この現實生活に於て、常に重且つ靜なる行動をなすべきであることを説いたものである。而して、その重に即し靜を守ることが、道と一如たることによつて、はじめて可能になるのであるから、重に即し靜を守れとは、要するに、道的であれと云ふに外ならない。

僧德清は、重の字は、身體を指し、輕の字は、身外の物たる功名富貴を指し、靜の字は、性命を指し、躁の字は、嗜欲の情を指したものと解し、尙ほ「輕則失_レ臣、躁則失_レ君」の臣を、身體の意

第二十六章

に解し、君を性命の意に解して、この二句を「輕躁なれば、身心を失ふ。」と云ふ風に見て居る。これは一異説ではあるが、やや曲解に近い様に思はれる。

第二十七章 (善行無轍迹章第二十七)

本文 善行無轍迹。善言無瑕譎。善計不用籌策。善閉無關鍵。而不可開。善結無繩約。而不可解。是以、聖人常善救人。故無棄人。常善救物。故無棄物。是謂襲明。故、善人者不善人之師、不善人者善人之資。不貴其師、不愛其資、雖知大迷。是謂要妙。

新讀 善行には轍迹なし。善言には瑕譎なし。善計には籌策を用ひず。善閉には關鍵なくして、而も開くべからず。善結には繩約なくして、而も解くべからず。是を以て、聖人は常に善く人を救ふ。故に棄人なし。常に善く物を救ふ。故に棄物なし。是を襲明と謂ふ。故に、善人は不善人の師にして、不善人は善人の資なり。その師を貴ばず、その資を愛せざれば、知たりと雖も大に迷へるなり。これを要妙と謂ふ。

第二十七章

新字解 □善行無轍迹——善行は、自然に即したる言行。無轍迹は、不自然なる痕迹や無理なる結果を残さないこと。轍迹は車輪の回轉によつて作られた路上の痕跡のことで、目苦しきものを表示

した言葉である。□善言無瑕譴——これは、蘇子由が「時然後言、故言滿天下、無一口過」と云つて居る通り、「自然に即し、言ふべき時にのみ言ふのであるから、言葉の上に過失が生じない。」の意。瑕は、本來は「玉のきず」の意であるが、茲では一般の過失のこと。譴は、その過失によつて他から蒙むる咎責のこと。□善計不用籌策——これは、吳澄が「善計者、以不計爲計、故不用籌策」と云つて居る通り、「常に道に即して居て、自然のままに行爲し、長短、多少、輕重、大小などの上に就て、他のものと争ふ様にならないから、度量衡器や算盤なんか用ふる必要がない。」の意。籌策は、謀略、計略などの意にも使用するが、茲では、數量を計算する道具の意。□善閉無關鍵——これは、吳澄が「善閉者、以不閉爲閉、故無關鍵、而其閉自不可開」と云つて居る通り、自然に即したる開放主義によつて生活することに就て云つたものである。吳澄は、關鍵を解して、「關鍵、拒門木也。横、曰關。豎、曰鍵。」と云つて居るが、茲では單に門戸の意に解しておいて差支ない。□善結無繩約——これは、吳澄が「善結者、以不結爲結、故無繩約、而其結自不可解」と云つて居る通り、無拘束主義、無約束主義によつて生活することに就て云つたものである。繩約は、繩でくくることが。□聖人常善救人——行に轍迹の存し、言に瑕譴の生じ、計に籌策を用ひ、閉に關鍵あり、結に繩約あるのは、何れも自と他との間に牆壁を設けるからのことである。而

して、今茲に「聖人常善救人」とは、「道に即せる聖人は、その様な牆壁を必要とせず、道の上に立つて、すべてを抱擁して居るから、すべての人は、自己の現在の状態で、自然のまま、平和、幸福の生活をして居るのである。」の意である。□常善救物——これは、宇宙間に存在して居る事物を、その自然に有する特性によつて、それぞれ利用することを云つたものである。□襲明——この語に對しては、色色な異説があるが、呂吉甫は「方其流轉生死、爲各自蔽、而推吾至明、以與之、使暗者皆明。如燈相傳、相襲而不絶。故謂之襲明」と云ひ、蘇子由も「救人于危難之中、非救之大者也。方其流轉生死、爲物所蔽、而推吾至明、以與之、使暗者皆明。如燈、相傳相襲、而不絶、則謂善救人矣。」と云つて、襲明を『維摩經』(菩薩品第四)に於ける無盡燈の意に解して居る。この見解に従へば、襲明とは、永遠より永遠に流れつつある人類の生命原たる佛性に外ならない。(考證參照) □師資——師は、師匠の意、資は、弟子、又は補助者の意。□雖知大迷——これは、「如上の道理を悟得し居らざるものは、自ら物知り顔をして居ても、實は道理に迷つて居るものである。」の意。□是謂要妙——これは、「如上の善人不善人の關係を悟了することは、道の上に於て、至要至妙の事である。」の意。

新譯 常に道に即して居る者は、自然の理法に従つて行動するから、その行蹟の上に少しも不自

然の痕跡をとどめない。即ち、自分の虚名を博するために、無理な施設をしたり、自分の鈍腕を敏腕に見せかけるために、不合理な規則を實施したりする様のがないから、その行動は自然のままに進行し、少しも是非、善惡の批評を挿む餘地を存しないのである。道に即せる善言もその通り、言ふべき時に臨んで言ひ、虚名を博するために自己廣告をするに云ふ様のことはないから、自分の云つた言葉にも過失がなく、その言葉に對して、他から叱責せらるる様のこともない。兎角世の中の人間は、何時も算盤を懷にして居て、何もかも、一二が四、二三が六と云ふ風に計算しなければ承知せず、それがため色色なる社會的罪惡が生ずるのであるが、道に即せる者は、無計を以て善計となし、度量衡の様なあてにならないものは一切使用しない。善閉は、實は一切開放主義であつて、何處かの文化生活者の家屋の様、泥坊除のために、家族のものが夜の目も眠られない様な馬鹿なことはしないが、開放主義の無閉の家屋を開けて這入る様な泥坊はない。道に即せる者は、無結を以て善結として居る。即ち、何物をも束縛せず、何人をも拘束しないから、何物もほどけることなく、何人も繩を解いて逃げる様なことはない。これに反して、世の中の人人は、曲りなりにも轍迹をのこさうとして盲動するから、自から善行と思つて居ることは實は惡行になり、瑕譴に無貪著で、無暗に言論するから、自から善言と思つて居ることは實は惡言になり、一から十まで算

盤ではじき、一分一厘の末までも争ふから、終には算盤がもてなくなり、無暗に閉鎖主義を執るから、萬事がメチャ、クチャに破壊されてしまひ、證文でかため、公證人の手でかため、捕繩でかため、萬事萬端に拘束、約定主義を執るから、證文は反古にされ、獄吏は袋叩きにされる様なことになるのである。であるから、聖人はそんな野暮なことはしない。人類各自の固有せる道的共通性(謂ゆる「一切衆生悉有佛性」的人間性)を確認して、そのすべてを、道の中に自己と共に抱擁してしまふのである。であるから、世の中に、これは無用の長物だと云つて棄つべきものは一人もない。社會的に善人と見えて居る人も、また惡人と見えて居る人も、聖人の眼からこれを見れば、等しくこれ道の分裂したる分子である。聖人は人類に對してのみ、その様な見解を有するのではなく、事物に對しても、また同様な待遇をして居る。聖人の眼には、棄つべきもの、即ち無用のものは一つも映じない。あらゆる事物、皆これ道の物質的分裂として映するのである。これは有益なるものだ。これは廢物だなんか云ふのは、要するに、人間の短見少慮から生ずる言葉に外ならない。人と物とを、斯の如く見る、これを事物の佛性觀と稱するのである。この見地に立つて、世の謂ゆる善人と惡人との相對的關係を見れば、善人と稱せられて居る者は、無論、不善人と稱せられて居る者の善に進む上の師であるに相違ないが、その善人の善人として社會に認められ得るのは、不善人の存

在によるものであるから、不善人は善人を善人となすための補助者であるとも云ひ得られる。さすれば、この現実生活の協調的持續には、謂ゆる善人も不善人も、同等の役目を果して居るのであるから、お互は、善人を貴ぶと同時に、不善人も愛すべきではあるまいか。この道理を知らないものは、自分で物知り顔をして居ても、實は宇宙人生の妙諦に迷へる凡夫である。この道理妙諦を悟得すること、これを道の要妙と謂ふのである。

考證

□「善行無轍迹善言無瓊詭」と云ふ五言二句を、

レツグは、(L) "The skilful traveller leaves

no traces of his wheels or footsteps; the skilful speaker says nothing that can be found. fault with or blamed." (巧なる旅行者は、轍迹又は足跡を残さず。巧なる辯士は、非難され、又は咎めらるべき何事をも言はず。)と英譯し、ジャイルスは (G) "The skilful traveller leaves no tracks; the skilful speaker makes no blunders." (巧なる旅行者は足跡を残さず。巧なる辯士は大なる過失をなさず。)と英譯して居る。善行を "The skilful traveller." (巧なる旅行者) と譯して居るのは、必ずしも誤譯とは云はれないが、この場合の善は、第十五章に「古之善爲士者」とある善と同じく、道に即することを意味し、行は、その行爲者の意であるから、私の見解によれば、この五言二句は、

(I) "The good practiser of Tao shows no merit in his deeds; the good speaker of Tao makes

no blunders in his speech." とも譯すべからう。□「善計不用籌策善閉無關鍵而不可開善結無繩約

而不可解」と云ふ文句を、レツグは、(L) "The skilful reckoner uses no tallies; the skilful closer

needs no bolts or bars, while to open what he has shut will be impossible; the skilful binder uses no strings or knots, while to unloose what he has bound will be impossible." (巧なる計算者は計數符を用ひず。巧なる閉門者は、門には棒を要せざれども、彼の閉ぢたるものを開くことは不

可能なり。巧なる結束者は、繩又は結び目を用ひざれども、彼の結びたるものを解くことは不可能なり。)と英譯して居るが、これは原意を的確に傳へて居る様に思はれる。□「是以聖人常善救人故無棄

人常善救物故無棄物是謂襲明」と云ふ文句を、レツグは、(L) "In the same way the sage is always

skilful at saving men, and so he does not cast away any man; he is always skilful at saving things, and so he does not cast away anything. This is called 'Hiding the light of his procedure.'"

(それと同様に、聖人は、人を救ふ上に於て常に巧なり。故に彼は如何なる人をも棄てず。彼は物を救ふ上に於て常に巧なり。故に彼は如何なる物をも棄てず。これを彼の處理の光明を隠すことと謂ふ。)と英譯して居る。惟ふに、彼は「老子元翼」に、「襲、相傳襲也。一作「掩襲之襲、言密用也。」とあるのにより、襲明を掩明の意に解したものだと思はれるが、この見解は、老子の原意ではない様

に思はれる。チャイルスは、「是謂○襲明」を解して、〔G〕“This is called comprehensive intelligence.”（これを包含的明智と謂ふ。）と譯し、オールドは、〔O〕“His intelligence is all-embracing.”（彼の明智は、全抱擁的なり。）と譯して居るが、何れも私の見解とは相異して居る。私の見解によつて、この全文句を英譯するならば、〔I〕“In the same way the sage is always skilful at saving men, and therefore there is none whom he rejects; he is always skilful at saving things, and therefore there is nothing that he rejects. This is because he sees in everyman and also in everything the inherent light, identical with Tao.”とでもなすべきであらう。□「故善人者不善人之師不善人者善人之資不貴其師不愛其資雖知大迷是謂要妙」と云ふ文句を、チャイルスは、〔G〕（The good man is the bad man's teacher; the bad man is the material upon which the good man works. If the one does not value his teacher, if the other does not love his material, then despite their sagacity they must go far astray. This is a mystery of great import.）（善人は悪人の師にして、悪人は善人に加工せらるる所の資料なり。若し、悪人が彼の師を貴ばず、善人が彼の資料を愛せざる時には、彼等の聰明なるに拘はらず、彼等は遙に迷はざるべからず。これを偉大なる意味ある神秘と謂ふ。）と英譯し、レッグは、善人を“Skin”（技倆）を有する者、悪人を“Skin”（技倆）を有せざる者の意に解して、チャイルス譯の意義とは、全く異つた意義に譯して居るが、何れも、私の見解とは相異して居る。この文句は、私の見解通りに譯するならば、〔I〕“Good men are bad men's teachers, while bad men are helpers who enable them to be known as good men. If one does not know how to esteem the teachers and to love their helpers, though he may think himself intelligent, he is far from Tao, in which the knowledge of the above is considered important and mysterious.”とでもなすべきであらう。是謂○要妙」と云ふ四言一句を、レッグは、〔I〕“This is called the utmost degree of mystery.”（これを神秘の最高度と謂ふ。）と譯し、オールドは、〔O〕“This is no less important than strange.”（これは不思議と云ふよりも寧ろ重大なるものである。）と譯して居るが、何れも原意に親しくない様に思はれる。○「善行無○轍迹」が「善行者無○轍迹」となり、「轍迹」が「徹迹」となり、「善言無○瑕譴」が「善言者無○瑕譴」となり、「善計不用○籌策」が「善數者無○籌算」となり、「善閉無○關鍵」が「善閉者無○關鍵」となり、「而不○可○開」が「故不○可○開」となり、「善結無○繩約」が「善結者無○繩約」となり、「而不○可○解」が「故不○可○解」となり、「故無○棄人」が「故人無○棄人」となり、「故無○棄物」が「故物無○棄物」となり、「故、善人者」が「故、善人」となり、「不善人者」が「故不善人」となり、「雖○知」が「雖○智」となり、「是謂○要妙」が「此

謂要妙ことなつて居る異本もある。

評論 この第二十七章の前半は、無爲の大道を、言行、計量、その他、處世上の行爲に適用し、實踐したる効果を叙し、その後半に於ては、道に即せる聖人が、その現實生活に於て、人と物とを如何に觀察し、如何に取扱ふかに就ての叙述であつて、この叙述に含蓄されて居る思想は、「維摩經」に含まれ居る現實肯定論と、その基調を同じくして居る。火災の起ることあるによつて、消防夫は衣食し、火災保険は營業され、悪人あることによつて、司法官は衣食し、司獄吏は生活し、病氣の存在によつて醫學博士は生活し、藥屋は繁昌し、犯罪者のあることによつて、警察官は衣食して居る事實を、虚心平氣に靜觀し、考察して見れば、「善人者不善人之師、不善人者善人之資」と云ふ老子の言葉に、多大の含蓄の存することが知れるではあるまいか。而して、「聖人常善救人。故無棄人」と云ふ思想は、正にこれ四海同胞主義の實現を可能ならしむる所のものであり、「常善救人。故無棄物」と云ふ思想は、實に人生に於けるあらゆる厚生利用の途の基礎的觀念であり、また民衆の勤儉貯蓄を可能ならしむるものではあるまいか。

第二十八章 (知其雌章第二十八)

知其雌、守其雌、爲天下谿。爲天下谿、常德不離、復歸於嬰兒。知其雌、守其雌、爲天下式。爲天下式、常德不忒、復歸於無極。知其榮、守其辱、爲天下谿。爲天下谿、常德乃足、復歸於樸。樸散則爲器。聖人用之、則爲官長。故、大制不割。

新讀方 その雌を知りて、その雌を守れば、天下の谿となる。天下の谿となれば、常德は離れずして、嬰兒に復歸す。その白を知り、その黒を守れば、天下の式となる。天下の式となれば、常德は忒はずして、無極に復歸す。その榮を知り、その辱を守れば、天下の谿となる。天下の谿となれば、常德は乃ち足つて、樸に復歸す。樸散すれば則ち器となる。聖人これを用ひて、則ち官長となる。故に、大制にして割かざるなり。

知其雌守其雌——これは、林希逸が「知其雌守其雌、不求勝也。」と云つて居る通り、中に剛勇(雄)ありと雖も、外に對して柔順(雌)なる態度を持し、他に勝たんとする競争心なきこと

を云つたものである。□爲天下谿——これは、天下民衆が、すべて歸服することを表現した言葉である。□常德——常住不變の徳、即ち「道の徳」の意。□知其白守其黒——白は明達の意。黒は晦匿の意で、この三言二句は、中には明達の才能ありと雖も、外に對しては、その才能を晦匿して居ることを云つたものである。□天下式——これは第二十二章に「是以、聖人抱一、爲天下式」とある。天下式と同義で、天下民衆の典型となること。□不忒——忒は差異の義で、不忒は、一如となること、又は一致契合して居ること。□無極——これは、第十四章に「復歸於無物」とある無物と殆ど同義で、無始無終の道を指したものである。□知其榮守其辱——榮は貴の意、辱は賤の意で、この三言二句は、中には高貴なる徳性を有すと雖も、外に對しては、卑賤の態度を持して居ることを云つたものである。□足——これは、完備、充實の意。□樸——これは、第十九章に「見素抱樸」とある樸と同義で、道の純朴性を表示した語である。□樸散——これは、文字上では、樸（山から伐りたての木材）が加工されることであるが、茲では、道の現象化することを云つたものである。□爲器——これは、文字上では、色色なる器具になることであるが、茲では、道の現象化して、色色なる方面に於て厚生利用の作用をなすことを云つたものである。□官長——これは、王純甫が「群有司之長也。」と解して居る通り、總理大臣のことであるが、茲では、道に即せる王者を指したものと見るべきである。□大制不割——これは、蘇子由が「因其勢之自然、雖制而非有割裂也。」と云ひ

林希逸が「以道制物、謂之大制」と云つて居る通り、道に即せる王者は、すべてに道の自然法を適用し、その統治の上に、散じて器となつた人爲法を使用しないことを云つたものである。

新譯 人と争はないこと、人と競争をしないことは、道に即せるものの、常に實踐躬行して居ることであるから、苟も道の上に立つて居るものは、雄にも比すべき剛勇を有して居ても、その雄を現はさず、常に雌にも比すべき柔順を以て世に處して居る。それで、天下民衆は、何れもその道者に歸服すること、衆水の谿谷に集るが如きである。天下の谿の如くなれば、常德は常にその道者に附隨して居り、その道者の心情は、既に嬰兒のそれに復歸して居るのである。また、道に即して歩むものは、榮達を人と争はないから、中には如何に明達の才能があつても、外に對しては晦匿の態度をとり、自からの才能を他に誇示する様のこととは決してしない。それで却て天下民衆の典型になつて居る。天下の式となれば、常德は既にその道者と契合し、その永存性は無極に復歸して居るのである。また、道に即して歩むものは、榮達を願はず、常に忍辱の境界に安住し、天下の谿となつて居る。天下の谿となれば、もはや常德は、その道者に充實し、その性情は道の純朴性に復歸して居るのである。山から伐り出したばかりの木材が、色色に加工されて種種なる器具になる如く、道

の純朴性も現象化すると、色色なる人爲的作用に分解されるが、聖人はその加工された人爲的作用は用ひず、樸のままて用ひ、道に即せる王者となるのである。故に、その様な王者の統治は、謂ゆる大制であつて、樸の散した人爲法にはよらないのである。

考證

□「知其雄守其雌爲天下谿爲天下谿常德不離復歸於嬰兒」と云ふ文句を、チャイルスは、〔G〕“He

who, conscious of being strong, is content to be weak,—he shall be the paragon of mankind. Being the paragon of mankind, virtue will never desert him. He returns to the state of a little child.”(自からの強勇なることを知りつつ柔弱に満足せる者は、人類の模範たるべし。人類の模範となつて、徳は決して彼を見棄てず。彼は小兒の状態に復歸す。)と英譯して居るが、爲[○]天[○]下[○]谿[○]を、〔G〕“He shall be the paragon of mankind.”(彼は人類の模範たるべし。)と譯してあるのは、如何に考へて見ても、誤譯としか思はれない。オールドは、この一句を、〔O〕“He will become an universal channel.”(彼は全人類の水路となるならん。)と譯して居るが、谿[○]を“Channel”(水路)と譯するのは、適譯でない。私はこの一句を〔I〕“He will become like a deep valley, attracting all people in the world, as the valley attract all waters.”と譯しては如何かと思ふ。□「知其白守其黑爲天下式爲天下式常德不忒復歸於無極」と云ふ文句を、チャイルスは、〔G〕“He who, conscious of his

own light, is content to be obscure,—he shall be the whole world's model. Being the whole world's model, his virtue will never fail. He reverts to the absolute.”(自からの光明を知りつつ、晦匿に満足せる者は、全世界の模範たるべし。全世界の模範となつて、彼の徳は決して見限らず。彼は絶対に復歸す。)と英譯して居るが、これは原文に忠實なる譯と云ふべきであらう。□「知其榮守其辱爲天下谿爲天下谿常德乃足復歸於樸」と云ふ文句を、チャイルスは、〔G〕“He who, conscious of desert is content to suffer disgrace—he shall be the cynosure of mankind. Being the cynosure of mankind, his virtue then is full. He returns to perfect simplicity.”(自からの功績を知りつつ、屈辱を忍ぶ者は、人類瞻仰の的となるべし。人類瞻仰の的となれば、彼の徳は充實せるなり。彼は完全なる質朴に復歸す。)と英譯して居るが、爲[○]天[○]下[○]谿[○]を、〔G〕“He shall be the cynosure of mankind.”(彼は人類瞻仰の的となるべし。)と譯するのは、誤譯としか思はれない。これは宜しく、前の爲[○]天[○]下[○]谿[○]と同様に譯すべきであらう。□「樸散則爲器聖人用之則爲官長故大制不割」と云ふ文句を、レックは〔I〕“The unwrought material, when divided and distributed, forms vessels. The sage, when employed, becomes the head of all the officers (of government); and in his greatest regulations he employs no violent measurs.”(加工せざる材料は、分割され分配されたる時に、器具となる。聖

人は、使役せらるる時に、すべての官吏の首長となり、彼は彼の最も偉大なる規則に於て、無法なる處置を執らず。と英譯して居るが、どうも原意が、十分に傳へられて居ない様に思はれる。私の見解によれば、これは、(I) Plain wood, when worked upon, becomes various vessels; (so the simplicity of Tao, when employed in life, is wrought into various functions). The sage employs this simplicity when he becomes the ruler of the kingdom, Therefore his greatest way of governing is like the unwrought wood before it has been fashioned.”とでも譯すべきではあるまいか。○「爲天下谿」が「爲天下溪」となり、「守其辱」爲天下谿」が「守其辱」爲天下谷」となり、「故大制不割」が「大制不割」となつて居る異本もある。

評論 この第二十八章は、剛と柔、明と晦、榮と辱との上に於て、道に即せるものは、常に柔を守り、晦を守り、辱を守り、以て嬰兒に復歸し、無極に復歸し、樸實に復歸して、常德と一如し得ることを叙し、その結尾に於て、道に即せる王者は、その行政の上にも、現象化せざる道の根本義を適用し、決して人爲的に煩瑣なる條規を用ひざることを力説したものである。

第二十九章 (將欲取天下章第二十九)

本・文 將欲取天下而爲之、吾見其不可得己。天下神器、不可爲也。爲者敗之、執者失之。凡物、或行、或隨、或嘘、或吹、或強、或羸、或載、或墮。是以、聖人去甚、去奢、去泰。

新讀方 天下を取つて、これを爲めんと將欲するも、吾はその得ざるを見るのみ。天下は神器なれば、爲むべからざるなり。爲めんとする者はこれを敗り、執らんする者はこれを失はん。凡そ物は或は行き、或は隨ひ、或は嘘き、或は吹き、或は強くし、或は羸くし、或は載り、或は墮る。是を以て、聖人は甚を去り、奢を去り、泰を去るなり。

新字解 □將欲—將は希願の意で、將欲は、熱望すること。□爲之—これは、自分の意のままに統治せんとすること。□爲者—政治上に小刀細工を施すもの。□執者—何時までも、自分の所有にせんとするもの。□凡物—「すべて宇宙間の事物は」の意。□或行或隨或嘘或吹或強或羸或載或墮—これは、蘇子由が「陰陽相蕩、高下相傾、大小相使、或行于前、或隨于後、一或响而煖之、或吹而寒之、或益而強之、或損而羸之、或載而成之、或墮而毀之。皆物之自然而勢之不免者

也。」と云つて居る通り、宇宙間の事象の處理には、それぞれ自然の法則の存するものであるから、無暗に人爲的小刀細工を施すべからざることを云つたものである。□去甚去奢去泰——これは、極端なる行動(甚)、極端なる贅澤(奢)、極端なる驕傲(泰)を除去するの意で、甚・奢・泰は、第二十四章にある「餘食贅行」の如きことを云つたものである。

世の中には、政治屋とか、政黨商とか云ふものがあつて、天下を我物にして、自己の野心通りに、民衆を統治しようとして居るが、老子は、そんなものが、いくら騒いでも、成功は一時だけのことで、何時までもそんなことをなし得るものではないと思つて居る。元來、天下は天下の天下で、侵すべからざる權威を有してゐる一大神器であるから、一箇人の自由にさるべき性質のものではない。そんな無鐵砲なことをするものは、必ず失敗に終るにきまつて居るし、また一旦、僥倖して、無理に天下の政權を握つた所で、何時までもそれに固執して居ると、何時かは必ずそれを失つてしまふに相違ない。天下の事象は、各自その特性を有して居るのであるから、一箇人の考で、人爲をもつて、そのすべてに對し、千篇一律の規則を、無理に不自然に適用すべきものではない。爲政者の大馬鹿な所は、同一の法律を以て、自然性の相異つて居る萬人を統治しようとする所に存する。これを疑ふものは、世の中の實際の有様を見るがよい。脚の速い人は、脚の遅

い人よりも先に行き、脚の遅い人は、脚の速い人よりも後に行き、手のつめたい子供の手は、口で軽く吹いてあたためてやり、火傷をした子供の手は、口で強く吹いてさましてやり、新築の家は完成しなければならず、腐朽した家は破壊してしまはなければ危険である。然るに、車の速力に遅速の差があり、乗つて居る人の要事にも緩急のあるのを考慮せずして、後車は、どうしても、前車を乗越すことは出来ないと言ふ様な規則で以て天下を統治しようとして居るから、實にたまらない。要するに、聖人は、事物の自然性を尊貴し、無暗に不自然なことは行はない。ただ極端なる甚と奢と泰とを除去することを企圖して居るのである。

考證 □「將欲取天下而爲之吾見其不得已天下神器不可爲也爲者敗之執者失之」と云ふ文句を、チャイル

スは、(G) "If any one desires to take the empire in hand and govern it, I see that he will not succeed. The empire is a divine utensil which may not be roughly handled. He who meddles, mars. He who holds it by force, loses it." (人、天下を取り、これを治めんと欲するも、我はその成功せざるを見る。天下は神器にして、粗暴に取扱はるべきものにあらず。干渉する者は毀損し、強ひて保持する者は失ふなり。)と英譯し、レッグもこれと同意義に英譯して居る。何れも原意には觸れて居るが、爲者敗之は、取つて爲めんとする者に就て云ひ、執者失之は、一旦、取つた上に

これを何時までも保持せんとする者に就て云つたものであるから、この文句は、私の見解によれば、〔D〕“Although one may desire to take the empire in hand, and govern it according to his own wishes, I am sure that he will never realize his desire. The empire is a divine vessel which can not be artificially treated. He who tries to take it in hand will spoil it; he who tries to hold it for ever will lose it.”とでも譯すべきであらう。□「凡物或行或隨或嘘或吹或強或嘘或載或墮」と云ふ文句を、オールドは、〔O〕“For perforce if one advances another is left behind; if one blows hot another will blow cold; if one be strengthened another will be weakened; if one be supported another will be undermined.”(なぜなれば、若し一人が前行すれば、他の一人は後に残され、一人が吹いて熱くすれば、他の一人は吹いて寒くし、一人が強くせらるれば、他の一人は弱くせられ、一人が保持せられるれば、他の一人は顛覆せらるるは、天下必然のことなればなり。)と英譯し、レツグは、「前にあつたものは、今は後にあり、暖められたものは、間もなく凍結し、強かりしものは弱くなり、故跡に埋没せるものは、我等の辛勞を嘲弄す。」と云ふ意義に英譯して居る。オールドの譯は、多少原意に觸れて居る様であるが、レツグの譯は、全く誤譯である。殊に或載或墮を〔L〕“The store in ruins mocks our toil.”「故跡に埋没せるものは、我等の辛勞を嘲弄す。」と譯して居るの

は、如何なる誤謬から生じた譯であるか、私には少しも見當がつかない。この全文句は、沈一貫が「物理之常、或行而先、或隨而後、或响而温、或吹而寒、或強而剛、或羸而弱、或載而成、或墮而壞、不齊如此。因其勢而導之、易簡而理得、違其性而擾之、煩勞而罔功。」と云つて居る通り、世の中の事象は、謂ゆる十人十色千差萬別であることを云ひ、爲者敗之の理由を叙述した言葉であるから、この見解によつて、今この全文句を英譯するならば、〔I〕“A variety of things in the world is large; one can go ahead, while another walks behind; one may be gently blown to warm while another may be violently blown to cool; one may be strengthened, while another may be weakened; one may be completed, while another may be destroyed.”とでもなすべきではあるまいか。□「是以聖人去甚去奢去泰」と云ふ文句を、レツグは、〔L〕“Hence the sage puts away excessive effort, extrarvagance, and easy indulgence.”(是を以て、聖人は過度の努力と驕奢、及び安泰なる耽溺を除去す。)と英譯し、オールドは、〔O〕“Therefore the sage gives up all enthusiasm, levity, and pomp.”(故に、聖人は、すべての熱中と輕浮と華麗とを棄つ。)と英譯して居る。レツグの譯は、必ずしも誤譯とは云へず、この原文を彼の解して居る様に解することも出来るが、オールドの譯は、全く原意を離れて居る。私の見解によれば、これは、〔I〕“Therefore the sage is satis-

fed with obviating extremes in action, luxury in livings, and haughtiness in attitude.” とも譯すべきであらう。○「取天下而爲之」が「取天下而爲之者」となり、「天下神器」が「夫天下神器也」となり、「爲者」が「作者」となり、「或嘘、或吹」が「或噤、或吹」又は「或响、或吹」となり、「或強、或羸」が「或彊、或判」、又は「或強、或挫」となり、「或載、或墮」が「或培、或墜」となり、「是以」が「故」となつて居る異本もある。

評論 この第二十九章は、まづ冒頭に於て、謂ゆる侵略主義によつて天下の大權を掌握せんとした所で、迺もそれが、達成せらるるものにあらざることを道破し、次に、天下は神聖にして侵すべからざるものなるが故に、一箇の私欲によつて、左右すべきものにあらざることを云ひ、更に「爲者敗之、執者失之」と力説したものであるが、「凡物」より「或墮」までは、宇宙人生に於ける事象の差別相を説き、その鶴長鴨短、松直棘曲底のものを、一箇の私見を以て律することの不可能なることを暗示し、最後に於て聖人の治世の方法を叙したものである。

第三十章 (以道佐人主章第三十)

本義 以道佐人主者、不以兵強天下。其事好還。師之所處、荆棘生焉、大軍之後、必有凶年。故、善者果而已矣。不敢以取強焉。果而勿矜。果而勿伐。果而勿驕。果而不得已。果而勿強。物壯則老。是謂不道。不道早已。

新讀 道を以て人主を佐くる者は、兵を以て天下を強くせず。その事は還るを好むなり。師の處りし所には、荆棘生じ、大軍の後には、必ず凶年あり。故に、善者は果して已む。敢て強をとらず。果して矜ることなかれ。果して伐ることなかれ。果して驕ることなかれ。果して已を得ざれ。果して強なることなかれ。物は壯なれば則ち老ゆ。これを不道と謂ふ。不道なれば早く已むなり。

新字解 □以道佐人主者——これは、老子の理想とせる道によつて君主を輔佐する者、即ち道に即せる國務大臣の如きものを云つたもの。□其事好還——これは、「人間萬事塞翁馬」の如きことを云つたもので、「世の中の物事は、すべて吉と凶、盛と衰、強と弱、勝と敗など相表裏し、相回旋するもの

である。」の意。□師之所處荆棘生——これは僧德清が「師之所處、必蹂躪民物、無不殘掠、故荆棘生。」と云つて居る通り、兵馬に蹂躪された戦場は、戦後には荆棘の荒野になるの意。□大軍之後必有凶年——これは、僧德清が「大軍之後、殺傷和氣、故五穀秕糲、而年歲凶。」と云つて居る通り「大戦後には必ず餓饉年がある。」の意。□善者——これは、「善用兵者」の意で、戦争の上に道の根本義を應用する將軍を指したもの。□果而已矣——これは、僧德清が「已者、休也、止也。果、猶言結果。」俗云、了事便休。」と云ひ、吳澄が「兵之善者、果決於一時、以定亂而已。」と云つて居る通り、萬やむを得ざる場合に戦争をしても、その目的を果したならば、もうそれでやめてしまふこと。□不敢以取強焉——これは、戦争に勝誇つて、何時までも強大なる軍備を有する様なことなきこと。□果而——これは「戦争の目的を達した後」の意。□果而不得已——これは、「一旦、戦争の目的を達成したる上に、更に戦争を始めるのは、萬やむを得ざる時のみにせよ。」の意。□是謂不道——是は、強、矜、伐、驕などを指したもの。不道は、道に反せることの意で、不自然のこと。

新譯 冲虚の大道に即して、君主輔佐の任にある者は、強大なる軍備を以て、その國を富貴にしようとする様のことではない。人間萬事塞翁馬、強くなるのは、弱くされるのはじめである。兵馬に蹂躪された田畑が、荒野となつて荆棘に蔽はれ、大戦争のあつた後に、凶年のあるにきまつて

居ることは、歴史の上に明白に證明されて居るではないか。故に、道に即して兵を起す者は、必要に迫られた時には戦争をするが、その目的を達成すれば、その上、強大なる兵力を支持して、他日の用に備へると云ふ様のことではない。戦争の目的を達成した上に、矜り伐つたり、驕り高ぶつたりする様ことはしてはならない。一旦、戦争をし、その目的を達成した上に、更に戦争を起すのは、それは萬やむを得ない時ばかりに限ること。それで、またその目的を達成しても、何時までも強大なる軍備を維持することは大禁物である。すべて物事は、強とか、矜とか、伐とか云ふ壯なることは、一時は有勢であつても、何れ早晩は老衰、頽廢してしまふのが常であるが、そんなことは、道の上から云へば、實に不自然至極の不道である。不道なものが何時までも存続した例は、曾てあつたことがない。必ず没落してしまふにきまつて居るのである。

考證 □「以道佐人主者不以兵强天下其事好還」と云ふ文句を、レツグは、〔L〕「He who would assist

a lord of men in harmony with Tao will not assert his mastery in the kingdom by force of arms. Such a course is sure to meet with its proper return,」（道に協調して、人主を輔佐する者は、兵力によつて、王國に於ける統御を主張せず。かかる行爲は、その正當なる返報に遭遇すべし。）と英譯し、チャイルスも、これと同意義に英譯して居る。これは必ずしも誤譯とは云へないが、私は

これを、〔I〕“He who in accordance with Tao assists the lord of people, does not try to streng- then the kingdom by means of strong weapons. Things unnatural are apt to return to their natural conditions.”と譯した方が、却て原意に親しくなるではなからうかと思ふ。□「師之所處荆棘生焉大軍之後必有凶年」と云ふ四言四句を、チャイルスは、〔G〕“Where troops have been quartered, brambles and thorns spring up. In the track of great armies there must follow lean years.”(軍隊の屯せし處には荆棘生じ、大軍のあとには凶年續くべし。)と英譯し、レッグもこれと同意義に英譯して居るが、これは原文に忠實な適譯である。□「故善者果而已矣不敢以取強焉果而勿矜果而勿伐果而勿驕果而不得已果而勿強」と云ふ文句に對する英譯は、レッグのも、チャイルスのも、オールドのも、多少原意に觸れて居る所がないでもないが、大體に於て、非常に原意に遠ざかつて居る。これは、原文の構造が古雅であつて、普通の漢文法で律することの出来ないためであらうが、私の見解によつて、今これを英譯するならば、これは、〔I〕“The skillful commander (who is with Tao) strikes a decisive blow only when necessary, and when his end is gained he stops remaining strong. After having achieved what one aimed at, one should not be proud, exultant or boastful of one's achievement. After having achieved what one aimed at, one may repeat another decisive blow only when

occasion requires, and thereafter strong weapons should no longer be valued.”とでも譯しては如何かと思ふ。□「物壯則老是謂不道不道早已」と云ふ四言三句を、レッグは、〔I〕“When things have attained their strong maturity they become old. This may be said to be not in accordance with the Tao: and what is not in accordance with it soon comes to the end.”(事物は、その壯なる成熟を達成したる時に、老ゆるに至る。こはその道に即し居らざるによると謂ふべし。道に即せざるものは、速に終に至る。)と英譯して居る。この四言三句は、この様に解することも出来るとは思はれるが、私の見解とは相違して居る。元來、この「物壯則老」の一句は、前にある「其事好還」に照應して居る言葉であつて、「其事好還」が「師之所處、荆棘生焉、大軍之後、必有凶年」と云ふ言葉によつて説明せられて居ると同時に、この「物壯則老」の一句は「果而勿矜、果而勿伐、果而勿驕、果而勿強」と云ふ禁止の言葉に對し、その禁止の理由を説明して居る結語であり、物壯は、矜、伐、驕、強に就て云つたものと解すべきである。今この見解によつて、この四言三句を英譯するならば、〔I〕“When things reach a stage of excessive prosperity, decline is apt to set in. To be proud, to be exultant, to be boastful and to be strong,—these are said to be against Tao; anything against Tao soon will cease to exist.”とでもなすべきであらう。○「佐人

主「者」が「作人主者」となり、「不以兵強天下」が「不以兵強於天下」となり、「故善者果而已矣」が「善者果而已」となり、「果而勿矜、果而勿伐、果而勿驕、果而不得己、果而勿強」の五箇の勿の字が於の字になり、「果而勿強」が「是果而勿強」とあり、「不道」が「非道」となつて居る異本もある。

評論 この第三十章は、大體から云へば、強大なる軍備を以て、國家の安康、民衆の幸福を企圖せる軍國主義者に對する警告であつて、まづ冒頭に於て、苟も道に即して居て、一國の宰相となつて居る者は、兵力を以て國家を強大にすることを企圖すべきものではないことを云ひ、次に戦争より生ずる弊害を説いて居る。併し、老子が「善者果而已矣」と云つて居る所を見れば、彼はすべての戦争を一切否定するものではなく、ある種の戦争には肯定性の存することを認めて居る。即ち、老子は、絶對的無抵抗主義を、個人的に守ることの必要は、常に主張して居るが、一國家がその國の獨立安寧のために、國家的に戦争を起すことを必要とする場合のあることを認め、且つ、その様な戦争は否定すべきものでないと考へて居る様に思はれる。要するに、老子の忌厭して居る所は、軍備を以て平和を維持せんとする軍國主義と、戦勝に耽溺し、軍功に誇つて驕奢になり、その結果より生ずる軍備擴張とである。

第三十一章 (夫佳兵章第三十一)

本文 夫佳兵者不祥之器、物或惡之。故、有道者不處。是以、君子、居則貴左、用兵則貴右。兵不祥之器、非君子器。不得己而用之、恬淡爲上、勝而不美。美之者、是樂殺人。樂殺人者、則不可得志於天下矣。(故、吉事尙左、凶事尙右。是以、偏將軍處左、上將軍處右。言以下以喪禮處之。) 殺人衆多、則以悲哀泣之、戰勝者、則以喪禮處之。

新讀方 夫れ佳兵は不祥の器にして、物或はこれを惡む。故に、有道者は處らざるなり。是を以て、君子は、居るには則ち左を貴び、兵を用ふるには則ち右を貴ぶ。兵は不祥の器にして、君子の器にあらず。やむを得ずしてこれを用ふるも、恬淡を上となし、勝つとも而も美とせざるなり。これを美とする者は、これ殺人を樂むなり。殺人を樂む者は、則ち志を天下に得べからず。(故に、吉事には左を尙び、凶事には右を尙ぶ。是を以て、偏將軍は左に處り、上將軍は右に處る。喪禮を以てこれに處るを言ふなり。) 人を殺すこと衆多なれば、則ち悲哀を以てこれを泣き、戦に勝てば則ち

喪禮を以てこれに處るなり。

新字解 □佳兵者——これは、僧德清が「佳兵、乃用兵最精巧者、謂之佳兵」と云ひ、吳澄が「佳、猶云嘉之也。」と云つて居る通り、「兵器を巧妙に使用する者」の意に解し得られないこともないが、次に「不祥之器」と續いて居るから、佳兵は、「精銳なる兵器」の意に解すべきである。併し、佳兵者をどうしても「兵器を巧妙に使用する者」の意に解するならば、不祥之器の器は人物の意に解するより外、詮方あるまい。□不祥之器——これは、僧德清が「兵益佳而禍益深。」と云つて居る通り、兵器が精銳なればなるほど、それより生ずる禍害の多きことに就て云つた言葉である。□物或惡之——これは、第二十四章にある「物或惡之」と同じく「何人も好まない。」の意。□有道者不處意。有道者は、道を守つて居る者で、第五章にある「善爲士者」と同義。□居則貴左用兵則貴右——これは、「有道者が戰場に居ない。」の意ではなく、「有道者は、佳兵を處理（使用）しない。」の意。有。道。者。は。道。を。守。つ。て。居。る。者。で。第。五。章。に。あ。る。「善。爲。士。者」と同義。□居則貴左用兵則貴右——「禮記（郊特牲第十一）に「君之南嚮、答陽之義。臣之北面、答君也。」とある通り、帝王が南面すれば、東方が左手の方向になり、西方が右手の方向になり、東（左）は陽（生起）を意味し、西（右）は陰（伏没）を意味すると云ふので、古來、支那では、左方を吉禮の位に配し、右方を凶禮の位に配して居るのである。而して、今この四言一句は、その禮法に關係のある言葉で、「道に即せる君子

は、平常、平和の時には、左方（吉）を上位として貴ぶのであるが、戦争の時には、その反対で、右方（凶）を上位として貴ぶのである。」の意。□恬淡——これは、僧德清が「恬淡者、言其心和平、不以功利爲美、而厭飽意。」と云つて居る通り、第三十章にある矜、伐、驕、強の反対のことを云つたもので、「果而已矣。不敢以取強焉」の意を含んで居るのである。□不可得志於天下矣——これは、「天下の民衆をして心服せしむること能はず。」の意。□偏將軍——副將軍のこと。□上將軍——總大將のこと。□泣之——之は「殺人衆多」を指したもので、その殺人衆多の事實に對して泣くことを云つたもの。□以喪禮處之——之は「戰勝」を指したもので、これは、喪禮を以て戰勝を始末することを云つたもの。

新譯 洋の東西を論ぜず、時の古今を問はず、何れの國に於ても、その國に軍國主義が流行して居ると、各國互に兵器の精銳を競争し、殺人能率の優秀な器具を、次から次へと發明して、大に得意がつて居るが、元來、佳兵は不祥な器であるから、殺人を何とも思つて居ないものは別として、苟も人間の心をもつて居るものならば、そんな不祥の器を珍重がる筈がない。故に、道に即せる君子人は、そんな不祥の器を必要としないのである。であるから、道に即せる君子人は、常に陽にあたる左方を以て、吉禮の上位として居るのであるが、萬やむを得ない場合に、戦争を起す時には、

戦争の凶事なることを示すために、陰にあたる右方を、上位とするのである。殺人道具の兵器は、それが、如何なる種類のものであつても、又どう考へて見ても、不祥の器であつて、君子人の使用すべきものではない。どうしても、兵器を使用しなければならぬ場合には、詮方なくこれを使用しても、謂ゆる「果而已矣」の程度を以て最上策となすべきであつて、決して戦勝を讃美し、謳歌してはならない。戦勝を讃美し、謳歌するものは、それは殺人を樂むと云ふものである。殺人を樂みにして居るものが、どうして志を天下に得て、民衆を自己に心服させることが出来よう。(であるから、吉事には陽の左を上位とするが、凶事には陰の右を上位とする。戦争は凶事に属するものであるから、戦争の時には、副將軍が吉事の上位たる左に居り、總將軍が吉事の下位たる右に居るのであるが、この副將軍が左、總將軍右と云ふのは、葬式の時の禮法によつたものである。)戦争は、國家的大仕掛けの殺人で、殺されるものも實に多い。さすれば、この衆多の戦死者に對しては、衷心よりの悲哀を以て涕泣すべきであり、戦勝に際しては、喪禮を以て、萬事を處理すべきである。それに、戦勝祝賀の宴とは何事か。

考證 □「夫佳兵者不祥之器物或器之故有道者不處」と云ふ文句を、レツグは、〔L〕“Now arms, however beautiful, are instruments of evil omen, hateful, it may be said, to all creatures. Therefore

they who have the Tao do not like to employ them.”(それ兵器は、如何に美しきも凶兆の道具なり。すべての生物に嫌はるるものと謂ふべし。故に、道を守るものは、それを使用するを好まざるなり。)と英譯し、チャイルスは、〔G〕“Weapons, however beautiful, are instruments of ill omen, hateful to all creatures. Therefore he who has Tao will have nothing to do with them.”(武器はすべての生物に嫌はるる悪兆の道具なり。故に道を守るものは、それに干與することなし。)と英譯して居る。何れも原意を傳へては居るが、この佳の字を“Beautiful”(美しき)と譯して居る所を見ると、彼等は佳兵か美兵となつて居る刊行に従つたものかも知れないが、若し佳の字の譯とすれば、適譯ではない様に思はれる。私はこの文句を、〔I〕“Sharp weapons are instruments of evil omen, and are dreaded by all creatures. Therefore he who is with Tao does not use them.”と譯した方が原意に親しくなるではないかと思ふ。□「是以君子居則貴左用兵則貴右」と云ふ文句を、レツグは、〔L〕“The superior man ordinarily considers the left hand the most honourable place, but in time of war the right hand.”(優れたる人は、平常には左を最も高貴なる位置と見做すも、戦時に於ては、右をその位置と見做すなり。)と英譯して居るが、これは原文に忠實な適譯である。□「兵不祥之器非君子器不得已而用之恬淡爲上勝而不美」と云ふ文句を、レツグは、〔L〕“Those sharp weapons

are instruments of evil omen, and not the instruments of the superior man;—he uses them only on the compulsion of necessity. Calm and repose are what he prizes; victory (by force of arms) is to him undesirable.”(それらの鋭利なる武器は悪兆の道具にして、優れたる人の道具にあらず。彼は必要に迫^せられたる時にのみ、それを使用す。恬静と安穩とは、彼の貴ぶ所にして、兵器の力によれる勝利は、彼には好^いましきものにあらず。)と英譯して居る。これは、大體に於て、原意を傳へて居るが、「兵不祥之器」の兵を、[L]“Those sharp weapons”(それらの鋭利なる武器)と譯するのは、適當でない様に思はれる。茲に兵とは、武器を一般的に總稱したものであるから、單に [I]“Weapons”(武器)と譯する方が、原文に親しくなる。□「美之者是樂殺人樂殺人者則不可得志於天下矣」と云ふ文句を、レツグは [L]“To consider this desirable would be to delight in the slaughter of men; and he who delights in the slaughter of men cannot get his will in the Kingdom.”(これを好^いましきものと見做すは、これ人を殺すことを樂^{たの}しむなり。人を殺すことを樂^{たの}しむものは、志を天下に得ること能はず。)と英譯して居る。これは必ずしも誤譯とは云^いないが、「不可得志於天下矣」の一句は、チャイルスが、[G]“He who rejoices in the slaughter of human beings is not fit to work his will in the empire.”(人類を殺すことを喜ぶものは、自己の意志を天下に行ふに適せず。)と譯して居る方が、原意に親しくはないかと思ふ。□「故吉事尚左凶事尚右是以偏將軍處左上將軍處右言以喪禮處之」と云ふ文句を、チャイルスは、[G]“On happy occasions the left is favoured; on sad occasions, the right. The second in command has his place on the left, the general in chief on the right. That is to say, they are placed in the order observed at funeral rites.”(幸福なる機會には、左を、悲哀なる機會には、右を貴ぶ。偏將軍は左に、上將軍は右に、その居を占む。即ち、彼等は葬禮に守らるる順序によつて、その居を配置せらるるなり。)と英譯して居るが、これは原文に親しき適譯である。□「殺人衆多則以悲哀泣之戰勝者則以喪禮處之」と云ふ文句を、レツグは、[L]“He who has killed multitudes of men should weep for them with the bitterest grief; and the victor in battle has his place (rightly) according to those rites.”(多數の人を殺戮せし者は、最も深刻なる悲哀を以て、彼等のために號泣すべし。戦闘に於ける勝利者は、それらの儀禮によつて、正當に彼の位置を占むべし。)と英譯して居る。茲に“those rites”(それらの儀禮)とは、この譯文の前に使用してある [I]“the rites of mourning”(喪禮)を指したものであるが、これは原文に忠實な適譯である。○「夫佳兵者」が「夫美兵者」、又は「夫佳兵」となり、「是以君子」が「君子」となり、「恬淡爲上」が「恬愴爲上」となり、「勝而不美」が「故不美也。若美必樂之」となり、「樂

第三十一章

殺人者」が「夫樂殺人者」となり、「是以、偏將軍」が「偏將軍」となり、「處」が「居」となり、「言下以喪禮處之」が「言居上勢、則以喪禮處之」となり、「殺人多」が「殺人之多」となり、「則以悲哀」が「以悲哀」となり、「則以喪禮」が「以喪禮」となつて居る異本もある。尙ほ、馬叙倫は「老子叢話」に於て、「倫案、右文舊爲第三十一章。經註錯亂。」と記し、その次に李慈銘と陶方琦の訂誤を附記して居るが、李慈銘の訂誤の本文は「夫佳兵不祥、物或惡之。故、有道者不處。君子居則貴左、用兵則貴右。勝而不美、而美之者、是樂殺人。夫樂殺人者、不可得志於天下矣。」となり、陶方琦の訂誤によれば、この第三十一章の本文は、「夫佳兵者、不祥之器。物或惡之。故、有道者不處。」(註)兵不祥之器、非君子之器。不得已而用之。君子居則貴左、用兵則貴右。(註)吉事尚左、凶事尚右。(註)偏將軍居左、上將軍居右。(註)言居上勢、則以喪禮處之。戰勝以喪禮處之。(註)殺人衆多、則以悲哀泣之。恬淡爲上、勝而不美、而美之者、是樂殺人。夫樂殺人者、則不可得志於天下矣。」となつて居る。

【評論】この第三十一章に於ても、老子は、萬やむを得ざる理由によつて起す戦争は是認して居るが、一般的に云へば、兵器は不祥の器であつて、道に即せる君子人の使用すべからざるものである。

と斷定して居る。換言すれば、彼は義軍の必然性を許容し、無名の師を否認して居るのであるが、彼の思想の奥底には、軍國主義に對する反抗心が、非常に強く根をはつて居る様に思はれる。

第三十二章 (道常無名章第三十二)

本文 道常無名、朴雖小、天下不敢臣。侯王若能守、萬物將自賓。天地相合、以降甘露、民莫之令、而自均。始制有名。名亦既有、夫亦將知止。知止、所以不殆。譬道之在天下、猶川谷之於江海也。

新讀方 道は常にして名なく、朴にして小なりと雖も、天下は敢て臣とせず。侯王もしよく守らば、萬物はまさに自から賓せんとす。天地は相合ひて、以て甘露を降し、民はこれを令することなくして、而も自から均しからん。はじめて制して名あり。名も亦すでにあるも、それ亦止まることを知らんとす。止まることを知るは、殆からざる所以なり。道の天下にあるを譬ふれば、猶ほ川谷の江海に於けるがごときなり。

新字解 道常無名 此は「道の存在は、常恒不變にして、その質量は、絶對的に無限であるから、文字言句を以て、名狀すべからず。」の意。朴雖小 此は「道朴雖小」(道は朴にして小なりと雖も)の意。朴は、第十五章に「敦兮其若樸」とあり、第十九章に「見素抱樸」とあり、第二十八章に「復歸於樸」とある樸と同じく、山林から伐り出したばかりの木材のことであつて、

道の質朴性を表示した言葉であり、小は、僧徳清が「小、猶小、謂不足視也。」と云つて居る通り、その質朴性の人目をひかざることを云つたものであるが、吳澄が「樸指道言。道彌滿六合、而斂之一握、故曰小。」と云つて居る通り、謂ゆる「芥子に須彌を納れ、毛孔巨海を呑む」と云ふ言葉に含まれて居る様な華嚴哲學の教理によつて解しても差支あるまい。不敢臣 此は、林希逸が「天下莫不尊之。」と云つて居る通り、謂ゆる「天下の式」となり、何物にも使役せられざることを云つたものである。侯王若能守 此は、「侯王が、その道の質朴性を守るならば」の意。萬物將自賓 此は、「天地萬物が、自然とその侯王に隸屬することを欲望するに至るであらう。」の意。この將は、第二十九章にある「將欲」の將と同じく、願望の意に解すべきであるから、この五言一句は「萬物は自から賓することを將はん。」と讀んでも差支ない。天地相合以降甘露民莫之令而自均 此は、王輔嗣が「抱樸無爲、不以物累其真、不以欲害其神、其物自賓、而道自成。故天地相合、則甘露不求而自降。我守其真、則民不令而自均。」と云つて居る通り、道に即せる侯王が、天下に臨んで居れば、天地陰陽の氣は、相調和して甘露を降らし、以て天下泰平の瑞兆を示し、民衆は、何等の法律なくして、自から相協調して、國家安康の實をあけることを云つたものである。均は、相協調し、相和合すること。始制有名 此は、第二十八章に「樸散

則爲_レ器」とある思想と同じく、道の現實化に就て云つたもので、純一なる樸によつて治める無爲の治が、現實化して立法的になれば、そこに色色なる法規、種種なる官制が出て來ることを云つたものである。「制を始むれば名あり。」と讀んでも差支ない。□名亦既有夫亦將知止——これは、李息齋が「始本無_レ名。制則有_レ名矣。苟其逐_ニ於名而莫_レ止、是由_レ一生_レ二、一生_レ三、將_下巧歷不能_レ算。(中略)是故、貴_ニ其止。止者、鎮以_ニ無名之樸_一也。知_レ止則不_ニ隨_レ物遷、淡然自足。」と云つて居る通り、道の樸が制せられて(現實化して)種々なる相對的名目が出來ても、その本源たる樸を離れない様にすべきことを云つたもので、將_レ知_レ止は「止まることを知るを要す。又は「止まることを知るべし。」の意に解すべきである。□譬道之在天下猶川谷之於江海也——これは、蘇子由が「江海、水之鍾也。川谷、水之分也。道、萬物之宗也。萬物、道之末也。皆水也、故川谷歸_ニ其所_レ鍾_一。皆道也、故萬物賓_ニ其所_レ宗。」と云つて居る通り、道と天下萬物との關係の不可離なることを、川谷と江海との關係の不可離なることを以て、譬喩的に説明したものである。

新譯 道は恒存不變なものであつて、相對的智識によつて與へられた名稱と云ふものはなく、また、その實質は、朴にも比すべき純真、質朴なものであつて、一向人目をひかないが、それでも、何物たりとも、それを自分の配下にして使役することは出來ない。もし君主たるものが、この道の

質朴性を以て治世の原則とするならば、天下萬物は、喜んでその君主に隸屬し、心服する様になり、また天地陰陽の氣もよく調和して、天下泰平の瑞兆たる甘露を降らし、民衆は別に法令の發布なくして、自然に平和、幸福なる生活をなし得るに至るであらう。道の根本的的最高理想は、制なき無爲の治であるが、世の中の推移につれて、制度、法令の實施も必要になつて來るかも知れない。かりそめにも制がはじまると、すぐさま種種なる名稱が生じて來て、色色と面倒なことになるのであるが、よし、名稱が生じて、道の質朴性の上に立脚して居ることを忘れてはならない。その質朴性を失はないで居ると云ふことは、自己の存在を安全にすることである。道と天地萬物との關係は、丁度、江海と川谷との關係の様なものである。あらゆる川谷は、大なる江海に實質的につながれて居る。天地萬物もその通り、大なる道につながれて、無限より無限に進んで居るではないか。

考證 □「道常無名朴雖小天下不敢臣」と云ふ文句を、チャイルスは、(G)“Tao in its unchanging

aspect has no name. Small though it be in its primordial simplicity, mankind dare not claim its service.”(道は、その不變化の状態に於て、名稱を有せず。その元始的質朴性に於て、小なりと雖も、人類はその勞役を要求することを敢てせず。)と英譯し、レッジは、(L)“The Tao, considered as unchanging, has no name. Though in its primordial simplicity it may be small, the whole

world dares not deal with (one embodying) it as a minister.” (道は不變化のものと見做され、名を有せず。その元始的質朴性に於て、小なりと雖も、天下は、それを具有せるものを、従僕として取扱はず。)と英譯して居る。これは、何れも原意に觸れては居るが、私の見解によれば、〔I〕“Tao is eternal and nameless; though it is simple as plain wood, no one dares to make it subject to him.”とでも譯しては如何かと男ふ。□「侯王若能守萬物將自資天地相合以降甘露民莫之令而自均」と云ふ文句を、チャイルスは、〔G〕“Could princes and kings hold and keep it, all creation would spontaneously pay homage. Heaven and earth would unite in sending down sweet dew, and the people would be righteous unbidden and of their own accord.” (侯王、もしそれを保持し能ふならば、萬物は自からそれに臣服するならん。天地は合同して甘露を降し、人民は命令なくして、自發的に正義を守らん。)と英譯して居るが、これは原意を十分に傳へて居る様に思はれる。□「始制有名亦既有夫亦將知止知止所以不殆」と云ふ文句を、チャイルスは、〔G〕“As soon as Tao creates order, it becomes nameable. When it once has a name, men will know how to rest in it. Knowing how to rest in it, they will run no risk of harm.” (道が制を創成するや、直にそれは名づけ得らるるものとなる。一旦、それが名を有するに至れば、人は如何にしてそれに信頼するかを知る。如何にして

てそれに信頼するかを知つて、害を蒙る危険を冒すことなからん。)と英譯し、レックもこれと同意義に英譯して居るが、これは私の見解とは、非常に相異して居る。私の見解によつて、これを英譯するならば、〔I〕“As soon as Tao is manifested in the government of the people, various names may be created as to its functions. Whatever names are employed, they must rest in the primordial simplicity of Tao. Resting in Tao, they can do nothing to the harm of the people.”とでもなすべきではあるまいか。□「譬道之在天下猶川谷之於江海也」と云ふ文句を、レックは、〔L〕“The relation of the Tao to all the world is like that of the great rivers and seas to the streams from the valleys.” (道の世界に對する關係は、大河や大海の谿谷より流れ出る流水に對する關係の如し。)と英譯し、チャイルスも、これと同意義に英譯して居る。何れも原意は傳へて居るが、川谷を、谷川 (谷から流れ出る川) の意に解して、〔L, G〕“The streams from the valleys” (谿谷より流れ出る流水) と譯して居るのは、適譯でない。オールドが、この全文句を英譯して、〔O〕“Tao is to the world what the streams and valleys are to the great rivers and seas.” (道の世界に於けるは、小川、谿流の、大河、大海に於けるが如し。)と云つて居る通り、川谷は、宜しく「小川と谿流」の意に解すべきである。○「朴」が「樸」となり、「天下不敢臣」が「天下莫能臣」となり、「侯王」が

「王侯」となり、「若能守」が「若能守之」となり、「自均」が「自均焉」となり、「知止、所以不殆」が「知止不殆」、又は「知之不殆」となり、「譬道之在天下」が「譬之在天下」となり、「川谷之於江海也」が「川谷之與江海」となつて居る異本もある。

評論 この第三十二章の冒頭にある「道常無名」は、第一章の冒頭に「道、可道非名、可名非常名」とある思想に屬する言葉であつて、道の恒存不變性と、その不可思議性に就て云つたものであるが、この章に於て、老子の力説して居る點は、道の一屬性なる質朴性の現實化である。即ち彼は、君主なるものが、天下を無事、泰平にし、民衆を平和、幸福にせんと欲するならば、朴に即せる無爲、無制の治をなすべきであるが、時代の推移につれ、萬やむを得ずして、爲す所あり、制する所ある有爲、有制の治をなすに至るにしても、常に道の質朴性を離れない様になければならぬことを説き、最後に、道を江海に喩へて、天地萬物の宗源は、確に道であると斷言したものである。

第三十三章 (知人者智章第三十三)

本・文

知人者智、自知者明。勝人者有力、自勝者強。知足者富、強行者有志。不_レ失_二其所_一者久、死而不_レ亡者壽。

新讀 人を知るものは智にして、自らを知るものは明なり。人に勝つものは力ありて、自らに勝つものは強なり。足ることを知るものは富み、行ひを強むるものは志を有つ。その所を失はざるものは久しく、死するも亡びざるものは壽なり。

新字解 □知人者智自知者明——これは、僧徳清、「知人者、謂能察賢愚、辨是非、司黜陟、明賞罰、指瑕摘疵、皆謂之智。但明於責人者、昧於責己。然雖明於知人爲智、不若自知者明也。」と云つて居る通り、「自己の環境にある人人のことに就て、色色なることを知つて居る者は、智者と謂ふべきではあるが、それよりも、自己自身の如何なるものであるかを、よく知つて居るものの方が、智者にもまさる明智者である。」の意。自知者は「自知己者」の意。□勝人者有力自勝者強——これは、僧徳清が「世之力足以勝人者、雖云有力、但強梁者、必遇其敵。不若自勝者強」と云つて居る通り、暴力を以て人に勝つ者よりも、自己に勝つて、謂ゆる克己の徳

を全くする者の方が、道的偉人であることを云つたものである。自勝者は「自勝者」の意。

□知足者富——これは、蘇子由が「知足者、所遇而足。則未嘗不富矣。雖有天下、而常挾不足之心、以處之、則是終身不能富也。」と云つて居る通り、自己の天分を自覺して、その境遇に安んじて居るものは、物質上に於て、不平不満の念を抱くことなきことを云つたものである。□強行者有志——これは、沈一貫が、「不行而望至、未有能遂者也。強行者、日復日、歲復歲、得寸則寸、得尺則尺、轉不退轉、其行遠矣。可謂有志者矣。」と云つて居る通り、「志ある者とは、口さきばかりで、何を研究したいとか、何を勉強したいとか、云つて居るものことではなく、實際の上に於て、孜孜としてその志す所のことを實踐躬行するものことである。」の意。□不失其所者久——失其所とは、沈一貫が「物各有所。數徙業則無成。不爲事更、不爲物遷。」と云つて居る通り、自己の如何なるものであるかを自覺せずして、無暗に成功を望み、色色と轉業することを云つたもので、この六言一句は、「自己の天分を自覺し、現に置かれてある地位にあつて、孜孜として精勵するものは、その生活の上に安定を確得することが出来る。」の意である。□死而不亡者壽——これは、第十六章に「道乃久、沒身不殆。」とある思想と同じく、道に即せるものは、よし肉體は死と共に亡びても、その個性は道と共に永存することを云つたものである。この六言一句に

就て、陸農師は「列子之不化、莊子之不死、釋氏之不滅、與死而不亡同意。是以、聖人之生也、大死人再活。聖人之死也、大生人不亡。是謂聖神仙佛。道同而用殊。殊途而一致、總言死生之不能變異也。」と云ひ、羅什は、「在生而不生日久。在死不死日壽。」と云つて居るが、要するに、この六言一句は、個性の永存を意味する言葉である。

新譯 世に謂ゆる博覽強記の學者と云ふものは、自己の環境に存在する事象を、よく知つて居る人であるが、智者とは、要するに、この種の人のことである。併し、その智者は、燈臺下暗しで、さテ、あなた御自身のことは？と問はれると、自分のことは一向知らない。こんな智者よりも、自身自身の何物であるかを知り、自分自身の眞價値を的確に知つて居るものを、道の上では、智者にもました明智者と云ふのである。また、世の中の人人は、個人的にも國家的にも、何でもかでも、他のものに勝つことばかりを考へて居る。他のものに勝つものは、力のあるものとは云へようが、自己に打勝つて、克己の徳を全ふすものの方が、道の上から見れば、遙に優れた強者である。また世の中の人人は、糞と云はれようが、なんと云はれようが、從晝至夜、富の蓄積に奔走して居て、何ほど財産を積みあけても、少しも満足すると云ふことを知らずに居る。そんなものは、佛様の云つた有財餓鬼同然のもの。それよりも、安分知足の徳に即して居るものの方が、道の上では、眞の

富者である。また、世の中では、あれもしたい、これもしたいと口癖の様に云つて居る者を、志あるものと云つて居るが、志あるものとは、そんな人のことではない。眞に志ある人とは、その志して居ることを、實際に實行して居る者のことである。また、世の中には、自分の天分を悟りずして、あれに手を出し、これに手をつけて、轉職、轉宅を仕事にして居るものがあるが、そんなことで、どうして生活の安定が得られよう。生活の安定は、自己の住すべき處に、何時までも安住することによつて得られるのである。自からを知り、自からに勝ち、足ることを知り、行ひを強め、その所を失はざる者は、何れも道に即せるものであるが、この様な人人は、よし肉體は死しても、その個性は死せずして、道と共に永存するのである。

考證 □「知人者智自知者明」と云ふ四言二句を、レツグは、〔L〕“He who knows other men is discerning; he who knows himself is intelligent.”(他の人人を知る者は慧敏なり。自からを知る者は明智なり。)と英譯し、チャイルスは、〔G〕“He who knows others is clever, but he who knows himself is enlightened.”(他を知る者は伶俐なり。されど、自からを知る者は悟れるなり。)と英譯して居る。これは何れも原意に觸れては居るが、〔I〕“He who knows others is erudite; he who knows himself is enlightened.”と譯した方が、老子の心に親しくなるではないかと思ふ。□「勝人者有力自勝者強」と云ふ文句を、レツグは、〔L〕“He who overcomes others is strong; he who overcomes himself is mighty.”(他に勝つ者は強し。自からに勝つ者は豪勇なり。)と英譯して居る。これは必ずしも誤譯ではないが、チャイルスが、〔G〕“He who overcomes others is strong, but he who overcomes himself is mightier still.”(他に勝つ者は強し。されど自からに勝つ者は、更にそれ以上に豪勇なり。)と譯して居る方が、原意に親しい様に思はれる。□「知足者富強行者有志」と云ふ文句を、レツグは、〔L〕“He who is satisfied with his lot is rich; he who goes on acting with energy has a (firm) will.”(自己の天運に満足し居る者は富む。勢力を以て活動しつつある者は、確固たる意志を有す。)と英譯して居るが、これはチャイルスが、〔G〕“He is rich who knows when he has enough. He who acts with energy has strength of purpose. (自己が十分に所有せる時に、それを知る者は富めり。精力を以て行爲する者は、意志の力を有す。)と譯して居るのよりも、原意に近い。□「不失其所久死而不亡者壽」と云ふ文句を、レツグは、〔L〕“He who does not fail in the requirements of his position, continues long; he who dies and yet does not perish, has ‘longevity.’”(自己の身分に須要なるものを缺くことなき者は久しく續き、死して尙ほ亡びざる者は、長壽を保つ。)と英譯し、チャイルスは、〔G〕“He who moves not from his proper place is long-

第三十三章

lasting. He who dies, but perishes not enjoys true longevity.”) 自己の正當なる地位より動かざる者は長く存在し、死しても亡びざる者は、眞の長壽を享有す。)と英譯し、オールドは、〔O〕“He who fills his place remains secure. He who dies without being corrupted enjoys a good old age.” (自己の地位を占むる者は安全なり。腐敗することなくして死する者は、善き老齡を享有す。)と英譯して居るが、大體に於て、私の見解とは相異して居る。私の見解によれば、この「死而不亡者壽」と云ふ一句は、「自知者、自勝者、強行者、不_レ失_三其所_一者」は、その肉體は死すとも、その道的生命は亡びざるものであつて、これが眞の長壽者と謂ふべきである。』の意であるから、この見解によつて、これを英譯するならば、〔I〕“Those who stand fast in the place proper to them will have stability in their living. They do not perish, though they die, as they enjoy eternity (with) Tao.” ともなすべきであらう。○「知_レ人者智」が「知_レ人者智也」となり、「自知者明」が「自知者明也」となり、「勝_レ人者有_レ力」が「勝_レ人者有_レ力也」となり、「自勝者強」が「自勝者強也」となり、「知_レ足者富」が「知_レ足者富也」となり、「強_レ行者有_レ志」が「強_レ行者有_レ志也」となり、「不_レ失_三其所_一者久」が「不_レ失_三其所_一者久也」となり、「死而不亡者壽」が「死而不亡者壽也」となつて居る異本もある。

評論 この第三十三章は、道の現實化を、部分的に、且つ實際的に叙述したものである。即ち、

自知と自勝と知_レ足と強_レ行と不_レ失_三其所_一との五事項を以て、道に即せるものとなすと同時に、智、有_レ力、不_レ知_レ足、不_レ強_レ行、失_三其所_一の五事項が、道に反せるものなることを暗示し、最後に於て、その道に即せるものの個性の、道と共に永存することを断定したものである。

第三十四章 (大道汎兮章第三十四)

本・文 大道汎兮、其可_レ左右_一。萬物恃_レ之、以生而不_レ辭。功成不_レ名有_一。愛_レ養萬物、而不_レ爲_レ主。可_レ名_レ於小_一矣。萬物歸、而不_レ爲_レ主。可_レ名爲_レ大。是以、聖人終不_レ爲_レ大。故、能成_レ其大_一。

新讀方

大道は汎兮として、其れ左右すべし。萬物はこれに恃みて、以て生ずるも辭せず。功あるも名とし有せず。萬物を愛養して、而も主とならず。小と名くべし。萬物は歸すれども、而も主とならず。名づけて大となすべし。是を以て、聖人は終に大とならず。故によくその大を成すなり。

新字解

○大道汎兮其可左右——これは、僧徳清が「汎者、虚而無著之意。以道大無方、體虚而無繫著、故其應用無所不_レ至、故曰其可_レ左右。」と云つて居る通り、道の宇宙間に充實して居ることを云つたものである。汎兮は、汎兮と同じく、廣くゆきわたつて居ること。可_レ左右は、蘇子由が「左右上下、無_レ不_レ至也。」と云つて居る通り、お互を周繞して居ること。○萬物恃之以生而不_レ辭——これは、第二章に「萬物作而不_レ辭」とあるのと殆ど同義である。恃_レ之は、「これ(道)に依頼して」

の意。○功成不_レ名有——これは、第二章に「生而不_レ有、爲而不_レ恃、功成而不_レ居」とあるのと殆ど同義であるが、僧徳清は、これを解して「以_レ本無_レ我、但任_レ物自生。故生_レ物功成而不_レ名_レ己有。」と云つて居る。○不_レ爲_レ主——これは、支配者とならざること、第十章に「不_レ宰」とあるものと同義である。○終不_レ爲_レ大——これは、常に自から大を以て任ぜざること。即ち、自から大となる意志のなきことを云つたものである。

新譯

大道は宇宙に充滿して居るから、遠方にもあり、お互の前後左右にもある。宇宙間の事物は、この大道によつて生ずるのであるが、次から次へと、いくら萬物が生じても、大道はそれを辭しない。謂ゆる「多ますます辨ず」である。萬物が發生して、ものごとが完成せられても、大道は、それはおれの生成したものだなんか云つて、自己の所有とはしない。事物を自然のままに置く。萬物を愛護し、養育しても、自から事物の主宰者となつて、それを支配する様のこととはしない。この點から見れば、大道は人目にたたず、實に小なるものと云ふべきである。併し、天地萬物は、その實質に於て、その根蒂を大道に連結し、還元すれば、何れも、その大道に復歸すべきであるから、よし大道自身が主宰者顔をせず、自から小さくなつて居ても、實は大と名くべきであらう。大道の作用は斯の如きものであるから、大道に即して居る聖人は、大道と同じく、常に自から小を

以て任じ、大たることを企圖しない。故に、常によくその偉大性を完備して居るのである。

考證

□「大道汎兮其可左右」と云ふ四言二句を、レツグは、〔I〕All-prevailing is the Great Tao! It

may be found on the left hand and on the right.”(遍在せるものは、大道なるかな。そは左右にあり。)と英譯し。チャイルスも、オールドも、これも殆ど同意義に英譯して居るが、何れも適譯である。

□「萬物恃之以生而不辭功成不名有」と云ふ文句を、レツグは、〔I〕“All things depends on it for their production, which it gives to them, not one refusing obedience to it. When its work is accomplished, it does not claim the name of having done it.”(萬物は、その生成のために、それ「大道」に信賴す。その生成は、それ「大道」が萬物に與ふるなり。萬物は一もそれ「大道」に従ふことを拒むことなし。その仕事^{シゴト}が完成せられたる時に、それ「大道」は、それ「仕事」をなしたる名を要求せず。)と英譯して居るが、この不^レ辭[。]は第二章にある不^レ辭[。]と同じく、「萬物の自然のままに生起することを、大道が拒絶しない。」の意であるから、私の見解によれば、この文句は、〔I〕“All things come into existence, depending on it. It rejects none of them when they come into being. Upon completion of the work, it possesses no name for the merit.”とでも譯すべきではあるまいか。

□「愛養萬物而不爲主可名於小矣萬物歸而不爲主可名爲大」と云ふ文句を、レツグは、〔I〕“It clothes

all things as with a garment, and makes no assumption of being their lord:—it may be named in the smallest things. All things return (to their root and disappear), and do not know that it is it which presides over their doing so;—it may be named in the greatest things.”(それ「大道」は衣服を用ひたる如くに萬物を被服す。而して、萬物の主たるが如く氣取らず。それは最も小なる物に於て名^{なづ}けらるべし。萬物はその根に歸して消失す。而して、萬物の斯くなす所を主宰せるものは、それが、それ「大道」なることを「萬物」は知らず。それは最も大なる物にて名^{なづ}けらるべし。)と英譯して居る。惟ふに、これは、「愛^ニ養^フ萬物^ニ而不^レ爲^ル主[。]」が「衣^ニ被^フ萬物^ニ而不^レ爲^ル主[。]」となり、「萬物歸而不^レ爲^ル主[。]」が「萬物歸而不^レ知^ル主[。]」となつて居る刊本に従つたものと思はれるが、それにしても、このレツグの英譯には、何かの誤解が含まれて居るではないかと思はれる。私の見解によれば、これは〔I〕“It loves and nourishes all things, but does not control them as their master; it may, therefore, be called small. Though it does not control them as their master, they all return to it, their origin; it may, therefore, be called great.”とでも譯すべきであらう。□「是以聖人終不爲大故能成其大」と云ふ文句を、レツグは、〔I〕“Hence the sage is able (in the same way) to accomplish his great achievements. It is through his not making himself great that he can accom-

plish them.”(是を以て、聖人は同様に偉大なる功績を完成し得るなり。その功績を完成し得る所以は、彼が彼自身を偉大にせざるがためなり。)と英譯して居る。これは、この文句が、「是以、聖人能成其大也。以其終不自大。故能成其大」となつて居る刊本に従つたものと思はれるが、私の見解によつて、英譯するならば、(I) “Hence the sage always refrains from making himself great. Therefore he can complete his greatness.”とでもなすべきであらう。○「汎」が「汜」となり、「大道汎兮」が「大道汎汎兮」となり、「功成不名有」が「功成而不居」となり、「愛養萬物」が「衣被萬物」となり、「而不爲主。可名於小矣」が「而不爲主。故常無欲。可名於小矣」となり、「萬物歸而不爲主」が「萬物歸而不知主」となり、「可名爲大」が「可名於大矣」となり、「是以、聖人終不爲大。故、能成其大」が「是以、聖人能成其大也。以其終不自大、故能成其大」となつて居る異本もある。

評論 この第三十四章は、まづ冒頭の四言二句(大道汎兮、其可左右)に於て、謂ゆる「佛身は法界に充滿して、普く一切群生の前に現す」と云ふ思想と同じく、道の遍在性を叙し、次に道の天地に於ける化育の自然性、即ち道の無爲的開發を説き、最後に道に即せる聖人の能く大を成し得る所以は、その道の無爲的開發と同じく、自から主とならず、自から大を以て任ぜざるがためである、ことを力説したものである。

第三十五章 (執大象章第三十五)

本、文 執_二大象_一天下往。往而不_レ害。安平泰。樂與_レ餌、過客止、道之出口、淡乎其無_レ味。視_レ之不_レ足見、聽_レ之不_レ足聞、用_レ之不_レ可_レ既。

新讀方 大象を執れば天下は往く。往くも而も害せず。安平泰なり。樂と餌とは、過客止まるも、道の口より出づるは、淡乎としてそれ味ひなし。これを視れども見るに足らず、これを聽けども聞くに足らざるも、これを用ふれば既すべからず。

新字解 □執大象天下往——これは、僧德清が「聖人執_二無我_一、以御_二天下_一。故天下莫_レ不_レ往。」と云つて居る通り、聖人が道に即して、天下に臨めば、天下萬民は何れもその聖人に歸服することを云つたものである。大象は、蘇子由が「道非_二有無_一。故謂_二之大象_一。」と云つて居る通り、謂ゆる無象の象なる大道そのものを指した言葉。□往而不害——これは、吳澄が「民既歸往、而聖人以_二不利_一利_レ之。蓋利_レ之以_レ利、則有利亦有_レ害。利_レ之以_二不利_一、則常利而不_レ害。」と云つて居る通り、天下民衆が、聖人に歸服しても、聖人は人爲的施設を以てそれに臨むことなく、無爲に即して自然のままに置くことを云つたものである。害は、自然性を害すること。□安平泰——これは無爲の治の結果に就て

云つた言葉であるが、絶對的に平和幸福なることを表現するため、同意語を三箇重用したものである。□樂與餌過客止——これは、蘇子由が「作_レ樂設_レ餌、以待_二來者_一、豈不_レ足_二以止_二過客_一哉。然而、有するの意であるが、美的聽官を満足させる音樂と、生存慾の満足に必要な食餌とを以て、人間の奢侈的嗜好物を總括し、その奢侈的嗜好物によつて生ずる所の享樂の永久的ならざることを云つたものである。□道之出口——これは、「口から出た道」、即ち道に即せる聖人の口より出る道的言語の意。□淡乎其無味——人の奢侈慾を咬る様な滋味はなく、實に淡泊無味であるの意。□用之不可既——之は、「道之出口」、即ち聖人の道的言語を指したもので、蘇子由が「雖_レ無_二臭味形色聲音_一以悅_レ人、而其用不_レ可_レ盡矣。」と云つて居る通り、道の現實的應用の途の無限なることを云つたもの。既は、盡の義で、つくしてなくすること。

新譯 無象の象なる道に即して、天下に臨めば、天下萬民は招かずして、その大人物に歸服してしまふ。世の中には、國務大臣になりたいばかりに、嘘の政策の廣告で國民を釣り、後で惡政を以て國民を苦しめる政治家と云ふものがあるが、大象を執れる大人物は、そんな詐欺は行はない。天下萬民が歸服しても、常に無爲を以て、彼等を通し彼等の自然性を阻害する様のことはないから、

天下萬民の平和、幸福は、何時も自然のままであつて、天下は常に平安であり、泰平である。耳を悦ばせる音楽や、味感を悦ばせる食餌は、その音聲とその美香とで、路を通つて居る通行人を暫く佇立させる誘引力を有して居る。それに比較すると、聖人の口から出る道は、實に淡泊無趣味なもので、少しも人を牽きつける力を有して居ない。視ようとしても見るに足るものなく、殆ど無形のもの、聴うとしても聞くに足るものなく、殆ど無聲のものである。この無味、無形、無聲の道が、實に摩訶不可思議なもので、この道の現実生活上に於ける適用範囲は、實に廣いが、その如何に廣い範囲に適用しても、道の供給に不足を生ずることは絶対にないのである。

考

「執大象天下往往而不害安平泰」と云ふ文句を、

「I】“To him who holds in his

hands the Great Image (of the invisible Tao), the whole world repairs. Men resort to him, and receive no hurt, but (find) rest, peace, and the feeling of ease.” (見るべからざる道の大象を執れる者には、天下往還す。人は彼に趣くも、害を蒙らず。却て休息と平和と安樂とを得るなり。)と英譯し、チャイルスも、これと殆ど同意義に英譯して居るが、これは原意に親しい譯の様に思はれる。併し、この文句は、レッグが自譯の脚註に附言して居る如く、「天下往」の行爲者を「執大象者」と解することもあるし、またその様に解した方が「道之出口」と云ふ語に照應して、却て

面白い様にも思はれる。この見解によれば、この文句は「大象を執る者が、天下に道の傳道をなし、天下に往來しても、彼は天下萬民を害することなく、却て天下萬民を安平泰にするのである。」の意であるから、「I】“When the holder of the Great Image (of Tao) goes to all places under heaven teaching Tao, he does not harm the people, but gives them rest, peace and happiness.”」とも譯すべきものであらう。□「樂與餌過客止道之出口淡乎其無味」と云ふ文句を、レッグは、「I】“Music and dainties will make the passing guests stop (for a time). But though the Tao as it comes from the mouth, seems insipid and has no flavour” (音楽と珍味とは、暫くは過客を止まらさず。併し、道の口より出る時に、假令それは無味にして風情なしと雖も……)と云ふ風に、「視之不足見」以下の五言三句に續けて居るが、私の見解によれば、「樂與餌過客止」と「道之出口、淡乎其無味」とは、有味と無味とを對比したものであるから、この二句は、次句と切離して、「I】“Music and dainties are so attractive as to make the passing guests stop, while the voice of Tao is thin without harmony.”」とも譯する方が原意に親しくなる様に思はれる。□「視之不足見聽之不足聞用之不可既」と云ふ五言三句を、チャイルスは、「G】“Not visible to the sight, not audible to the ear, in its use it is inexhaustible.” (眼には見えず、耳には聞えず、その効用に於ては無盡

藏なり。と英譯して居る。これは必ずしも原意を失つて居るとは云へないが、「視之不足見、聽之不足聞」の五言二句と「用之不可既」の五言一句とは、相對比し、その中間に「雖然」と云ふ様な言葉が略されて居るのであるから、私の見解によれば、これは、(I) "When it is looked at, the eye is not satisfied; when listened to, the ear is not satisfied; it is, however, inexhaustible in its operation." とでも譯した方が、原意に、もつと親しくなるではないかと思ふ。○「執大象」が「執大象者」となり、「道之出」が「道之出言」となり、「淡乎」が「淡兮」となり、「不足見」が「不可見」となり、「不足聞」が「不可聞」となつて居る異本もある。

評論 この第三十五章は、道の現實的適用の効果は、謂ゆる文化的施設の効果の一次的なるが如きものにあらずして、實に永遠的なるものなること、且つ、その道の適用範圍に對する供給力の無盡藏なることを叙したものであるが、茲に「執大象」とあるのは、第十四章に「執古之道以御今之有」とあるのと同じ思想に屬する言葉であると見るべきであらう。

第三十六章 (將欲喻之章第三十六)

本文 將欲歛之、必固張之。將欲弱之、必固強之。將欲廢之、必固興之。將欲奪之、必固與之。是謂微明。柔之勝剛、弱之勝強。魚不可脫於淵。國之利器、不可以示人。

新讀方 これを歛めんと將欲すれば、必ず固くこれを張れよ。これを弱くせんと將欲すれば、必ず固くこれを強くせよ。これを廢せんと將欲すれば、必ず固くこれを興せよ。これを奪はんと將欲すれば、必ず固くこれを與へよ。これを微明と謂ふなり。柔は剛に勝ち、弱は強に勝つ。魚は淵より脱すべからず。國の利器は以て人に示すべからず。

新字解 □將欲——これは、第二十九章にある將欲と同じく、願望、熱望、欲求などの意。□歛——これは、鼻をしかめ 息を吸ひ込むこと。□固——これは馬叙倫が「老子要詁」に考證して居る通り、姑の字のあて字で、「まづ」とか「まア」とかの意。この姑は、「しばらく」と讀んでも、暫の字の如くに、少時間の意は含んで居ない。□張——これは歛の反對で、鼻を張りあけて、息を放散すること。□微明——微妙なる明智とか、深遠なる智慧とかの意。□魚不可脱於淵——これは、蘇子由

が「魚之爲物、非有爪牙之利、足以勝物也。方其託于深淵、雖強有力者、莫能執之。」と云つて居る通り、「魚の如き弱きものでも、隠れて深淵に居れば、如何なる強者も、これを自由にすることが出来ない。であるから、魚は、自己の生命保持のために、淵を脱出してはいけない。」の意。□國之利器不可以示人——これは、沈一貫が「弓當在後。刀當在鞘。一切利兵、當藏府庫之内。不可露陳於外。即此至柔化剛之語。」と云つて居る通り、「よし、國防上の兵器があつても、これを他に誇示する様のことをするな。」の意で、暗に兵器の使用を否定した言葉である。

新譯 深呼吸をする時に、息を深く吸ひ込もうとするならば、最初に、まづ息を吹き出しておかなければならない。先方の者を弱くしてやらうと欲するならば、まづ先方のなすがままに放任して置いて、強くなるだけ強くならせてやると、おしまひには、必ず弱くなつてしまふにきまつて居る。先方を廢亡させてしまはうと欲するならば、まづ先方の欲するがまま興起させて置くと、おしまひには自然に廢亡してしまふ、先方のものを奪つてしまひたいならば、まづ先方の欲するがままに取らせて置くに限る。すべて世の中の事はこの通り。強が何時までも強のままで居るものでもなければ、剛が何時までも剛のままで居るものではない。強とか剛とか云ふものは、要するに、不自然の現象であるから、ある時期を経過すると、もとの柔弱に復歸するのである。この道理をよく悟

得して居て、それを現實生活の上に活用するものを、微妙深遠なる明智の所有者と稱するのである。自然なる柔は、結局は不自然なる剛に勝ち、自然なる弱は、結局は不自然なる強に勝つ。これは天下の常理である。魚の様なものでも、深淵に潜んで、柔弱の態度を執つて居る時には、その生命の安全は期待されるが、自から強がつて、流水を泳ぎ廻つて居ると、その生命は危険に瀕する。國家の兵器でもその通り。無暗にその精銳を誇つて、それを濫用すると、國家は、結局は滅亡するにきまつて居るのである。

考證 □「將欲歎之必固張之」と云ふ四言二句を、レツグは、[I] “When one is about to take an inspiration, he is sure to make a (previous) expiration.” (人の將に息の吸入をなさんとする時には、必ずまづ息の呼出をなすべし。)と英譯して居るが、これは、この文句を「將にこれを歎めんとすれば、必ず固くこれを張る。」の意に解しての譯と思はれるが、將は「まさに」ではなく、欲と共に一箇の複合動詞となつて、願望の義を有し、固も「かたく」ではなく、姑(まづ、まア)の意であるから、私の見解によれば、この四言二句は、[I] “He who desires to draw a deep inspiration, must make first a deep expiration.” とでも譯すべきであらう。□「將欲弱之必固強之將欲廢之必固興之將欲奪之必固與之是謂微明」と云ふ四言七句を、レツグは、[I] “When one is going to weaken

another, he will first strengthen him; when he is going to overthrow another, he will first have raised him up; when he is going to despoil another, he will first have made gifts to him: this is called 'Hiding the light (of his procedure).'" (人の將に他の者を弱くせんとする時には、まづ他の者を強くするならん。將に他の者を倒せんとする時には、まづ他の者を起たすならん。將に他の者より奪はんとする時には、まづ他の者に贈物を與へ置くならん。これを彼の行爲の光の隠れたるものと謂ふ。)と英譯して居る。彼が、將の字を、何處までも「まづ……せんとする時」の意に解して居るのは、よし誤謬とは云へないにしても、私の見解とは相異して居るし、他の部分の解釋も、大體に於て、私の見解とは一致して居ない。今これを私の所見によつて譯するならば、〔I〕“He who desires to weaken others, must leave them to become as strong as they can; he who desires to overthrow others, must leave them to become as prosperous as they can; he who desires to despoil others, must leave them to receive as many gifts as they can. He who does these things, is called the possessor of a profound intelligence (of Tao).”とでも譯すべきではあるまいかと思ふ。□「柔之勝剛弱之勝強魚不可脱於淵國之利器不可以示人」と云ふ文句を、レツグは、〔I〕“The soft overcomes the hard; and the weak the strong. Fishes should not be taken from the deep; instruments for the profit of a state should not be shown to the people.” (柔は剛に、弱は強に勝つ。魚は淵より取り出すべからず。國家に利益となる器具は人民に示すべからず。)と英譯して居る。これは大體に於て誤譯とは云へないが、私の見解とは多少相異して居る。今これを私の見解によつて譯するならば、〔I〕“The soft overcomes the hard; and the weak subjugates the strong, Fish must not, for their own safety, leave the deep water; the sharp instruments of the state should not be made manifest before the people.”とでもなすべきであらう。オールドは、「柔之勝剛、弱之勝強」と云ふ四言二句を、〔O〕“The soft and the weak overcome the hard and the strong.” (柔と弱とは剛と強とに勝つ。)と譯して居るが、これは「柔弱勝剛強」となつて居る刊本に従つたものであらう。また彼は「魚不可脱於淵、國之利器不可示人」と云ふ文句を、〔O〕“As a fish out of water is in danger, so a nation is in peril when its armaments are revealed to the people.” (水中より出でたる魚の危險に瀕せる如く、兵器の國民の前に現はされたる時には、その國家は、等しく危險に瀕せるなり。)と英譯して居る。これは原意に親しき意譯である。○「歛」が「噏」、又は「翕」又は「儻」となり、「柔之勝剛、弱之勝強」が「柔勝剛、弱勝強」、又は「柔弱勝剛強」となり、「脱於淵」が「脱於淵」となり、「國之利器」が「邦之利器」となつて居る異本もある。

評論 この第三十六章は、僧德清が「此言物勢之自然、而人不能察。教人當下以柔弱自處也。」と云つて居る通り、剛と強とは、道の上から見れば、これは不自然の現象であつて、永存性に乏しきものなるに反し、柔と弱とは、道に即せる自然的現象であるから、道の上を歩まんとするものは、常に柔と弱との態度を以て、日常の生活を終始すべきものであることを説示したものである。國之利器を古來色々に解説し、或は「賞罰黜陟之大權」と解し、或は「柔弱之徳」と解して居るが、兵器の國家的使用が、人生に於ける強剛の實行の最大なるものである点より見れば、茲に「國之利器」とは、兵馬の大權の行使に必要な軍器を指したものであることは明白である。

第三十七章 (道常無爲章第三十七)

本文 道常無爲、而無不爲。侯王若能守、萬物將自化。化而欲作、吾將鎮之。以無名之朴。無名之朴、亦將不欲。不欲以靜、天下將自正。

新讀方 道は常に爲すことなきも、而も爲さざることなし。侯王もしよく守らば、萬物はまさに自から化せんとす。化して作らんとすれば、吾はこれを鎮するに無名の朴を以てせんとす。無名の朴も、亦まさに欲せざらんとす。欲せずして以て靜なれば、天下はまさに自から正しからんとす。

新字解 □道常無爲而無不爲——これは第三十二章に「道常無名、朴雖小、天下不敢臣」とあるのと殆ど同意義で、「道の存在は恒存、その作用は無爲であるが、無爲とは何もしないことではなく、如何なることでもなす。」の意。□萬物將自化——これは、第三十二章に「萬物將自賓」とあるのと殆ど同意義で、「天下萬物が、自然に無爲の治に化育せられる様になる。」の意。□化而欲作吾將鎮之以無名之朴——これは、第三十二章に「始制有名。名亦既有、夫亦將知止。」とあるのと殆ど同意義で、「萬物が無爲の治に化育せられて居ても、時代の推移につれて、第二義的施設が作興すれば、それをし、第一義的ならしむるために、無名の朴(道の第一義的實質)を適用する。」の意。鎮は、調整、調節

の意。□無名之朴亦將不欲——これは、僧德清が「無名之樸、雖能窒欲、若執此而不化、又將レ爲動源一矣。譬夫以レ藥治レ病、病去而藥不レ忘、則執レ藥成レ病。故云、無名之樸、亦將レ不欲。」と云つて居る通り、第二義的に走れる現實相を調節するに、無名の朴（道の第一義的實質）を以てする必要があるにしても、特に無名の朴と云ふ様な第二義的言葉を使用して、その調節をなすことは道の上に於ては、不自然のことであつて、好ましからぬことであることを云つたものである。□不欲以靜天下將自正——これは、「無名の朴と云ふ様な第二義的名稱に執著して、その調節をなすことを欲せず、ただ自然に、何等の統治も、何等の調節もなくして、天下が靜謐になれば、天下ははじめで、その本然正當の無爲の化の中に居るのであらう。」の意。

新譯 冲虚なる道の本體は、その存在に於ては恒存不變であり、その作用に於ては無爲であるが、無爲とは何もしないと云ふことではなく、爲すと云ふ意志なくして唯自然のままに行動し、生滅し、起伏し、推移することを意味するのであるから、道に謂ゆる無爲は、絶對的有爲、即ち宇宙人生の全活動を意味するのである。侯王なる者が、この道に即して政治を施行すれば、天地萬物は、自然にその無爲の治に徳化せられるであらう。が、謂ゆる人文には進化があり、時代には推移があるから、世が終末に近づくに随つて、種種なる社會的施設が計畫され、實行されるに相違ない。そ

れにしても、その施設より生ずる弊害は、無名の朴によつて除去し、調節しなければならぬ。併し、無名の朴を以てそれを除去し、調節すると云ふのも、實は第二義的である。第一義的に云へば、無名の朴の適用と云ふ様なことも、實は好ましからぬこと。そんな好ましからぬことをせず、君主も自然のまま、人民も自然のまま、唯それで天下が泰平になり、靜穩になれば、これが眞に無爲の正しき状態であると云ふべきであらう。

考證 □「道常無爲而無不爲」と云ふ四言一句を、レツグは、[L]“The Tao in its regular course does nothing (for the sake of doing it), and so there is nothing which it does not do.”(道は、その正しき行程に於て、それをなす目的のために、何事もなさず。而して、その故に、道のなさざる何物もなし。)と英譯して居るが、これよりも、[G]“Tao is eternally inactive, and yet it leaves nothing undone.”(道は永久的に無爲なり。されど何物もなさずには置かず。)と云ふチャイルスの英譯の方が、原意に親しい様に思はれる。而して、私はこれを、[I]“Tao is eternal and has no volition for doing things, and yet it does everything.”と譯しては如何かと思ふ。□「侯王若能守萬物將自化」と云ふ五言二句を、レツグは、[L]“If princes and kings were able to maintain it, all things would of themselves be transformed by them.”(もし侯王にして、それを保持し能ふならば、

萬物は自から彼等（侯王）によつて變化せらるるならん。）と英譯して居るが、原文によれば、侯王が道に即して居れば、民衆を自然のままに放置して、別に彼等を徳化すると云ふ施設はしないが、それでも民衆は、その侯王と同じく、道的になることを云つたものであるから、この五章二句は、

〔I〕“If princes and kings could hold fast to it (Tao), all things would naturally be regenerated under the influence of Tao,” とでも譯した方が、原意に親しくなるではないかと思ふ。□「化而欲作吾將鎮之以無名之朴無名之朴亦將不欲不欲自靜天下將自正」と云ふ文句を、レツグは、〔I〕“If this transformation becomes to me an object of desire, I would express the desire by the nameless simplicity. Simplicity without a name is free from all external aim. With no desire, at rest and still, all things go right as their own will.” (もし、この變化が、我に對して、欲の對象となるならば、我はその欲を無名の朴によつて表現せん。無名の朴はすべての外的企圖を離る。欲なく、平安にして靜なれば、萬物は自からその意思のままに正しく進む。)と英譯して居る。これは如何なる刊本によつたものか不明であるが、惟ふに、この譯文の中には、誤讀と誤解とが、少からず含まれて居る様に思はれる。今これを私の見解通りに英譯するならば、〔I〕“While being regenerated within the influence of Tao, if any desire for action arise among them (all things), the nameless simplicity,

the primordial principle of Tao, must be applied to rectify them; and yet this application of the nameless simplicity is considered undesirable. When all things are at rest, not requiring such rectification, the world is then in its natural and proper conditions.” とでもなすべきであらう。

○「侯王」が「王侯」となり、「朴」が「樸」となり、「亦將」が「夫亦將」となり、「不欲」が「無欲」となり、「不欲以靜」が「不欲以靖」となり、「天下將自正」が「天下將自定」となつて居る異本もある。

評論 この第三十七章は、大體に於て、第三十二章と、その思想の基調を同じくして居るが、第三十二章に於ては、「始制有名。名亦既有、夫亦將知止。知止、所以不殆。」と云つて居るのみであるのに反し、この第三十七章に於ては、尙ほ一步を進め、「化而欲作、吾將鎮之以無名之朴。無名之朴、亦將不欲。不欲以靜、天下將自正。」と云つて、「止まるを知る」と「無名の朴を以てこれを鎮する」とも、道の絶對境から云へば、第二義的のことであると道破して居るのである。

下 篇

第三十八章 (上德不德章第三十八)

本文 上德不_レ德。是以有_レ德。下德不_レ失_レ德。是以無_レ德。上德無_レ爲、而無_レ不_レ爲。下德爲_レ之、而無_レ以爲。上仁爲_レ之、而無_レ以爲。上義爲_レ之、而有_レ以爲。上禮爲_レ之、而莫_レ之應、則攘_レ臂而仍_レ之。故、失_レ道而後德。失_レ德而後仁。失_レ仁而後義。失_レ義而後禮。夫禮者、忠信之薄、而亂之首也。前識者、道之華、而愚之始也。是以、大丈夫處_レ其厚、不_レ處_レ其薄。處_レ其實、不_レ處_レ其華。故、去_レ彼取_レ此。

新讀方 上徳は徳とせず。是を以て徳あり。下徳は徳を失はざらんとす。是を以て徳なし。上徳は爲すことなくして、而も爲さざることなし。下徳はこれを爲して、而も以て爲すことなし。上仁はこれを爲して、而も以て爲すことなし。上義はこれをなして、而も以て爲すことあり。上禮はこれを爲して、而もこれに應ずることなければ、則ち臂を擡げてこれを仍く。故に、道を失つて而して後

に徳あり。徳を失つて而して後に仁あり。仁を失つて而して後に義あり。義を失つて而して後に禮あり。夫れ禮は、忠信の薄にして、而して亂の首なり。前識者は、道の華にして、而して愚の始なり。是を以て、大丈夫はその厚きに處つて、その薄きに處らず。その實に處つて、その華に處らず。故に、彼を去つて此を取るなり。

新字解

上徳不徳是以有徳 此は、僧徳清が「上徳者、謂上古聖人。與道冥一、與物同體。

雖使_レ物各遂_レ生、而不_レ自有_レ其徳。以_レ無_レ心於徳、故徳被_レ群生、終古不_レ忘。」と云つて居る通り、「道に即せる上古の聖人は、徳あれども、それを自己のものとして誇示しなかつたから、その徳は永久に彼に保有されて居る。」の意。上の字は、徳の性質を示す優秀の義に解しても差支ない様であるが、第十七章にある太上と同じく、時代の太古なることを意味するものと解する方が原意に親しい。不_レ失徳 此は「不_レ徳」の反對で、既に有せる徳を失はない様に、且つそれを人に認められる様に人爲的に努力すること。無_レ爲而無_レ不_レ爲 此は、第三十七章に「道常無_レ爲、而無_レ不_レ爲」とあるのと同義。下徳爲_レ之而無_レ以爲 此は、ある異本にある如く、「爲_レ之而有_レ不_レ爲」の意で、「下徳の者は、道に即せずして、有所得心を以て徳を積まうとするから、その積徳の實行範圍に制限が生じ 完全なる徳を積むことが出来ないことになる。」の意。之は、徳を指したものである。

□上仁爲之而無以爲——これは、『韓非子』(第六「解老」)に「仁者、謂其中心欣然愛人也。其喜人之有_レ福、而惡_レ人之有_レ禍也。生_レ心之所不能_レ已也。非_レ求_レ其報也。故曰、上仁爲_レ之、而無_レ以爲_レ也。」とある通り、上古の仁者の仁惠的行爲は、心中の慈愛の情の自然的發露であつて、その行爲に利己的動機は、少しも介在して居ないことを云つたものである。□上義爲之而有以爲——これは、『韓非子』(第六「解老」)に「義者、君臣上下之禮、父子貴賤之差也。知交朋友之禮也。親疎内外之分也。臣事_レ君宜。下懷_レ上、子事_レ父宜。賤敬_レ貴宜。知交朋友之相助也宜。親者内、而疎者外宜。義者謂_レ其宜也。宜而爲_レ之。故曰、上義爲_レ之、而有_レ以爲_レ也。」と云つて居る通り、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の間に行はれる敬愛の表現は、その關係の平和的ならんことを欲してなすものであつて、道の自然より出るものでないことを云つたもの、之は、義を指したものである。□上禮爲之而莫之應則攘臂而仍之——これは、蘇子由が「自_レ德以降而至_レ于禮、聖人所_レ以齊_レ民者極矣。故爲_レ之而不_レ應、則至_レ于攘_レ臂而強_レ之。強_レ之而不_レ應、于是_レ刑罰興、而兵甲起。」と云つて居る通り、「甲が乙に對して敬意を表する禮儀を行つても、乙がそれに對して答禮をなさざる時には、甲は腕力を以て乙をひッぱり、乙の無禮を咎めて、答禮を強要するに至る。」の意。攘_レ臂は、俗に謂ゆる腕まくりをすること、仍_レは、仍_レと同義で、先方の者をひッつかまへること。□忠信之薄——人間の自然に固有せる赤心(忠信)の稀薄になつたもの、即ち「忠信の洗ひ汁」の意。忠信とは、赤心、又は質朴なる人間愛のこと。□前識者——これは、吳澄が「前識、猶_レ先知_レ智也。」と云ひ、『韓非子』(第六「解老」)に「先_レ物行、先_レ理動、之謂_レ前識。」とあり、僧德清が「前識、猶_レ言_レ蚤智。謂_レ明見_レ利害於未然_レ者。」と云つて居る通り、先見者、卓見家、先覺者、物識などの意。□道之華——これは、道の幻化的開發の意で、道の上から見れば、實質なき夢幻空華にも比すべきものであることを云つたもの。□愚之始——これは、僧德清が「此所謂才智。君子用_レ之則成_レ名、小人用_レ之則殺_レ身。豈非_レ愚之始耶。」と云つて居る通り、智識を過重する弊害に就て云つたものである。□大丈夫——これは、『孟子』(滕文公章句下)に「富貴不能_レ淫、貧賤不能_レ移、威武不能_レ屈、此之謂_レ大丈夫。」とある通り、志操を保持することの確固たる人物のことであるが、茲では、偉人とか聖人とかの意に解して差支ない。□厚・薄・實・華・彼・此——厚は忠信を指し、薄は禮を指し、實は道を指し、華は智を指し、彼は道の第二義的開發とも稱すべき仁義禮智を指し、此は原始的道と徳とを指したものであるが、不圖すると、この彼は、孔子の主張する教理を總稱したものかも知れない。

新譯 兎角世の中は、澆季になるに隨つて、人間の價値が低落して行く。上古の道に即せる徳者は、自然のままに自然の言行をして居て、別に徳を積んで他の人よりも偉いものになると云ふ様な

意志は毛頭なかつたから、却て徳は自然に備はつて居た。末世の道德家は、ありもしない徳を、ある様に見せかけてそれを失はない様に、色色と人前を繕つて、道德家を氣取つて居るが、實はその道德家は、自稱道德家であつて、眞の道德家ではないのである。上古の道に即せる徳者は、常に道を離れず、徳の實行の上に於て、常に無爲であるから、なさざる所なしで、如何なる徳行でもしたものであるが、末世の道德家は、常に有所得心、即ち如何なる徳行をなすにも、常に利己的目的を以てするから、完全なる徳を積むことは出来ない。元來、仁と云ふものは、その發生は徳より後に屬するものであるが、それでも、上古の仁者と云ふものは、自己の心中に宿れる仁慈の情の自然の發露からして、環境を恵み憐んだものであつた。(末世の慈善家の様に、自己の姓名を廣告して貰ふためや、自己の名譽を表彰して貰ふために、慈善をする者は、上古には一人もなかつた。)また、義と云ふものは、その發生は、やはり徳よりも後れて居るのであるが、それでも、上古の義を守る者は、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の社會的關係を圓滑にするために、各自その本分を守つて居たものである。(末世の様に、國民が帝王を弑害したり、子が親を殺したり、親が子を訴へたり、妻が夫を置去りにしたりする様のこととはなかつた。)また、禮と云ふものは、人間がよほど墮落してから發生したものであるから、道の上から見れば、實になつて居ないものであるが、まづ上古に禮法の

行はれた様子を見ると、甲が乙に對する禮法はどう、乙が甲に對する禮法はこうと規定してある。而して、もし甲が乙に對して、規定通りに禮を行つて居るのに、乙が甲に對して、規定の答禮をしない場合には、甲は、早速腕まくりをして、乙に答禮を強要すると云ふ次第。(上古に於てでさえ、禮と云ふものは、斯く好ましからぬものであつたが、世が末になるにつれて、その弊害はますますはけしくなつて、禮は社會的罪惡、不祥事の一大原因となつて居る。)人間の自然性の墮落せる推移は、まづ斯くの如きものであるが、今これを次第して申すと、人間が冲虚なる道を離るるに至つて、その社會的調和を維持するために徳と云ふものが行はれ、その徳も効力を失ふに至つて、仁と云ふものが起り、その仁も効力を失ふに至つて、義と云ふものが行はれ、その義もまた効果なきものになつて、禮と云ふものが行はれるに至つたのである。今の世の中の有様を凝視すると、世の中の事象は、一から十まで禮づくめで、すべての社會現象が、禮に束縛されて居るのみならず、小鳥や狗猫に至るまで、人間真似の禮を仕込まれて居ると云ふ有様になつて居る。が、打あけて云へば、禮の存在は、道に即せる自然的人間性の忠信の廢頽、稀薄を意するものであつて、これを個人的に考へても、家庭的に考へても、社會的に見ても、國際的に見ても、禮の存在は、あらゆる種類の爭亂の起源である。世の中の人人は、仁や義や禮を珍重がつて居るばかりでなく、智も珍重がつて、謂

ゆる前識者なるものを大切に居るが、この智と云ふものも、大したものではない。善く云へば道の華とでも申すべきであらうが、實は馬鹿の親は、この智である。智あるが故に、智を得んがために、智を誇示せんがために、種種なる馬鹿の骨頂が、世の中に演ぜられて居るのである。であるから、苟も大丈夫たるものは、常に忠信の上に立脚して居て、禮と云ふ様な薄ッぺらなものを用ひず、常に道に即して居て、智と云ふ様な空華同然のものは珍重がらない。要するに、大丈夫は、常に原始的道と徳とに即して居て、仁義禮智と云ふ様な第二義的なものには立脚しないのである。

考證 「上徳不徳是以有徳下徳不失徳是以無徳」と云ふ文句を、レツグは、(I) “(Those who) possessed in highest degree the attributes (of the Tao) did not (seek) to show them, and therefore they possessed them (in fullest measure). (Those who) possessed in a lower degree those attributes (sought how) not to lose them, and therefore they did not possess them (in fullest measure).” (道の屬性を最高度に所有せし人人は、それを示すことを求めざりし故に、十分にそれを所有したり。その屬性を、より低き程度に所有せし人人は、それを如何にして失はざらんかを求めし故に、彼等は十分にそれを所有せざりしなり。)と英譯し、チャイルスは、「下徳不レ失レ徳。是以無レ徳」を脱して、直に次句に續け、(G) “Perfect Virtue acquires nothing; therefore it obtains everything.

Perfect Virtue does nothing, yet there is nothing which it does not effect.” (完全なる徳は、何物をも獲得せず。故に何物をも得るなり。完全なる徳は、何事をもなさず。併し、何事をも遂行せざるることなし。)と英譯して居る。前譯に上徳が (I) “Those who possessed in highest degree the attributes of Tao” (道の屬性を最高度に所有せし人人) と譯してあり、下徳が (I) “Those who possessed in a lower degree those attributes” (その屬性をより低き程度に所有せし人人) と譯してあるのは、私の見解とは相異して居るが、大體に於て原意を傳へて居る様に思はれる。後譯に、上徳が (G) “Perfect Virtue” (完全なる徳) と譯してあるのも、私の見解とは相異して居る。私の見解によつて、この文句を英譯するならば、(I) “The practiser of Virtue in the highest antiquity had no intention to display what he did, and therefore he was perpetually with Virtue. The practiser of Virtue in the later ages tried to make what he did ostentatious, and therefore he had to lose Virtue.” 又は (I) “The practiser of Virtue in primitive times made no display of what he did, and therefore he was perpetually with Virtue. The practiser of Virtue in the later ages tried to make what he did ostentatious, and consequently he lost Virtue.” と云ふなりと考へらる。

□「上徳無爲而無不爲下徳爲之而無以爲」と云ふ四言四句を、レツグは、(I) (Those who) possessed in

the highest degree those attributes did nothing (with a purpose), and had no need to do anything (Those who) possessed them in a lower degree were (always) doing, and had need to be so doing.” (それらの屬性を最高度に所有せし人人は、目的を以て何事もなさざりしなり。而して、何事もなす必要を有せざりしなり。それらの屬性を、より低き程度に於て所有せし人人は、常になしつゝありしなり。而して、左様になしつゝあるべき必要を有したるなり。)と英譯して居るが、これは、「上徳無_レ爲、而無_レ不_レ爲。下徳爲_レ之、而無_ニ以爲_一が、「上徳無_レ爲、而無_ニ以爲_一。下徳爲_レ之、有_ニ以爲_一となつて居る刊本に従つたものであらうと思はれる。今私の見解によつて、この四言四句を英譯するならば、[I] “The practiser of Virtue in the highest antiquity did not do anything virtuous pretentiously, and yet there was nothing which he could not do. The practiser of Virtue in the later ages did things virtuous with pretension, and there was still something which he could not do.”とゞもなすべべきであらう。□「上仁爲之而無以爲上義爲之而有以爲」と云ふ四言四句を、_レン_レグは、[I] “(Those who) possessed the highest benevolence were (always seeking) to carry it out, and had no need to be doing so. (Those who) possessed the highest righteousness were (always seeking) to carry it out, and had need to be so doing.” (最高度の仁恵を所有せし人人は、

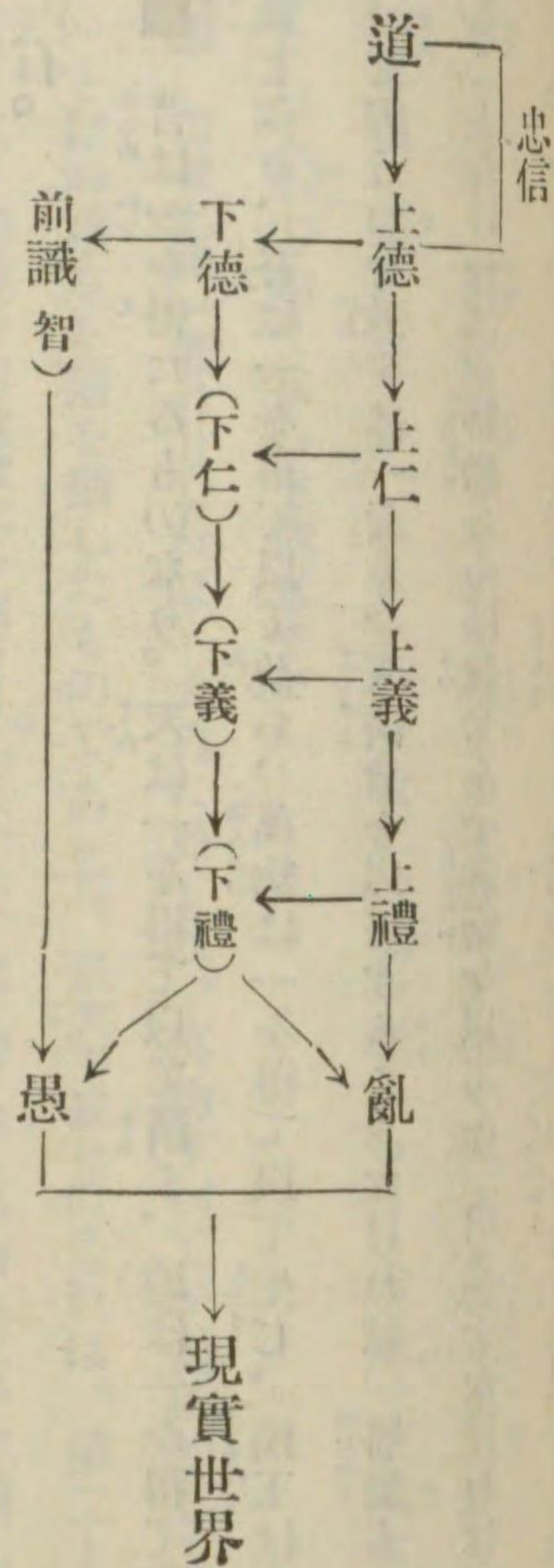
常にそれを實行せんことを求めつゝありたり。而して、左様になしつゝあるべき必要を有せざりしなり。最高度の正義を所有せし人人は、常にそれを實行せんことを求めつゝありたり。而して左様になしつゝあるべき必要を有せしなり。)と英譯して居る。これは必ずしも誤譯とは云へないが、私の見解とは、多少の相異がある。今これを私の所見によつて英譯するならば、[I] “The practiser of humanities in the highest antiquity did things humane without pretension to merit. The practiser of justice in the highest antiquity did things just for putting them in order.” 又は [I] “He who practised humanity in primitive times did humane things without pretention to merit. He who practised justice in primitive times, did so for the sake of justice.” とゞもなすべべきであらう。□「上禮爲之而莫之應則攘臂而仍之」と云ふ文句を、_レン_レグは、[I] “(Those who) possessed the highest (sense of) propriety were (always seeking) to show it, and when men did not respond to it, they bared the arm and marched up to them.” (最高の禮儀心を有せし人人は、常にそれを示さんことを求めつゝありたり。而して、他の人人がそれに答禮せざりし時には、彼等は腕を裸にして、その答禮せざりし他の人人に迫りしなり。)と英譯して居るが、「上禮」の上の字を「最高度」の意に解するならば、この譯文は原意を十分に傳へて居るものと云ふべきである。併し、私の見解

によれば、孔子教（儒教）の中心思想をなして居る仁・義・禮・智なるものは、その發生の原始時代に於てでさへ、既に第二義的のものであつて、老子自身の理想とせる道に比すべくもあらざるものであると云ふのが、この第三十八章に含まれて居る老子の思想であるから、上徳・上仁・上義・上禮の上は、歴史的意義に解するのが正しいのである。この見解によつて、これを英譯するならば、この文句は、〔I〕“The practiser of propriety in the highest antiquity performed proprieties, but when people did not behave themselves in response to what he did, he would bare the arm and compel them to do what he liked to be done for him.” 又は〔I〕“He who practised propriety in primitive times set himself an example of propriety; when the people acted with impropriety, he would bare the arm and compel them to amend their ways according to the example he set them.” とでもなすべきであらう。□「故失道而後徳失徳而後仁失仁而後義失義而後禮」と云ふ文句を、チャイルスは〔G〕“If Tao perishes, then Virtue will perish; if Virtue perishes, then Charity will perish; if Charity perishes, then Duty to one's neighbour will perish; if Duty to one's neighbour perishes then Ceremonies will perish.”（若し、道が減れば徳は減び、徳が減れば、仁は減び、仁が減れば、隣人に對する義務は減び、隣人に對する義務が減れば、禮は減ぶるなり。）と

英譯して居る。これは如何なる刊本に従つたものか不明であるが、如何に考へても、何かの誤讀から生じた誤譯としか思はれない。この文句を私の見解によつて英譯するならば、〔I〕“Thus when Tao becomes degenerate Virtue ensues; when Virtue becomes degenerate humanity ensues; when humanity becomes degenerate justice ensues; and when justice becomes degenerate propriety ensues.” とでもなすべきであらう。□「夫禮者忠信之薄而亂之首也前識者道之華而愚之始也」と云ふ文句を、レンジは、〔L〕“Now propriety is the attenuated form of leal-heartedness and good faith, and is also the commencement of disorder; swift apprehension is (only) a flower of the Tao, and is the beginning of stupidity.”（それ禮は忠信の稀薄なる形にして、また亂の首なり。敏覺は道の華にすぎずして、愚の始なり。）と英譯して居る。これは、大體に於て原意に觸れて居るが、前識は〔L〕“Swift apprehension”（敏覺）と譯するよりも、チャイルスの譯して居る様に〔G〕“Knowledge of externals”（外物に對する智識）とした方が、原意に親しい様に思はれる。□「是以大丈夫處其厚不處其薄處其實不處其華故去彼取此」と云ふ文句を、チャイルスは、〔G〕“Therefore the truly great man takes his stand upon what is solid, and not upon what is superficial; upon what is real, and not upon what is ornamental. He rejects the latter in favour of the former.”

(故に、眞に偉大なる人は、充實したるものの上に立脚して、淺薄なるものの上には立脚せず。眞實なるものの上に立脚して、裝飾にすぎざるものの上には立脚せず。前者を好み後者を棄つ。)と英譯して居るのは原意に親しき適譯であるが [I] “Therefore the truly great man holds to what is solid (sincerity and good faith), not to what is flimsy (propriety); to what is real (Tao), not to what is ornamental (knowledge of externals). He rejects those (humanity, justice, propriety and knowledge of externals), but holds to this (Tao).” とでもしたなら、意義が一層明白になるではないかと思ふ。○「上徳無_レ爲、而無_レ不_レ爲」が「上徳無_レ爲、而不_レ爲」となり、「下徳爲_レ之、而無_レ以_レ爲」が「下徳爲_レ之、而有_レ不_レ爲」となり、「仍_レ之」が「仍_レ之」となり、「愚之始也」が「愚之始」となり、「處」が「居」となつて居る異本もある。

評論 この第三十八章は、僧徳清が「此言_三世降道衰、失_レ眞愈遠、教_三人當_レ返_三其本_一也。」と云つて居る通り、時代の推移し、人文の變化するにつれて、道の開發の順次に第二義的、第三義的になることを叙し、且つ、苟も道に即_レせる生活をなさんとするものは、常に道の根本義を忘るべからざることを力説したものであるが、今その開發の順序と思想表現の形式とを一瞥して見ると、



と云ふ風になつて居る。要するに、この第三十八章も、老子の反儒教的叫びに外ならない。

第三十九章 (昔之得一章第三十九)

本 昔之得_レ一者。天得_レ一以清、地得_レ一以寧、神得_レ一以靈、谷得_レ一以盈、萬物得_レ一以生、侯王得_レ一、以爲_二天下正_一。其致_レ之一也。天無_レ以清、將恐裂。地無_レ以寧、將恐發。神無_レ以靈、將恐歇。谷無_レ以盈、將恐竭。萬物無_レ以生、將恐滅。侯王無_レ以正、而貴高、將恐蹙。故、貴以_レ賤爲_レ本、高以下爲_レ基。是以、侯王自謂_二孤寡不穀_一。此其以_レ賤爲_レ本耶、非乎。故、致_レ數_レ輿無_レ輿。不_レ欲_二瓊珠如_レ玉、珞如_レ石_一。

新讀方 昔は一を得たるものなり。天は一を得て以て清く、地は一を得て以て寧く、神は一を得て以て靈となり、谷は一を得て以て盈ち、萬物は一を得て以て生じ、侯王は一を得て以て天下の正となる。そのこれを致すは一なり。天清きを以てすることなければ、將恐らくは裂けん。地寧きを以てすることなければ、將恐らくは發せん。神靈を以てすることなければ、將恐らくは歇ん。谷盈つるを以てすることなければ、將恐らくは竭きん。萬物生ずるを以てすることなければ、將恐らくは

は滅せん。侯王正しきを以てすることなく、而も貴高ならば、將恐らくは蹙れん。故に、貴は賤を以て本となし、高きは下きを以て基となすなり。是を以て、侯王は自から孤寡不穀と謂ふ。これ、その賤を以て本となすか、あらずや。故に、輿を數ふることを致せば輿なし。瓊珠として玉の如く、珞珞として石の如くなるを欲せず。

新字解 □昔之得一者〓これは「太古に於ては、萬物すべてが道に即して居たものである。」の意で、一とは冲虚なる道を指したものである。□天下正〓これは、第二十二章、及び第二十八章にある天下式と同義。□其致之一也〓其は、天・地・神・谷・萬物・侯王を指し、致_レ之は、以清_・以寧_・以靈_・以盈_・以生_・以爲_二天下正_一を指し、一は、道を指したものである。□裂_・發_・歇_・竭_・蹙〓裂は、破裂の意。發は、發泄の義で、震動、不安定の意。歇は、消歇、消滅の意。竭は、枯竭の意。蹙は、顛仆の意。□孤寡〓『孟子』(梁惠王章句下)に「老而無_レ妻曰_レ鰥。老而無_レ夫曰_レ寡。幼而無_レ父曰_レ孤。老而無_レ子曰_レ獨。」とある通り、元來、孤は、孤兒のこと、寡は夫なき老女のことであるが、この二字は、何れも自から謙遜せることを意味する第一人稱代名詞にも使用されて居る。□不穀〓この二字に註して、蘇子由は「不善也」と云ひ、『老子元翼』には「不_レ得_二其養_一者」とあり、僧德清は「孤、寡、不穀、此三名者、皆賤者之稱也。」と云つて居る。穀(十穀)の字には、善及び養の義もあ

るから、この解説は正しいが、「老子要註」には「穀之言、祿也。淮南子人間訓、不穀親傷。高誘註、不穀、不祿也。人君謙以自稱也。」と云つて、穀（禾）を祿（福）の義にとり、不穀を「福祿なき者」の意に解して居る。要するに、不穀は、孤・寡と同じく、謙遜を表示する第一人稱單數代名詞である。

□此其以賤爲本耶非乎——これは「侯王が、自から孤・寡・不穀と稱するのは、高貴が下賤を土臺として居る道理によるものではないか。そうであらう。」の意。□致數與無與——これは、「車を構成して居る各部分を、一一數へて除去すれば、車と名くべきものは残存しない。」の意。（評論参照）□不欲瑋瑋如玉瑋瑋如石——瑋瑋は、玉の光澤あつて、堅固なる貌を云ひ、珞珞は、落落と同じく、石の光澤なくして、ころころして居る貌を云つたもので、この全文句は「瑋瑋として玉の如き侯王が、高貴を以て自惚れて居る様なことも欲しなれば、珞珞として石の如き下賤の民衆が、自ら卑賤を以て恥として居る様なことも欲しない。」の意で、道の上から見れば、高貴なるもの必ずしも高貴とすべきにあらず。卑賤なるもの、必ずしも卑賤とすべきにあらずることを云つたものである。

新譯 今は世の末で、何事も何物も、道を離れて、邪徑に彷徨して居るが、太古にあつては、すべて冲虚なる道に即して居たものである。天もその道に即して、はじめて清明になり、地もその道に即して、はじめて安寧になり、天地間に行はれる種種なる靈妙不可思議の現象の行爲者なる神

も、その道に即して、はじめて靈妙なる現象を生成することが出来、谿谷もその道に即して、はじめてあらゆるもの抱擁し、充滿することが出来、萬物もその道に即して、はじめて發生することが出来、侯王もその道に即して、はじめて天下萬民の模範となり典型となること出来るのである。即ち、天なり、地なり、神なり、谷なり、萬物なり、侯王なりが、それぞれ清明になり、安寧になり、靈妙になり、受容力を有し、發生力を得、天下の正となり得るのは、その各自が、道と一如になるからである。若し、天が道を離れて清明にならなければ、恐らくは、天は破裂してしまふであらう。若し、地が道を離れて安寧にならなければ、恐らくは、地は常に震動して、不安定の状態になるのであらう。若し、神が道を離れて靈妙ならざるに至れば、恐らくは、神はその活力を消失してしまふであらう。若し、谷が道を離れて包容性なきに至れば、恐らくは、谷は枯竭して、その存在を失つてしまふであらう。若し、萬物が道を離れて發生しないならば、恐らくは、萬物は天地間から影も姿も隠してしまふであらう。若し、侯王が道を離れて天下の正たらざるに至り、自から高貴なる地位に自惚れて居れば、恐らくは、その侯王の存在は崩壊してしまふであらう。元來、侯王の尊貴なる身分は、その下に居る貧賤なる民衆の支持によつて、はじめてその尊貴を全ふして居るのであり、その高き位は、その下に居る低き民衆によつて支持され、その支持を基として、その上に高く

なつて居るのであるから、侯王たるものは、この道理を會得して居るべきである。それで、世の侯たり王たるものは、孤とか、寡とか、不穀とか云ふ好ましからぬ言葉を以て、自分の代名詞として居るのであるが、これは、高貴は卑賤を以て、その本として居ると云ふ道理によつたものではないか。要するに、侯とか王とか云ふ名稱は、その實質は畢竟虚無のものであつて、卑賤、鄙俗なる士農、工、商の總和を表示する一種の集合名詞にすぎない。それは丁度車の様なもの。車を構成して居る各部分を、これは輪、これは輻、これは軫(車の後の横木)、これは蓋、これは轆(車の心棒のまき)と云ふ風に、一一數へて見れば、あとに車と云ふものは存在しないことになる。これと同じく、士、農、工、商に屬するあらゆる人人を、これは何、これは何と云つて一人一人除去してしまへば、侯王の存在は消滅してしまふのである。であるから、苟も道に即して居る者は、碌碌として玉の如き高貴にも凝固(こりかた)まることも欲せず、路路として石の如き卑賤にも凝固(こりかた)まることも欲せず、高貴も卑賤も、一の冲虚なる道の中に入れ、雙方相融和させて、これを鑑賞して居るのである。

考證

□「昔之得一者」と云ふ一句を、レツグは、(L) "The things which from of old have got

the One (the Tao) are:—" (昔ながらに一なる道を得たるものは、即ち……) と英譯し、オール

the One (the Tao) are:—" (昔ながらに一なる道を得たるものは、即ち……) と英譯し、オール

のは、一致によつて最も古代より存続したり。即ち……) と英譯し、何れも者の字を、天・地・神・谷・萬物・侯王を指したものと解して居る。古來この文句をこの様に解して居る學者もあるから、これは必ずしも誤譯とは云へないが、私の見解によれば、これは、太古に於ては、すべての物が、何れも道と一如になつて居たものであることを斷言したもので「昔之」の之は、所有格を意味する之ではなく、主格を強める一種の助字であるから、「昔之」は、道の開發なる宇宙人生の事象の、その開發當時に於ける状態、又は事象そのものを指したものと見るべきである。この見解によつて、この文句を英譯するならば、(I) "All things when originally created, were with the One, Tao." とでもなすべきであらう。□「天得一以清地得一以寧神得一以靈谷得一以盈萬物得一以生王侯得一以爲天下正其致之一也」と云ふ文句を、レツグは、(L) "Heaven which by it is bright and pure; earth rendered thereby firm and sure; spirits with powers by it supplied; valleys kept full throughout their void; all creatures which through it do live; princes and kings who from it get the model which to all they give. All these are the results of the One (Tao)." (それによつて清明なる天、それによつて確固たる地、それによつて與へられたる力を有する神、その空虛を普く盈みせる谷、それによつて生活せるすべての生物、すべてに示す典型を、それによつて與へられたる侯王、これなり。

すべて、これらは一なる道の効果なり。)と、頗る詩的に英譯して、前句(昔之得、一者)に接続させて居るし、オールドも、また、これに類似した譯し方をして居るが、私の見解とは相異して居る。今これを私の見解によつて英譯するならば、〔I〕“Heaven when with the One, Tao, is clear; earth when with the One, Tao, is in peace; spirits when with the One, Tao, are powerful; valleys when with the One, Tao, are to be filled; all things when with the One, Tao, come into existence; and princes and kings when with the One, Tao, become a model to the world. The perfection of these is possible only through the One, Tao.”と云ふなり。□「天無以清將恐裂地無以寧將恐發神無以靈將恐歛谷無以盈將恐竭萬物無以生將恐滅侯王無以正而貴高將恐墜」と云ふ文句を、レックは、〔I〕“If heaven were not thus pure, it soon would rend; if earth were not thus sure, it would break and bend; without these powers, the spirits soon would fail; if not so filled, the draught would parch each vale; without that life, creatures would pass away; princes and kings without that moral sway, however grand and high, would all decay.”(天もし斯く清明ならざれば、直に裂けるならん。地もし斯く確固ならざれば、破れ且つ曲るならん。これらの力なければ、神は衰ふるならん。その生命なければ、生物は死滅するならん。その道德的權力なければ、侯王は如何に尊貴たりとも、すべて衰頹するならん。)と、これも頗る詩的に英譯して居る。大體に於て原意には觸れて居る様に思はれるが、私の見解とは多少相異して居る。今私の見解通りに、これを英譯するならば、

〔I〕“If heaven lost clearness thus obtained, it would be in danger of dissolution; if earth lost peace thus obtained, it would be in danger of disintegration; if spirits lost power thus obtained, they would be in danger of becoming impotent; if the valleys lost capacity thus obtained, they would be unable to hold anything; if all things lost vitality thus obtained, they would be in danger of extinction; and if princes and kings lost virtue thus obtained, and are proud of their nobility and dignity, they would be in danger of sudden fall.”と云ふなり。□「故貴以賤爲本高以下爲基是以侯王自謂孤寡不穀此其以賤爲本耶非乎」と云ふ文句を、レックは、〔I〕“Thus it is that dignity finds its (firm) root in its (previous) meanness, and what is lofty finds its stability in the lowness (from which it rises). Hence princes and kings call themselves ‘Orphans’, ‘Men of small virtue’ and as ‘Carriage without a nave’. Is not this an acknowledgment that in their considering themselves mean they see the foundation of their dignity?”(斯の如く、尊貴はその前の卑賤の中に、その強固なる根を存するを見るなり。而して、崇高なるものは、それが起り

し下賤にその安定の存するを見るなり。この故に、侯王は自からを孤兒、小徳の者、又は轂こしきのなき車と稱せり。これ彼等が自からを卑賤なりと認むることに於て、彼等の尊貴の基を知れることを自白せるものにあらずや。と英譯して居る。孤・寡・不穀を、レッグが〔I〕“Orphans, Men of small virtue, and as Carriages without a nave” (孤兒、小徳の者、又は轂こしきのなき車)と譯し、オールドも〔O〕“Orphans, solitary men, and chariot without wheels” (孤兒、孤棲の人、輪のなき車)と譯して居る所を見ると、彼等は穀この字が、轂こ(車の)となつて居る刊本に従つたものであらうが、私の見解によつて、この文句を英譯するならば、〔I〕“Thus it is that nobility depends on the base of meanness, and dignity on the foundation of lowness. For this reason, when princes and kings call themselves, they use such humble terms as ‘Orphans’, ‘Helpless persons’ or ‘good-for-nothing ones’. Is this not due to the fact that nobility and dignity depend on meanness and lowness?”とでもなすべきであらう。□「故致數與無輿」と云ふ文句を、レッグは、〔I〕“So it is that in the enumeration of the different parts of a carriage we do not come on what makes it answer the ends of a carriage.” (故に、車を構成せる異なる各部分を枚擧すれば、吾人は、車の用途に適應すべき何物をも發見せざるなり。)と、頗る難解の句調を以て英譯し、オールドは、〔O〕“Surely ‘a

chariot without wheels’ is no chariot at all.” (實際、輪のなき車は、決して車にあらず。)と英譯して居るが、何れも私の見解とは相異して居る。元來、この言葉は、「帝王は、國家の代表者であるから、國家を構成して居る民衆がなくなれば、帝王なるものは存在し得ない。」と云ふことを主張する憲法學者の説と同じく、高貴なる侯王と卑賤なる民衆との不可離的關係を譬喩的に表現したものであつて、侯王と云ふ稱號は、輿と云ふ名稱と同じく、その支持者たる民衆を除去すれば、自然に消滅することを暗示したものである。今この見解によつて、この文句を英譯すれば、〔I〕“When we take away, one after another, all the parts of a carriage, we will finally find nothing left to be called the carriage.” とでもなすべきであらう。(評論、参照) □「不欲珠如玉珞珞如石」と云ふ文句を、レッグは、〔I〕“They do not wish to show themselves elegant-looking as jade, but (prefer) to be coarse-looking as an (ordinary) stone.” (彼等は、自からを玉の如く珠珞たるものたらしむるを欲せず。却て珞珞たる石の如くなることを好む。)と英譯して居る。これは、不レ欲の二字を「珠如レ玉」だけに係かけ、「珞珞如レ石」の上に、故意に欲の字を挿入して、この文句を解したか、または、その様になつて居る刊本に従つたものと思はれるが、何れにしても、私の見解とは相異して居る。オールドは、この文句を、〔O〕“It is as hard for a man to be isolated like a single gem as

to be lost in the crowd like a common pebble." (一箇の寶石の如く遠離されて居ることは、普通の小石の如く群衆の中に雑居すると等しく、何人にとつても難きことなり。)と英譯して居るが、これは何かの誤解に基く誤譯としか思はれない。元來この文句は、蘇子由が「處貴而非貴。處賤而非賤。非若玉之瑤琮、貴而不能賤、石之落落、賤而不能貴也。」と云ひ、僧德清が「謂不可視已、瑤琮如玉之貴、視物落落如石之賤也。苟忘貴賤之分、則人人皆爲我用矣。豈非無用之爲大用耶。」と居つて居る通り、苟も道に即せるものは、事物の上に貴賤、高下の偏見を有すべきものにあらざることを云つたものであるから、この見解によつて、この文句を英譯するならば、① "Therefore he (who with Tao) does not like to consider nobility and dignity discriminatively as bright-looking gems, nor does he consider meanness and lowness discriminatively as ugly-looking pebbles." とでもなすべきであらう。○「侯王」が「王侯」となり、「天下正」が「天下貞」となり、「其致之也」が「其致之也」となり、「侯王無以正」が「王侯無以爲貞」となり、「不穀」が「不穀」となり、「爲本耶、非乎」が「爲本也、非歟」となり、「致數輿無輿」が「致數輿無輿、又は「致數車無車」となり、「如玉」が「若玉」となり、「落落」が「落落」となり、「如石」が「若石」となつて居る異本もある。

この第三十九章は、その前半に於ては、天地萬物の清寧、平和、安定、生起、幸福は、すべて沖虚にして無爲なる道に則るべきことを叙したものであるが、その後半に於ては、「國民なき所に侯王なし」と云ふ思想が、力説されて居る。而して、その後半の思想は、前半の最後に「侯王無以正、而貴高將恐蹙。」とある貴高の二字から誘起せられ、その侯王の貴高は、國民の下賤の總和に外ならないことを、車とその構成部分との關係を以て説示したものであるが、茲に老子が「致數輿無輿」と云つて居る言葉は、老子の思想が、印度思想と密接なる關係を有して居ることの證據と見ることが出来る様に思はれる。即ち、「大涅槃經」第二十七卷(師子吼菩薩品之三)を見るに、「善男子、離水無河。衆生亦爾。離五陰已、無別衆生。善男子、如離箱輿、輪輻轂輞、更無別車」とあり、「大智度論」第三十一卷を見ると、「如車以輻輞轂輞衆合爲車。若離散各在一處、則失車名。五衆和合、因緣故名爲人。」となり、同第四十二卷を見ると、「名字在法中住。法空故、名字無住處。如車輪輻輞等合故有車名。若散是和合、則失車名。是車名非輪等中住。亦不離輪等中住」とあり、「那先比丘經」(上卷)を見ると、「那先問王言、名車何所爲車者、輻爲車耶。王言、輻不爲車。那先言、輞爲車耶。王言、輞不爲車。那先言、輻爲車耶。王言、輻不爲車。那先言、輞爲車耶。王言、輞不爲車。那先言、輞爲車耶。王言、輞不爲車。那先言、輞爲車耶。王言、輞不爲車。那先言、輞爲車耶。王言、輞不爲車。那先言、輞爲車耶。王言、輞不爲車。那先言、輞爲車耶。王言、輞不爲車。那先言、輞爲車耶。」とある。

レ車。那先言、輓爲レ車耶。王言、輓不レ爲レ車。那先言、輿爲レ車耶。王言、輿不レ爲レ車。那先言、扞爲レ車耶。王言、扞不レ爲レ車。那先言、蓋爲レ車耶。王言、蓋不レ爲レ車。那先言、合三聚是諸材木、着一面、寧爲レ車耶。王言、合三聚是諸材木、著二一面、不レ爲レ車也。那先言、假令不レ合三聚是諸材木、寧爲レ車耶。王言、不レ合三聚是諸材木、不レ爲レ車。那先言、音聲爲レ車耶。王言、音聲不レ爲レ車。那先言、何所爲レ車者。王便默然不レ語。那先言、佛經說之如三合聚。是諸材木用作レ車、因得レ車。人亦如是。合三聚頭、面、耳、鼻、口、頸、項、肩、臂、骨、肉、手、足、肝、肺、心、脾、腎、腸、胃、顔、色、聲、響、喘、息、苦、樂、善、惡、合聚名爲レ人。王言、善哉善哉。〔『東方聖書』第三五卷第四三―四五頁、及び駒澤大學學監山上曹源譯『彌蘭陀王問經』第四二―四五頁參照〕とある。今この二種の譬喩（老子の譬喩と佛典の譬喩）を検討して見ると、その兩者の間に、老子は、侯王の高貴の畢竟空なることを説明するために、輿（車）の實體の空無なることを例示し、佛典に於ては、衆生（人間）の實體の畢竟空なることを説明するために、車の實體の空無なることを例示したと云ふ相異はあるが、譬喩の實質に於ては全く同一である。

『大智度論』の著者龍樹 *Nāgārjuna* の年代に就ては、種種の異説があるが（大谷大學教授寺本婉雅著『新龍樹傳の研究』參照）、今假りに、ある傳説の如く、『大智度論』の述作が、佛滅後六百九十八

年（西曆二一三年・後漢獻帝建安十八年）に行はれたものとすれば、これは、彌蘭陀王 *Milinda*; *Menandros*; *Menander*）——即ち、那先比丘（龍軍）*Nagasena* と問答した希臘系の君主が、印度に侵入し、奢羯羅城 *Sagala* に首都を定めた年（西洋紀元前一五五年・佛滅後三三一年）よりも三百六十七年後にあたる。而して、佛陀の生誕は、一般に信じられて居る所では、西洋紀元前五六五年で、この年には、老子は四十歳であり、孔子が、はじめて老子に會見したと云ふ西曆紀元前一七七年（周敬王三年）には、老子は八十八歳、佛陀は四十九歳、孔子は三十五歳であつたから、この「致レ數レ輿無レ輿」と云ふ譬喩が、佛典編纂前に、既に支那に於て、老子によつて使用されて居ることは確實である。而して、この譬喩の起原は、私の所見では、實は、印度ではなく、印度以外の他の國に存在して居た譬喩が、支那と印度とに、時代を異にして、傳へられたものと思はれるが、遺憾ながら、その起原の探求に要する文献は、今の所では、何人にも發見されて居ない様である。（總論）「老子の思想」參照）

第四十章 (反者道之動章第四十)

【本】

反者道之動、弱者道之用。天地萬物、生於有、有生於無。

【新讀方】

反は道の動にして、弱は道の用なり。天地萬物は、有より生じ、有は無より生ず。

【新字解】

□反者道之動——これは、趙志堅が「反、歸レ本也。凡人以レ移故、就レ新爲レ動。爲レ道者、捨レ未反レ本。即反爲レ動。蓋身心安寂、不動也。捨レ有歸レ無、云レ動也。」と云つて居る通り、「有より無に、躁より靜に復歸するのが、道の常則である。」の意で、動は、活動の方法のこと。□弱者道之用——これは、有より無に、躁より靜に反り、道の一屬性なる弱を固持して居る所に、道の現實的効用の存することを云つたものである。□天地萬物生於有——これは、第一章に「有名萬物之母」とある思想と同じく、「天地萬物は、無の現象化せるものである。」の意。有は、「無の現象化」を指したものである。

【新譯】

冲虚なる道の屬性は、常に消極的であつて、積極的動作は、道の上から見れば好ましくないことである。實際、積極的動作には、永續性が乏しいのである。であるから、有より無に、躁より靜に、高より低に、大より小に、明より暗にと云ふ風に、凡人の好まない方に復歸するのが、道

の正しき内省的活動の方法である。故に、道に即せる聖人は、本に反り、常に對外的に弱の態度を保持して、他と何事に就ても争はないのであるが、實は、道の現實的効用は、この弱を保持する所に有するのである。天地萬物は、道の現象化(有)から生じたものであるが、その現象化は、何から生じたかを云へば、それは道の本體たる無から生じたのである。無が萬物の反るべき歸極である。

【考證】

□「反者道之動弱者道之用」と云ふ五言二句を、レツグは、【I】“The movement of the Tao by contraries proceeds; and weakness marks the course of Tao's mighty deeds.”(道の運動は、相反性によつて行はれ、弱は道の強大なる行爲の過程を示す。)と、韻文化して英譯し、チャイルスは【G】“Retrospection is the movement of Tao. Weakness is the character of Tao.”(逆行は道の運動にして、弱は道の本質なり。)と英譯し、オールドは、【O】“The path of Tao is backward. The characteristic of Tao is gentleness.”(道の進路は後方にあり。道の特性は柔和なり。)と英譯して居るが、何れも私の見解とは、相異して居る、私の見解によれば、これは、【I】“Returning (to the primordial state of Tao) is the proper way of the process of Tao; holding to weakness therein is the proper way of the operation of Tao.”とじも譯すべきであると思ふ。□「天地萬物生於有有生於無」と云ふ文句を、レツグは、【L】“All things under heaven sprang from it as existing (and

named); that existence sprang from it as non-existence (and not named).”(天地萬物は、存在し且つ名けられたるそれより發生し、その存在は、存在せず且つ名けられざるそれより發生したり。)と英譯して居るが、これよりもチャイルスが、〔G〕“All things under heaven derive their being from Tao in the form of Existence; Tao in the form of Existence sprang from Tao in the form of Non-existence.”(天地萬物は、その存在は有の形に於ける道より出で、有の形に於ける道は、無の形に於ける道より發生したり。)と英譯して居る方が、原意に親しい様に思はれる。オールドが、これを〔O〕“Everything in the universe comes from Existence, and Existence from Non-existence.”(宇宙間に於けるものは、何物も有より生じ、有は無より生ずるなり。)と英譯して居るのは、簡單にして要領を得て居る様に思はれる。○「天地萬物」が「天下之物」となり、「生ニ於有」が「生ニ于有」となり、「生ニ於無」が「生ニ于無」となつて居る異本もある。

評論 この第四十章は、一讀して明瞭なるが如く、老子の思想の三要點の約説である。即ち「反者道之動」は、内省的反本主義の言葉であつて、道的内省法を示し、「弱者道之用」は、柔弱主義の言葉であつて、道的社交法を示し、「天地萬物、生ニ於有、有生ニ於無」は、老子の常に主張して居る宇宙觀に屬する言葉であつて、有は無の現象化したものであることを叙したものである。

第四十一章 (上士聞道章第四十一)

本文 上士聞道、勤而行之。中士聞道、若存若亡。下士聞道、大笑之。不笑不足以為道。故、建言者有之。明道若昧、進道若退、夷道若類、上德若谷、太白若辱、廣德若不足、建德若偷、質直若渝、大方無隅、大器晚成、大音希聲、大象無形。道隱無名。夫唯道善貸且成。

新讀方 上士は道を聞けば、勤めてこれを行ふ。中士は道を聞けば、存するが若く亡するが若し。下士は道を聞けば、大いにこれを笑ふ。笑はざれば以て道となすにたらず。故に、建言者にこれあり。明道は昧きか若く、進道は退くが若く、夷道は類の若く、上徳は谷の若く、太白は辱の若く、廣徳は足らざるが若く、建徳は偷れるが若く、質直は渝るが若く、大方は隅なく、大器は晩成し、大音は希聲にして、大象は無形なりと。道は隠れて名なし。それ唯道は善く貸して且く成すなり。

新字解 □上士聞道勤而行之——これは、僧徳清が「謂上根之人、志與言合、一有所聞、便身體而力ニ行之。」と云つて居る通り、最優の求道者は、道に關する教訓を聞けば、直にそれを實踐躬行

することに努力することを云つたものである。□若存若亡——これは、「聞いた教訓を實行の上に現はさないから、その教訓を記憶して居るのか、忘却してしまつて居るのか、少しも知れない。」の意に解しても、又は僧德清が「且信且疑」と云つて居る通り、「その教訓に對して、半信半疑の態度をとつて居る。」の意に解して差支ない。□建言者有之——これは、蘇子由が「建、立也。古之立言者、有是説、而老子取之。下之所陳者是也。」と云つて居る通り、「昔の人の云つた言葉に、この様なことがある。」の意。而して、この様な言葉とは、次の「明道若昧」から「大象無形」までの十二句を指したものである。□明道若昧——これは、僧德清が「謂小人用智、恃知以爲能。聖人光而不耀、以有智而不_レ用。」と云ひ、吳澄が「此言動而相反之事。葆_レ光用_レ晦而若_レ昧、廼_レ所以爲_レ明。」と云つて居る通り、明智を有する聖人は、明智を内に隠して、外に誇示しないから、外觀は愚昧の如く見ゆるの意。明道は、明智ある道者のこと。□進道若退——これは、呂吉甫が「爲_レ道者、日損_レ之、又損_レ之以至於無爲、是之謂_レ進道若_レ退。」と云ひ、僧德清が「小人矜誇競躁、聖人以謙自守。以_レ卑自牧。故進道若_レ退」と云つて居る通り、眞の修道者は、世の修學者とは異なり、本の無爲に反することを目的として居るのであるから、外觀は退くが如く見ゆるの意。□夷道若類——これは、眞に自然のままに平坦なる道は、外觀は類のある糸を延べた如く、美しくは見えぬの意。夷

は、平坦の義、類は糸のふしのこと。□上德若谷——これは、僧德清が「世人局量扁淺、一毫不_レ容。聖人心包_レ天地。德無_レ不_レ容。如_レ海納_レ百川。」と云つて居る通り、聖人の有せる包容力の偉大にして、無限なることを云つたものである。□太白若辱——これは、僧德清が「小人内藏_レ瑕玼、而外矯飾、以爲_レ潔。聖人純素貞白、一塵不_レ染。而能納_レ汗垢、示_レ同_レ庸人。」と云つて居る通り、聖人の和光同塵に就て云つたものである。非常に潔白なる者は、屈辱を受けて居る者の如く見ゆると云ふのが、この四言一句の字義。□廣德若不足——これは、僧德清が「小人一德不_レ忘。必恃_レ自多。而責_レ報於人。聖人德被_レ群生。而不_レ以爲_レ功。」と云つて居る通り、廣大無邊なる徳性を有する聖人は、外觀では、徳が充實して居ない様に見えるの意。□建德若_レ_レ——これは、僧德清が「小人一善之長、必衒_レ弄自售、欲_レ求_レ知於人。聖人潛行密用。凡有_レ所_レ施_レ於人者、惟恐_レ人之知_レ己也。」と云つて居る通り、眞に徳を積んで居る聖人は、別に人目にたつ様なことをして徳を積む様なことはしないで、謂ゆる陰徳を積むのであるから、人目には、何もしないでなまけて居る様に見えるの意。□質直若_レ_レ——これは、僧德清が「小人隨時上下、見_レ利而趨。望_レ勢而變。儉は、儉慢、怠惰の義。□質直若_レ_レ——これは、僧德清が「小人隨時上下、見_レ利而趨。望_レ勢而變。聖人之心、貞介如玉、而不_レ可_レ奪。而能與_レ世浮沈、變化無_レ窮、無_レ不可_レ。」と云つて居る通り、道に即して居る聖人の心は、質直、純朴であつて、他の人に對して、自我を主張することをせず、

自然のままに人に接して居るから、外觀では、その主義が一定せず、常に變節して居る様に見えるの意。滌は、滌移、改變の義。大方無隅——大方は、太虚、即ち絶對的宇宙のこと。無隅は無方角のこと。この四言一句は、佛教に謂ゆる「迷故三界城、悟故十方空、本來無東西、何處有南北」と同意義である。大器晚成——大器は、大人物、大人格の意に解しても、又は大器具の意に解しても差支ない。晚成は、速成の反對で、その完成に長き時間と、多くの努力とを要することを云つたものである。大音希聲——蘇子由は、この四言一句に「非耳之所得聞也。」と註し、吳澄は「音之大者、其聲反疏而希。」と註して居るが、これは、地球の動く響や、遊星の走る音などは、その音響が絶大であるから、人間の耳には、音響として感じないことを云つたもので、希聲は無聲の意である。大象無形——これは、林希逸が「大象、天地也。易曰、法象莫大於天地。天地之形、誰得而盡見之。」と云ひ、吳澄が「可見而後爲象。象之大者、反無形之可見。」と云つて居る通り、「天地の如き、宇宙の如き、形態の絶大なるものは、その全形態が人目には映じない。」の意。道隱無名——この四言一句も、建言の一と見做すことも出来る様に思はれるが、古來この句以下を老子の言葉として取扱つて居る。これは、「明道、進道、夷道、上德、太白、廣德、建德、質直、大方、大器、大音、大象などは、何れも道の屬性とも云ふべきものであるが、道はこれらのもの

の中に潜在して居て、その道たる本名を没却して居る。」の意。夫唯道善貸且成——これは、蘇子由が「推其有餘、以貸不足、物之賴之、以成者如此」と云つて居る通り、道は力を事物に貸與し、その事物をある期間生存せしむることを云つたものである。

新譯 人間を智的に分類すると、色色な階級に分れるが、まづ上中下の三種に分ち、彼等の道に對する態度を見るに、求道心の熱烈な上士は、道の話を知ると、その聞いた教訓を、直に實踐躬行することに努力するが、その次の中士になると、折角、道の話を知いても、聞いたのやら、聞かなかつたのやら、記憶して居るのか、忘却してしまつたのか、全く不得要領な態度をとつて居る。下等の人間になると、道の話なんか、てんで見向きもせず、折角、話して聞かせて貰つても、それに對して呵呵大笑するばかりである。併し、下等の人間の拍手喝采する様な話なら、そんな話には何の價値もない。下等の人間の呵呵大笑する様な話であつてこそ、はじめて道の話と云ふべきである。昔の賢者が、こんなことを云つて居る。——眞に明智を有して居る道者は、世の中の術學者とは異なり、外見は愚昧の様に見える。眞に道の上の修行をして居る道者は、世の中の修學者とは異なり、無爲、冲虚の道に即して進んで行つて居るから、外見は、退いて居る様に見える。自然のままの平坦な大道は、眼界の狭小な者の目には、類のある糸を延べた様に見える。太古の有徳者は、

絶大なる包容力を有し、谿谷の衆流を受容するが如く、如何なるものでも、自己の徳化の中に融和させてしまつたものである。人格の非常に潔白な聖人は、他の人の不潔によつて、自己の個性が汗穢化されるものとは思つて居ないから、如何なる人とも交遊する。それで第三者からその聖人の行動を見ると、非常に屈辱を受けて居る様に見える。廣大無邊なる徳を有して居る聖人は、その徳を他に誇示する様のことはいないから、他人の目には、徳が不足して居る様に見える。眞に徳を積んで居る道者は、世の中の人のする様に、自己の徳行を廣告しないから、他人の目には、徳を積まずになまけて居る様に見える。道の質朴性を保持して居る聖人は、他人に對して自我を主張せず、自然のままに何人とも交遊するから、他人の目には一定した節操を有せず、常に主義を改變して居る様に見える。宇宙の形態は、絶對的であるから、本來無_二東西_一、何處有_二南北_一である。大人物でも、大建築でも、大器具でも、すべて大の字のつくものの完成は、逆も一夜では出来ない。必ず長き時間と多くの努力とを要する。音響でも大きいになれば、人間の耳には聞えない。地球の動く音や、遊星の走る響には、少しも音響のないものと、人間は思つて居るのではないか。形態でもその通り、大きい形態になると、人間の眼には映じない。宇宙の形態を見たものは、曾て何處にもないではないか。——昔の賢者の云つて居ることは、確に至言だ。この明道なり、進道なり、乃至、大象

なりは、何れも道に屬するものであるが、その何れに道が存在して居ても、常に無名であつて、道には一定不變の名稱と云ふものはない。が、その道は、その冲虚無爲なる力を如何なる事物にも貸與して、その事物固有の生存を可能ならしめて居るのである。善く貸して、且く成すにしても、隠れて名なき道のことだから、下士がこれを聞いて大笑するのも、實は無理からぬことであらう。

考證

□「上士聞道勤而行之中士聞道若存若亡下士聞道大笑之不笑不足以爲道」と云ふ文句を、レツグは、

[L] "Scholars of the highest class, when they hear about the Tao, earnestly carry it into practice. Scholars of the middle class, when they have heard about it, seem now to keep it and now to lose it. Scholars of the lowest class, when they have heard about it, laugh greatly at it. If it were not (thus) laughed at, it would not be fit to be the Tao." (上級の學者は、道に就て聞けば、勤めてそれを實行す。中級の學者は、それを聞きし時に、今それを保てるが如く、今それを失へるが如く見ゆ。下級の學者は、それを聞きし時に、大にそれを笑ふ。若し、斯の如く笑はれざれば、それは道たるに適せざるならん。)と英譯し、チャイルスも、ほほこれと同一の意義に解して居るが、これは何れも原意に觸れて居る様に思はれる。□「故建言者有之明道若昧進道若退夷道若類上徳若谷太白若辱廣徳若不足建徳若偷質直若滯大方無隅大器晚成大音希聲大象無形」と云ふ十三句を、レツグもオール

ドも韻文に英譯して居るが、その意義に於て、何れも私の見解とは相異して居る。チャイルスは、「故建言者有之」と云ふ言葉を省略し、〔G〕“He who is enlightened by Tao seems wrapped in darkness. He who is advanced in Tao seems to be going back. He who walks smoothly in Tao seems to be on a rugged path. The man of highest virtue appears lowly. He who is truly pure behaves as though he were sullied. He who has virtue in abundance behaves as though it were not enough. He who is firm in virtue seems like a skulking pretender. He who is simple and true appears unstable as water. Tao is a great square with no angles, a great vessel which takes long to complete, a great sound which cannot be heard, a great image with no form.”(道にても明らかにならぬ居る者は、暗黒に包まれ居るが如く見ゆ。道の上に進める者は、退歩しつつあるが如く見ゆ。道の上を平滑に歩める者は、高低ある路にあるが如く見ゆ。最高の徳ある者は低く見ゆ。眞に純正なる者は、恰も汚濁されたるかの如く自處す。廣徳ある者は、恰もそれが不足なるが如く見ゆ。徳の上に確固たる者は、竊に徘徊せる偽装者の如く見ゆ。質直なる者は、水の如く不安定の如く見ゆ。道は角なき正方形の如く、完成に長き時間を要する大器の如く、聞くこと能はざる大音響の如く、形態なき大像の如し。)と英譯して居るが、これも私の見解とは、よほど相異して居る。

る。今私の見解通りに、これを英譯するならば、〔I〕“He who possesses the serene wisdom of Tao seems to be lost in obscurity. He who advances along the road to Tao, appears to be receding. The smooth road under natural conditions appears rugged. The possessor of Virtue in the most remote age had valley-like capacity. He who is pure in the highest degree, seems to be disgraced. The possessor of profound Virtue seems to be lacking it. He who practises Virtue (in accordance with the way of Tao) appears to be negligent. He who is simple and straightforward seems to lack principle. The universe is infinite and without direction. The largest vessel needs the longest time for its completion. The greatest sound is inaudible. The greatest form is without shape.”と云ふべきであらう。□「道隱無名夫唯道善貸且成」と云ふ文句を、レックは、〔L〕“The Tao is hidden, and has no name; but it is the Tao which is skilful at imparting (to all things what they need) and making them complete.”(道は隠れて名なし。されど萬物の要するものを與へ、それを完成せしむるに巧なる者は道なり。)と英譯し、チャイルスは、〔G〕“Tao lies hid and cannot be named, yet it has the power of transmuting and perfecting all things.”(道は隠れて存在し、名くべからず。されど萬物を變質せしめ完成する力を有す。)と英譯して居る。レックの譯文は、原

意を傳へて居るが、チャイルスが「善貸」を“Transmuting”（變質せしむる）と譯して居るのは、如何に考へても誤譯としか思はれない。「夫唯道善貸且成」を、オールドが、〔O〕“It is good at beginning and finishing.”（それ「道」は、始むることと終ることに於て善し。）と英譯して居るのは、原意をよほど離れて居る様に思はれる。今私の見解によつて、この文句を英譯するならば、〔I〕“Tao is hid and nameless. It allows all things to use its power freely, and enables them to live their lives.”とでもなすべきであらう。○「勤而行之」が「而勤行之」、又は「而勤行」となり、「聞道大笑之」が「聞道而大笑之」となり、「建言者有之」が「建言有之曰」となり、「類」が「類」となり、「辱」か「驕」となり、「儉」が「媮」となり、「渝」が「輸」となり、「希聲」が「稀聲」となつて居る異本もある。

評論 この第四十一章は、まづ冒頭に於て、三種の人物の道に對する態度を叙し、道の眞諦の崇高にして、小人、愚者の理解し得るものにあらざることを云ひ、次に、古の建言（故諺）十二箇を列擧し、その初の八句に於て、道に即せる者の行爲が、道に即せざる者の眼に、如何に映するかを叙し、次の四句に於て、道に即せる事物の偉大性を叙し、「道隱無名」の一句を以て、暗に、「明道若昧、進道若退、夷道若顯、上德若谷、太白若辱、廣德若不足、建德若偷、質直若論、大方無隅、大器晚成、大音希聲、大象無形」の十二句を結び、最後に、宇宙人生に於ける道の効用を述べたものである。

第四十二章 (道生一章第四十二)

本、文 道生_レ一、一生_レ二、二生_レ三、三生_レ萬物。萬物負_レ陰而抱_レ陽、冲氣以爲_レ和。人之所_レ惡、唯孤寡不穀。而王公以爲_レ稱。故、物或損_レ之而益、或益_レ之而損。人之所_レ教、我亦教_レ之。強梁者、不_レ得_レ其死。吾將_三以爲_二教父_一。

新讀方 道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は萬物を生ず。萬物は陰を負ひて陽を抱く。冲氣以て和することをなす。人の惡む所は、唯孤寡不穀のみ。而して王公は以て稱となす。故に、物或はこれを損して益し、或はこれを益して損するなり。人の教ふる所は、我もまたこれを教ふ。強梁なる者は、その死を得ず。吾は以て教の父となさんとす。

新字解 □道生一——これは、冲虚なる道が、現象化したことを云つたもので、茲に道とは、無の状態にある道、一とは、有の状態になつた道を指したものである。□二三——二は天地、又は陰・陽を指し、三は、天地・冲氣(道の活力)の三、又は、陰・陽・冲氣を指したものである。□萬物負陰而抱陽——これは、文字上では、萬物は陰を背にし、陽を腹にして居るの義であるが、實は、萬物の創成とその存續とは、陰と陽とに因るものであることを云つたものである。□冲氣——これは、冲

虚なる道が、現象界に於て、萬物を創成し存續せしむる活力を指したものである。□爲和——調和、協調、親和の作用をすること。この爲和の主格は、冲氣である。□孤寡不穀——これは、第三十九章にある「孤、寡、不穀」と同義。□或損之而益或益之而損——これは、『書經』(大禹謨第三)に「滿招損、謙受益、時乃天道也。」とあるのと同義の言葉であつて、「自分で謙遜すれば、他人が自分を尊敬するし、自分で高貴に構へて居れば、他人が自分を輕蔑する様になる。」の意。□人之所教我亦教之——これは、第二十章に「人之所畏、不可不畏」とあるのと同句法の言葉であつて、「他人の人人の教へることは、老子も教へるが、老子の教へ方は、他の人人のとは異つて居る。」の意。□強梁者不得其死——これは、吳澄が「梁、亦強也。以木絶水、以木負棟、皆曰梁。取其力之強也。不_レ得_レ其死、謂_レ不能善終。」と云つて居る通り、「剛勇にして強力なる者は、よき死様をしない。」の意。□教父——「教育の第一義」とか、「教育の根本義」とか、「教育上の黄金律」とかの意。

新譯 虚無の現象化する様子を觀察して見ると、宇宙人生の根本原なる虚無——冲虚なる道——が、開發してまづ有の状態になり、その有が分れて陰陽の二となり、その二の上に、更に道から冲氣が発生し、茲に、陰と陽と冲氣との三が生ずるのであるが、天地萬物の創成と、その存續とは、その

三の親和によるものである。即ち、如何なる事物でも、陰と陽によつて支持されて居るのであるが、その陰と陽とを、そのものの上に親和、協調させて、そのものの創成と存続とを可能ならしめるものは、冲虚なる道の創生力とも稱すべき冲氣である。要するに、天地間の現象は、冲虚なる道から現象化した陰と陽と創生力との集散、離合せるものに外ならない。孤とか寡とか不穀とか云ふものは、世人の嫌忌するものであるが、王公はこの様な好ましからぬ名稱を以て、自からを呼んで居る。それは何故であるかと云ふに、すべて自分で謙遜な態度をとつて居れば、他の人人は自分を尊敬してくれ、自分で偉らばつて居れば、他の人人から、却て輕侮されるからである。世の中には、教育と云ふものがあるが、人が教育に従事するならば、老子だつてそんなことは出来る。併し老子の教育は、高貴になれ、富貴になれ、強大になれと云ふ様なことを教へて居る世の中の人人の謂ゆる教育とは、その趣を異にして居る。無暗に剛勇を誇り、強大を誇つて居るものは、逆も善き死様はしないから、老子は常に、柔になれ、弱になれと教へ、これを老子の教育の根本義として居るのである。

考證 □「道生一一生二生三三生萬物」と云ふ文句を、レツグは、〔I〕“The Tao produced One; One produced Two; Two produced Three; Three produced all things.” (道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は萬物を生じたり。)

生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は萬物を生じたり。と英譯し、チャイルスは、〔G〕“Tao produced Unity; Unity produced Duality; Duality produced Trinity; and Trinity produced all existing objects.”

(道は一元を生じ、一元は二元を生じ、二元は三元を生じ、三元はすべての存在物を生じたり。)と英譯して居るが、原文句を忠實に譯さうとすれば、まづこの様に譯するより外、詮方ない様に思はれる。□「萬物負陰而抱陽冲氣以爲和」と云ふ文句を、チャイルスは、〔G〕“These myriad objects leave darkness behind them and embrace the light, being harmonised by the breath of Vacancy.”

(これらの萬物は、その背後に暗黒を存し、冲氣に調和されて光明を抱く。)と英譯し、レツグも、これと大同小異の意義に英譯して居るが、何れも私の見解とは相異して居る。今私の見解によつて、これを英譯するならば、〔I〕“All things are backed by the negative essence of Tao, and faced by the positive essence thereof, both of which are harmonized by vital power from the void.”とでもなすべきであらう。□「人之所惡唯孤寡不穀而王公以爲稱」と云ふ文句を、レツグは、〔I〕“What men dislike is to be orphans, to have little virtue, to be as carriages with naves; and yet these are the designations which kings and princes use for themselves.” (人の忌厭する所のものは、孤兒たること、寡徳なること、無穀の車の如きことこれなり。されど、これらのものは、王侯

の自からを呼ぶに使用せる稱號なり。)と英譯し、寡と不穀とを第三十九章に於ける如く、「徳の少なきもの」と「穀のなき車」の意に解して居るが、これは私の見解とは相異して居る。(第三十九章(考證)参照)私の見解によれば、これは、(I) "What men dislike is to be orphans, helpless persons or good-for-nothing ones; and yet kings and princes appropriate these to them for their own designations." とでもなすべきであらう。□「故物或損之而益或益之而損」と云ふ文句を、レツグは、

(I) "So it is that some things are increased by being diminished, and others are diminished by being increased." (そは、あるものは、減ぜらるることによつて増され、他のものは、増さるることによつて減ぜらるればなり。)と英譯して居るが、私の所見では、これは誤譯の様に思はれる。この文句は、僧徳清が「侯王不自損、則天下不歸。故堯舜有天下而不與。至令稱之。澤流無窮。此自損而人益之。故曰、或損之而益。若夫桀紂以天下奉一己。暴戾恣睢。但知有己、而不不知有レ人。故雖有天下、而天下叛之。此自益者而人損之、故曰、或益之而損。」と云つて居る通り、自分で尊大ぶり、傲慢な風をして居ると、その結果は、他の人人から屈辱を蒙る様になり、その反對に、自分で謙遜な態度をとつて居ると、却て他の人人から尊敬せられることを云つたものであるから、この見解によつて、今これを英譯するならば、(II) "This is because when they humble themselves they will be honoured; when they honour themselves they will be humiliated." とでもなすべきであらう。□「人之所教我亦教之強梁者不得其死吾將以爲教父」と云ふ文句を、レツグは、

(I) "What other men (thus) teach, I also teach. The violent and strong do not die their natural death. I will make this the basis of my teaching." (他の人人の斯く教ゆる所のものは、我も亦教ゆる。兇暴、強力なるものは、その死を得ず。我はこれを我が教の基となさんとす。)と英譯して居る。(I)の "Thus" (斯く)は、"The violent and strong do not die their natural death." (兇暴、強力なるものは、その死を得ず。)の一句を指したものだと思はれる。沈一貫も「建言有レ之、彊梁者不レ得レ其死。」と云ひ、「老子元翼」にも「金人銘曰、強梁者不レ得レ其死、好レ勝者必遇レ其敵。蓋古人嘗以レ此爲レ教。而我亦教レ之。」とあるが、これは、「孔子家語」(觀周第十一)に「孔子觀レ周。遂入ニ太祖后稷之廟。廟堂右階之前、有ニ金人ニ焉。參ニ緘其口、而銘ニ其背。曰、古之慎レ言人也。戒之哉。無ニ多言。多言多レ敗。無ニ多事。多事多レ患。安樂必戒。無レ行レ所レ悔。勿レ謂何傷。其禍將レ長。勿レ謂何害。其禍將レ大。勿レ謂不レ聞。神將レ伺レ人。罔罔不レ滅、炎炎若何。涓涓不レ塞、終爲ニ江河。綿綿不レ絶、或成ニ網羅。毫末不レ扎、將レ尋ニ斧柯。誠能慎レ之、福之根也。口是何傷、禍之門也。強梁者不レ得レ其死。好レ勝者必遇レ其敵。盜憎ニ主人、民怨ニ其君。……」とあるのに憑據したものであ